

569-167



1200501517763

569

167

5. 7. 14

21821

日本探偵小説全集

別冊

納本

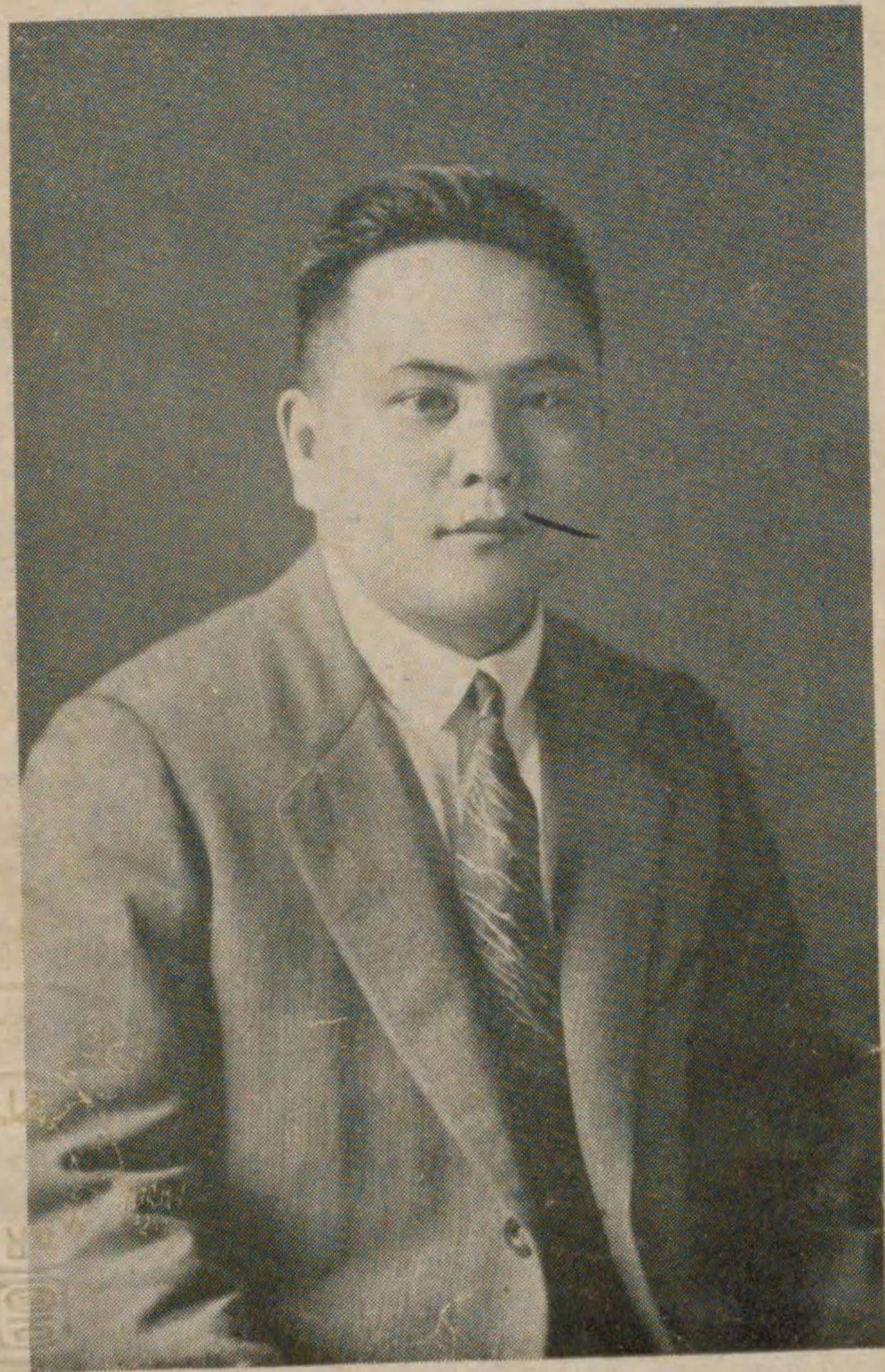


大下字陀兒集



改造社





著 者



~~569-167~~

目 次

闇やみの中なかの顔かほ……………三

金口きんぐちの卷煙草まきたばこ……………一七五

秘密結社ひみつけつしゃ……………一〇五

なば山荒やまあらし……………二二七

碧漾莊へきやうそうの主人しゆじん……………二五三

ざん子この靴下くした……………三一一

銀座綺譚ぎんざきたん……………三四一



山野先生やまのせんせいの死し……………三六一

星史郎ほししろう懺悔録ぜんげろく……………三八一

蛞蝓綺譚なめくぢきたん……………四二一

死しの倒影たうえい……………四五二

コント(三篇)……………四九三

闇の中の顔

はしがき

學校にゐた頃、試験勉強に飽きが来ると、私はすぐに河岸の親戚へ出掛けて行つた。隅田川の岸に、恰度×セメント工場と向ひ合つた位置にある家で、二階からは一目に河面が見渡せた。河蒸気や泥舟や、時によると仲間の漕ぐボートなども眼に入つたもので、さうした景色をものゝ二時間も眺めてゐると、頭の中が大變に澄んで来る。そこで再び學校の寮へ歸り、辭書をバラバラとめくり始める、とかう言つた寸法なのであつた。

さて或る時のことだつたが、私はふと妙なことを考へた。何かといふと、望遠鏡で河向うの家を覗いたらと思ひ付いたのであつて、私は到頭、學校の物理教室から望遠鏡を持ち出して了つた。覗いて見ると、眞向ひに灰色の城の様な一廓があつて、それは先に言つた×セメントの工場だが、それを越すと可成大きな森が見え、森から横へそれて一町程、仲々立派な洋館があつた。で、望遠鏡がその洋館に向けられた時、私はびたとその筒先を停めたのだ。學校で同じクラスの

宇津木壯平が、何と言つて現したらいゝものか、兎に角大變に美しいお嬢さんと、然もたつた二人きりでそのベランダにゐるではないか！ 間もなくそこへは、ひどくハイカラな男が現れて来て、そのお嬢さんを連れ去つて了つたが、私はへんな氣持でそれを眺めてゐたものである。

さて然し、後になつて考へて見ると、その時の宇津木壯平は、それより二三日前その洋館の一室で行はれた、實に奇怪なる美人慘殺事件に絡まつて、あらゆる疑惑と苦悶との渦中にあつたわけである。私は今、その怪奇なる事件のいきさつを物語らうとするのだが、便宜上、これは宇津木壯平自身が物語つたまゝに書き綴る。従つて物語中「私」といふ第一人稱は、宇津木壯平を現すものと御承知が願ひ度い。作者たる私は、忠實に、そして出来るだけ順序よく、彼の物語をお取次するのに過ぎないのだ。

隣り同志

「あ、お父さん！」

あの日のことを、それは六月四日のことであつたが、私は随分下らないことまでもよく覚えてゐる。ボートの練習でへとへとに疲れて歸宅した私は、歸るとすぐに臺所の口元で、はつとする

様な思ひに打たれたのだつた。女中も置かずに、父と二人きりの生活だつたから、已むを得ないと言へばそれまでだけれど、父は不恰好な手付きで庖丁を使ひながら、あれこれと夕飯の仕度をしてゐたものである。

「私がします」

さう言ふと、父は首を振つて言つた。

「いや、儂にだつて出来る。お前はチャブ臺を出しとくれ」

つい四五日前までは、深川本銀町の警察署長を勤めてゐた父である。名は孝作といふのだが、さうした父の姿を見るといふことは、私には可成辛いことであつた。私はいつべんに身體の疲れを忘れて了つた。

「辭職したからね、女中に暇を出したよ」理由は詳しくは説明して呉れなかつたけれど、父は署長の職を辭した時に、その辭令を私に見せながら、暢氣さうに言つたものだつた。「なにね、引責辭職といふ譯なんだ。新聞にも出てゐたが儂とこの怪事件といふのを知つとるだらう」

いつたい、父の職務上の事柄に關しては、私は一切口を出さないことになつてゐたので、心配しいしい、わざとこれまで訊ねずにゐたのだが、そして新聞記事もまるで茫漠としたものだったので内容は少しも判らなかつたけれど、とにかく本銀町署の怪事件といふものは、餘程混み入つたものであるらしかつた。なんでも、署の金庫内に納めて置いた重要な書類が、白晝盗み出されたといふ様な事件である。新聞では「探偵小説そのまゝの怪盗」などと、可成センセイショナルな小標題付きでそれを報道してあつた。

「辭職が當然だといふのだ。世間でね、さう言ふのだ。儂が辭職して了ふと、到底あの犯人は探し出せないことは別つてるのだが、どうもこれは慣例で仕方がない。犯人を探し出した上で辭職するのがほんとなのだが、悪い慣例に従つて引責辭職といふことになつたのだよ」

盗まれた書類がどんなものであつたのか、それに就いて父は一言も觸れなかつたが、さう言はれて見ると、女中に暇を出したといふその心持はよく判つた。「浪人しても、質素にさへして行けば、お前の學資だつて充分だし、棲み古したこの家も移らなくて済むよ」父は前々からそんなことを言つてもゐたし、それにさうした事情で辭めたのでは退官手當もひどく薄いのには違ひなかつた。私としては男手だけの自炊生活に對して、少しも不平を言ふことは出来なかつた。そして、實を言ふと不平どころではない。父のさうした處置を大變有難くさへ思つたのである。何故といふに、私の家のすぐお隣りには、私の戀人志村陽子の家があつたからである。この際、家に移ら

ずに済むのが何よりの喜びであつた。

陽子に就いては、語るべく非常に多くのものを持つて居るが、それは追々に話すことにしよう。茲には彼女が、美しさや聡明さや敏感さや——それは勿論私だけの感じだつたかも知れぬが——さうした美點を澤山持つてゐて、實に何一つ申分のない女性であつたといふことゝ、それから私達二人が、その頃にはもう二三年前からの戀仲であつたといふことを、説明して置けば充分であらう。陽子の父親と私の父とが、私が物心付いて以來ずっと隣り合つて住みながら、曾一度も往來しなかつた程不和であつたのが、不安と言へば大きな不安でもあるけれど、私達二人の間は極めて自由だつたし、二人の將來には何等の不幸も豫想されなかつたのである。この家さへこのまゝに居られるなら、私はさう思つて父の處置を喜んだものだつた。

で、話を元へ戻すが、その日も私達父子は淋しく、然し、睦しく夕餉の膳に向つたのであつた。

「お前の學校のボートレースはいつかねえ」

「來月の今日、試験が終るとすぐです」

「農も浪人で退屈だから、見物に行くかナー」

「えゝ、是非。僕はトツプです」

「さうかね、農も、船にゐた頃はトツプを漕いだ。もう長いことオールを持たないナ」

そんな話をしながら箸を動かしてゐると、玄關から細い聲で「御免下さい」といふのを聞いた。立とうとしてまごつくしてゐると、父の方が先きに立つて玄關へ行つて來た。

「濟みませんでした。誰ですかお父さん？」

「いや、行つて見たら誰もゐなかつたが、手紙が投げ込んであつた。陽子さんからのだから、女中が投げ込んで行つたのだらう」

「あ、それは——」

少し、きまり悪く思つたが、父の手から受け取つたのを開封すると、薄つぺらなレターペーパーに、鉛筆の走り書きであつた。

——急にお話し申上げたいことがございます。八時ごろお出掛け下さいませ。陽子——

陽子からの手紙が、女中の手に依つて私の家へ届けられるのは、さう珍しいことでもなかつたけれど、私は妙に不安を感じた。字體の亂れた、殊に事務的に時間まで定めてあるのが、何となく、氣にふつた。

「行つて来て下さいですか」

「あゝ、行つて来るかい」

洗濯したばかりの學校の制服に着換へて、私は八時きつかりに家を出たのである。

震災前の深川は、可成ゴタ／＼した土地であつた。電車通りはともかく、一步裏町に入ると随分ひどかつた。隅田川を川蒸氣で下つて、元南町の船着場から上つて見ると、殊にその感が深かつた。安物のナイフを作る工場があるかと思へば、小料理屋がある。狭い通りの兩側には貸船屋、ペンキ屋、古金屋、桂庵、柳川なべ、さう言つた種類の家々が、高低思ひ思ひの軒を並べてゐて、而もそれ等の屋根へは、セメント會社から間断なく白い灰が降りかゝる。瀝青色に澱んだ堀割には時折猫の死骸などが浮んでゐるし、そしてそのすぐ下では泥舟のお内儀さんが平氣でサタノ、米を磨く。大體こんな風の土地柄であつた。

私の家は、この元南町から云ふと恰度有中合せになつた西八軒町にあつて、元南町を船着場から眞直に一町足らず突き抜けて、耳無稻荷といふ小さい社のところから右に折れると、その西八軒町に出るのだつたが、この通りだけは割合に静かな街であつた。

街の角に、二階建の、この界限には珍らしく立派な洋館があつて、門に掛けられた

昭和拾四年八月拾日

調査

自
至
一
二
頁
頁

落丁



「陽子さんも、近頃は前よりずつと快活になつたぢやないか」
 「えい、でも、さうしないとおたし、お母様より年寄りみたいになるんですもの」
 私達はそんなことを言ひ合つて笑つたものだった。

真紅の妖蛇

マンテルピースの上の置時計を見ると、私の心は段々焦燥しくなつて行つた。
 「あら宇津木さん、陽さんのところへですか。おやあね、別館の方へ行きなすつたらいいでせう。陽さんにはあたしから知らせときますから」
 私が志村家の門を潜ると、思ひ懸すそこで私は蘭子夫人にはたと出逢つた。そして夫人は、私をすぐに、例の細長い別館へ案内して呉れたのだけれど、それからたつぷり三十分も過ぎてゐるのに、陽子は一切顔を出さないのだ。別館の内部といふのが、それは陽子すら這入つたことがないと言ふ程だったので、私には可成物珍らしくも感じたけれど、それにしても陽子は遅かつた。耳を澄ませると大川の方から、時々、ドコツ、ドコドコ、ドコドコドコといふモーターボートの音などが聞えて来る。

「随分待たせる」私は思はず呟いて見た。

そこは、派手な、然しどうかするといかにも趣味深い調度なども眼につく、洋風の部屋であった。中央の丸テーブルや、それを圍んだ四脚の椅子などによつて、それが應接室として用ゐられることも判つたし、北側の壁に沿つて床から段々に高くなり、遂には天井まで届いてゐる風變りな書棚と、東の窓に喰付けて据ゑられた四角な机によつて、それが又書齋ともなることが判つた。水色の絨氈がその部屋を非常にすが／＼しく見せ、紫檀の飾棚や瀬戸の置物、印度産の寄木細工なども置いてあつた。

南の窓寄りに置かれた、居心地のいゝ長椅子に半分横になる様にして、私はそれでもちつと陽子の現れるのを待つてゐるうちに、私はふと妙なことに氣が附いた。それ程美しく飾られた部屋であるのに、西側の壁の隅に只一つ不吉なものが掛けられてゐるのだ。それは質素な黒柿の額縁に納められた、陽子の母親の肖像畫の眞下であるが、細長い箱の様なものがぶら下がつてゐるのだのだつた。何故不吉かと言へば、その幅二寸に長さ七八寸程の箱には、麗々しく黒の水引がかけられて、然も蝶形黒色の喪章さへも上部に結び付けられてゐるのではないか！

椅子を運んで、その上に乗つて箱をちつと見詰めると、私は思はず、あつ！と言つて小さく

叫んで了つた。

「結納目録！」

なんと、さう書かれて居たのである。結納と言へば結婚の贈物ではないか。それがかう

章を付けてゐるのだ。私は暫時、ぼんやりとして椅子の上立つてゐた。で、凡そ二三分もその箱を眺めてゐたが、その時になつて私は、漸く扉の外に軽い衣摺れの音を聞いた。やつと来たナ、さう思つて椅子を下りると、そこへ現れたのは蘭子夫人である。夫人は先刻見た時とはがらり變つた夏仕度に盛装してくつきりと皎い顔を綻ばせ、手には褐色の瓶と二つのコップとを載せた、銀製の盆を持つてゐた。

「陽さんは随分待たせるのね。退屈したでしょ」夫人は心持首を傾げる様にして言つた。

「え、もう四十分も」私は夫人の餘りの美しさを、眩しい様に感じながら答へた。「退屈でせうと思つて、飲み物を持つて来てあげたのですよ。あたしもお相手する積りなの」夫人は、どうしたのか左手で瓶を取り上げて、琥珀色の液體を二つのコップに注ぐ。一つを私の手に渡して、長椅子へ斜向きに腰を下ろした。

蘭子夫人の美しさを、私はそれまでに一度でもしみ／＼と眺めたことはなかつた。で、その時

さうして二人きりで差向ひになると、否でも應でも、私はその美しさにびつたり向き合はねばならなかつたが、それは、始めて逢つた人の様に、華かに色つぼく輝いて見えた。

夫人の美しさを、實は私はあまり言ひ度くない。けれども、それから後の私の心の動き方を理解して貰つたり、或は又多少なりとも私の行動に對する非難の聲を緩めて戴いたりする爲には、矢張り或る程度までは説明して置いた方がいゝかと思ふ。實際、その時の蘭子夫人は、ぱつとした光の花の様な、そして又情熱の花の様な見えただつた。縮らした髪となやかな頸筋、時期には早い薄物を透して、肌はなめらかに息づいてゐた。帯の上で胸がむつちりと盛り上り、肩から腕、腰から脚への曲線が、不思議なまでに美しく波打ち曲りくねつてゐた。「蚊がしどいわね。窓を閉めてもいゝでせう」夫人がさう言つて東南兩方の窓を閉め切るのを、私た只息づまつて眺めてゐた程であつた。先刻見た不吉の箱の事などは全く打ち忘れてゐた。

「まだお飲みにならないの、おいしいんですよ」

夫人に言はれて、私は周章で氣味にコップの液體を口にした。おゝ、その味の又なんとよかつたことよ。それは、とろりと、舌を溶かして了ふ様な味であつた。

「も一つ召し上げ」

「も一つ召し上げ」

私、ぐつたりとして眼を閉ぢてしまった。

血みどろの顔

「これ、もう起きなさい。壯平、壯平」

呼ばれて、私は物倦く眼を見開いた。障子がすつかり開け放たれて、青い風が室一杯に流れ込

んでゐる。ニコやかな父の顔がちぎりに眼に入った。

「よく眠つたものだねお前は」父は眼鏡を鼻の先きでぶら／＼させながら言つた。「到頭儂も根負けがした。もうお前、午後の二時になるのだよ」

「え、二時に??」

私は吃驚して床の上に起き直つた。

考へて見ると私には、その前夜のことがまるで夢の様なものであつた。陽子から手紙が来た、行つた。別館へ案内された、蘭子夫人が現れた、そして……私には、長椅子の上で蘭子夫人にぎゆつと引き締められたまでしか、どうしても思ひ出せなかつた。それから後は何一つ頭の中に残つてゐないのであつた。見れば、私はちゃんといつもの通りに自分の家の寢室にゐて、壁には、

志村邸へ着て行つた筈の制服すらも掛けられてゐるのだ。いつたい、いつどうして自分はこの家に歸つて来たのだらう。もしかすると昨夜の事は夢ではあるまいか？ 私には思ひ切つて、然しおづおづと、父に訊ねて見た。

「お父さん、僕は昨夜何時頃歸つたでせうか」

「はつは、自分の歸つた時間を知らんとは困つた奴だね。さうさ、九時一寸過ぎかな」

「え、そんなに早く——」

「いや、はつきり覚えてはゐないが、それより少しは遅かつたかも知れないね。お隣りで酒でも飲んだと見えて、ひどく酔つてゐた様だよ」

「で、僕が寢床を敷いて寢たんですか」

「いや、僕が久しぶりで寢かし付けて見た。寢巻を着せるのが大變だつたが、殆んど廿年ぶりで

あんなことをして見たよ」

ずつと幼い頃に母親を失つた私は、それ以來を父親一つの手で育てられて来たのである。父としては、この大きくなつた私を寢かし付けるについても、その昔のことを懐しく思ひ起したので

へ行つて来た事が判つたし、前後不覺になりながら、それでもどうやら自分の家へ歸つて来たところを見れば、とにかく志村家を辭すまでは自分の意識で行動してゐたと考へるのが至當であつた。幸にも父は、少しも私の腹の中を知らない様子で、何事をも訊ねずにそれつきり書齋へ這

入つて了つたけれど、私はもう一度、前夜のことを、
つた。

が然し、それはいかに思ひ出さうとしても、結局無駄なことに過ぎなかつた。最後の方がひどくぼやけてゐた。夫人の熱い唇を感じたそれ以後のことは、切り取られたフィルムの様にはつきりと記憶の中から抜け落ちてゐるのだ。あの忌まはしい情痴の戯れがどこまで行つたのか、それすらもはつきりとしなかつた。が、それがどうであらうとなからうと、私の心は段々苛立たし

くなつて行くのであつた。その時になつて考へて見れば、蘭子夫人の言つたことは、どれと言つて信用の出来さうなものは一つも無い。陽子が夫人の弟に接近しつゝある、そんなことを、私

はいつたいどうして多少でも信じたものだらう、而も、だらしなく夫人の誘惑に負けて行つたのではないか！ 夫人がああ部屋に姿を現した最初の瞬間から、私には既に充分、さうした誘惑

陥るべき弱點を持つてゐたのではないか！

妖蛇！

私は心のうちでさう叫び続けながら、然し自分自身を激しく叱咤しながら、すつぽりと被つて、悶え苦しんだのであつた。

「もし、ご免下さいませ、もし！」

玄關に當つて、消魂ましい女の聲がしたのは、午後の三時頃である。私は、どきつとして耳を澄ました。父がすぐ出て行つた。

「あ、陽子さんちやありませんか」父の聲は、私の胸にどんなにひりやり響いたことであらう。私の顚顚には、じわくと汗が出た。

「あの、大變でございます。お母様が……」陽子の聲は私の耳へつーんと突き刺さつた。

「ふむ、お母様が？」

「お母様が、別館の方で殺されなすつたのです。父もをりません。来て下さいまし」がばと床を蹴つて立ち上ると、私は夢中で玄關へ走り出た。

「陽子さん、どうしたんですつて？」

「あゝ」

陽子は私の顔を見ると同時に、よろ／＼として倒れかゝる。それを兩腕に抱き止めた父は、「壯平、水を持って来い！」と周章せずに言つた。

私はこの時、父をほんとに頼もしく思つた。流石にかうした場合にはよく手馴れてゐて、私と言へばまご／＼するばかりなのに、父は忽ち陽子を介抱して正氣に甦らせ、それから段々に彼女の昂奮を静まらせて、さて、ゆつくりと事情を訊き始めたのである。私は、おど／＼してそれを聞いてゐた。

「………で、お父様は昨日の朝から名古屋の方へ行つてまだお歸りにならないし、二時になつてもお母様のお姿が見えないのは、きつとお母様も後から名古屋へ行かれたのだと、そんな風にお思つてをりました。で、もし前に、相崎さんが、別館の方にお母様のお履物のあるのをお見附けになつたのでした。相崎さんが不審がつて這入られると、その部屋の入口の扉には、しつかり錠が下りてゐたのださうですけれど、錠穴から覗くと、血が、血がいつぱいだつたのです。皆さんが騒いで、行つて見ると、お母様は長椅子の上に、血塗れになつて絆切れてゐなすつたのです」

陽子は、次第に平生の聰明さを取り戻したと見えて、割合に順序よく話して聞かせた。

「ふむ、で、室内の様子は？」父は冷静に訊ねた。「そこらを取り散らされてみましたか」
 「別に、變つた様には見えませんでした」
 「いつもの儘だったのだね。窓の方は明いてましたか」
 「いゝえ、最初は窓から這入らうと思つたのですけれど、皆んな内側から錠が下りてゐて這入れ
 ませんでした」

「ほう、するとあなた方は何處から這入りなすつた？」
 「入口の扉を破つて這入りました。あの部屋は何故か特別扱ひで、私にすら鍵を渡さなかつたの
 ですし、それに内側から錠が下りてゐたのです」

「ほう、なる……」父は暫時腕を拱んでゐた。「するとこれは自殺かも知れませんが。お母様の姿
 勢はどんな風でした」

「お母様は、長椅子の上にゆつたりと横になつて居られる様に見えました。恐ろしくて、ちらと
 見ただけですけれど……」

「さうでせう。恐ろしかつたでせうね」私は始めて口を出した。「陽子さん、僕これからすぐ行き
 ます。あなたは、もうこちらに休んでゐた方がいゝですよ」

すると、父は私を叱り付ける様にして言つた。

「何を言ふのだ壯平、お前は行つても役に立たん。そんな場合に家人以外の素人が立ち會つては
 ならんのだ。で、陽子さん——」と父は再び陽子に向つて言ふのだつた。「警察へは知らせました
 か」

「え、相崎さんが……」

「相崎さんといふのは、誰ですか」

「お父さん」私は陽子に代つて説明した。「その人は志村さんのところの食客です。元は軍人で、
 退役陸軍中佐とかいふんです。軍人らしくもない、きよとくした人ですけれども——」

「お前に訊いたのではないよ」父は又私を叱つた。「で、警察へ相崎といふ人が行つたのですね。
 本銀町署でせうね」

「えい、相崎さんが本銀町署を電話で呼び出してをられるのを聞きながら、妾はこちらへ馳け付
 けて参りましたの」

「ふむ」父はちつと何か考へてゐた。

「本銀町と言へば、お父さん、お父さんの知つた人がゐる筈です」

私が出すと、父は又しても鋭く私を睨んでから言った。

「えーと、本銀町なれば、儂が腹心にしてゐた田毎といふ刑事が来るでせう。あれが来れば大丈夫です。儂も平生からあなたのお父さんと不和でして一寸行きかねるけれど、田毎君が来るからには、安心してゐることが出来ます。陽子さん、あなたは、も少しこゝで氣を休めてから歸られたがいでせう。そして壯平、お前も心配だらうけれど」と、そこで始めて父は、平生通りの溫和な言葉付きになつて云つた。「田毎刑事が来れば、萬事もう安心して宜敷い。後に儂があゝの男を呼び寄せて事情を聞いて見る。お前は矢張りお隣りへ行かん方がよいのだ。關係のない者が、さうした場所へ顔を出すといふことは、徒らに判檢事などの判断を迷はすに過ぎないのだ。判つたね」

「はい」

父の職業的意識が、出来るだけ無關係者を除外しようとしてゐることは判つたが、その實、私は、或は最も深い關係を持つてゐるのかも知れない、などと思ひながら、私自身としても氣が落ち着くと共に恐ろしくなつてゐたので、素直に父の言葉に従つたのである。

一日那樣が御旅行先からお歸りになりました。

風變りな兇刀

さう言つて志村家の女中が陽子を迎へに来たのは、それから一時間半程の後である。私は、蒼ざめた顔に僅かの生氣を浮べて歸つて行く彼女の姿を、いたくしく見送つた。

父には無斷で、そつと志村家へ行つて見ようかしら、私はその日から翌日の朝へかけて、幾度それを考へたか知れなかつた。戦き怯えた陽子の顔が、拭つても拭つても眼に浮ぶ。曠方になつてとろとろと眠ると、私は不思議な夢を見た。

廣い廣い原つばであつた。緑の草原には白いチヨークの矢印がある。誰とも知れず耳元で、そこへは雷が落ちるのだよ、と教へて呉れた。野の遠い／＼果に、學校にある梁木の様なものを立てゝあつた。何かと、ぶらり／＼と揺れてゐるので近づく、それは硝子で作つた紋首臺である。絞められた男は、いゝ聲で唄つてゐた。

親の情がねえ、ホイ、

笠のオ臺よオ、アラ、ホイホイ。

男がやがてこちらへ向くと、それは血みどろなスフィンクスの顔である。ニタリと笑つたかと

思ふと急に四邊が暗くなり、スフィックスは女の蒼ざめた顔になる。闇の中から、その女はゲラゲラと嘲り笑つた。

眼覚めると、私はびつしよりと汗であつた。夢の中の最後の顔が、どうもどこかで見た様な気がして、眼先から消え失せない。考へてみると、前夜、蘭子夫人に抱き寄せられた時に、ちらつと窓の所に女の顔を見たことを思ひ出した。そして「陽子さん」と私が叫んだことも不思議に思ひ出した。闇の中の顔、陽子、そして夢の女、私はぞくぞくと身顫ひを禁じ得なかつた。

顔を洗ふと、ふつと思ひ付いて私は、電車通りまで走つて行つて来た。朝刊新聞を出来るだけ多く買い集める爲であつた。學校へは到底行く氣がしない。父は書齋で、私は臺所で、一心不亂に新聞を讀んだ。どれもこれも同様であるが、東京××新聞が最も詳しくそれを報道してあつた。

△自殺か他殺か？ 美人の屍體

深川區西八軒町一旭羅紗會社重役志村剛造氏（五二）邸宅では、昨日午後二時半に至るも夫人蘭子（三〇）の姿が見えないのに不審を抱き、同家食客相崎寛四郎が方々を探すうちに、同家庭園の一隅に建てられた洋式別館の一室で、蘭子が何者かに慘殺されてゐたのを發見した。判檢事以下出張の上取り調べたところ、蘭子は長椅子の上に正しく仰臥し、心臓部に深さ九厘、幅三厘の突き傷を負つてゐた。室内が全部内側から錠を下ろしてあつた點、何等格闘の模様なき點、傷が肋骨を除けて双先きを右下に向けたものであつた點などより、自殺説も樹てられたが、結局これは他殺であるらしいといふことになつた。何故ならば現場に兇器が見當らない爲であつて、犯行推定時間は四日午後十時前後である。

この記事に依ると、父が昨日陽子に向つて、自殺かも知れないと言つたのは誤りであることになる。で、若し他殺だとすれば、それはいつたい誰の仕業だ。私は考へて恐ろしさに堪へられなくなつた。夢の中で人を殺すのは、必らずしも有り得ないことではない。私がやつたのではあるまいかしら。いやいや、いくらなんでも、そんなことは無い。然し、然し、と私は考へた。父からでも誰からでも、私が一昨夜志村家にゐた時の事を訊ねられたら、いつたい、どう答へたらいいのだらう。いつそ言つて了つた方がいゝのだらうか、それとももう少し様子を窺つてみようか、私は千々に心を碎きながら、さうして結局どちらとも決定出來ずになるべく父の眼を避ける

ことに努めてゐた。私は、臆病で卑怯なのであつた。

午前十時頃になると、田毎刑事が訪ねて来て呉れた。父は、私が新聞を買ひに行つてゐる間に、刑事へ電話でも掛けたものらしかつた。

「あ、よく……父がお待ちしてゐました」私はかう言つて刑事を父の部屋へ案内すると、怖々ながら傍にゐて、二人の對話を聞いてゐたものだつた。

「や、お忙しいところを——」

「いえ、署長さん」ついこの間まで呼び馴れてゐたせゐであらう。刑事はそんな風に父を呼びかけてちよつと照れたが、すぐに又言つた。「實は中々多忙でしてね、昨夜もこの附近に一つ事件があつて、その方へ引張られたのを斷つて來たのです」

「ほう、どんな事件？」

「なに、下らない事件です。この裏通りに耳無稻荷つてのがあつてせう。昨夜あそこ前で若い女が腎部を斬られたんです。陽氣が陽氣ですから、例の變態性慾でせうよ。おきに犯人が擧ると思ひます」

「あゝ、それアまあ大した事件ぢアあるまいがね。」父は言つた。「で、早速だが、お隣りの事件だね、あれを差支へないだけ話して貰へるかしら」

「えゝ、いゝですとも、實は私の方から御意見を伺ひ度いと思ふこともある位です」

「ふむ。で、新聞で見ると、他殺となつてゐるが、あれはほんとなのかねえ」

「他殺ですが、新聞の書いてゐるのは少し違ふ點があります。凶器は発見されてゐるのです」

「え？」父は吃驚して問ひ返した。「兇器が発見されてゐるつて言ふのかね。それでどうして他殺なんだ？」

「儂は、昨日この事件を一寸聞き込んだが、どうも自殺の様に思へて仕方がなかつた。

たゞ、兇器が無いといふのでね。それでは他殺かと思つたのだ」

「そこなんですよ」と刑事は少しく膝を進めた。「署長さん、あんたばかりぢやありません。臨検

に行つた最初の瞬間には、私だつて自殺と思つたものなんです。現場の状態は、たゞ一つだけを

除いて、全く今朝の新聞記事通りですし、発見された特殊の物品と言つては、さうですな、今言

つた兇器と、丸い懷中鏡、えゝ、多分被害者の帶の間からでも滑り落ちたのでせう。その懷中鏡

位のものなんです。あとは凡てその部屋に附屬の品物ばかりぢやありませんか」

私のうろ覚えな記憶を辿ると、蘭子夫人は、例の奇怪な液體を入れた瓶や、その他コップとお

盆とを持ち込んでゐた筈だつた。そしてそれには、おゝ、私の指紋が残つてゐる筈ではなかつた

か！ 自殺ならばともかく、他殺とすれば、あゝ、どうしたらいいのだらう。私はさう思ひ付いて胸をどきどきさせてみたが、刑事は不思議にも、それ等を發見しなかつたであらうか、一言もそれには觸れないのである。訊いて見度いのを我慢して、私は眼を伏せたまゝ、全身を耳にしてゐたものだつた。

「それから傷にしてもさうです。これは新聞記事の通りで、つまり、深いことは深いけれども、肋骨を除けてゐる點や、双先きが右下に向つてゐる點からして、私は一見して、女が右の手に兇器を握んで、それをぐつと左の乳下へ突き刺したものと睨みました」

「なるほど、すると矢張り自殺つてことになる様だが——」父は考へ考へ言つた。

「ところがですナア」刑事は唾を嚙み込みながら言葉を續けた。「醫師も被害者の右掌を開かせて見たのです。するとどうでせう。右掌の拇指際が、かすかではあるが、紫色に膨れてゐるではありませんか」

「……………」

「で、醫師の説明によると、それは拇指屈筋とか云ふ筋肉が、もう長いこと前から、内部の方で化膿しかけてゐたのださうです。つまり、被害者は、その爲に右手の握力が非常に減退してゐた

ことになります。物を確乎と握むことが出来ません。ところが肋骨を除けたにしても、右手で強く兇器の柄を握らない限り、どうしてあんなに深い突き傷を作ることが出来ませう、あれは決して自分でやつたものではないと思ふのですが、署長さん。如何でせうか」

私はそれを聞いて、はつとした。さう言へばなるほど、蘭子夫人は、あの飲物をコップへ注ぐ時に決して右手を使はなかつたのである。必らず左手を用ひたのである。私は刑事といふものが、中々どうして、非常に綿密な注意力や推理力を持つてゐるのに感心した。そしてこれは、父にも同様であつたと見える。父は暫時の間、刑事の言葉を一應吟味するらしく考へてみたが、やがて、ぼんと膝を打つた。

「うむ。さうあれば他殺に違ひ無い。田毎君、君は益々炯眼になつたねえ」

「や、どうも恐れ入ります。これも皆署長さんの御薫陶のお蔭です」と田毎刑事は賞められたのを喜んで、頭を一つ下げた。で、さういふ譯で、他殺といふことが判つたのは、短刀の有無からではなくて、全く別の點からだつたのです。そこでこれは犯人が、極めて注意深くやつて、自殺と見せかけたものだど判りましたが、實は私はもう一つ、實に奇抜な、と言つてこれも矢張り署長さんに教へて戴いたことをこの機會に實驗して見たに過ぎないのですが、非常に面白いトリック

をやつて見ました。成功すると、私は署長さんにうんとお禮を申上げねばならないのです」

「なにかねそれは？」父は平靜な態度で言つた。

「犯罪現場に、犯人が殊更に置いて行つたと思はれる様な物品を發見した場合には、それをそつと隠して置くと、犯人の奴は、必らず周章で、何かしら次の小細工をするといふことを、いつか署長さんから伺つたことがございますね」

「うむ、さうく、そんなこともあつたね」父は相變らず、落ち着き拂つてはゐたけれど、眼には明かに、好奇心に燃ゆる様な、熱心さを現してゐた。

「そこで……」と言つて、刑事がなほも話し続けようとした時に、玄關から高々と案内を乞ふ聲がした。ちよつと耳を澄ましてゐると、刑事はつと座を立つた。

「あ、私を尋ねて來たんです。お宅にゐるのを知らせて置きましたから……失禮します」

さう言つた刑事が、席を外したのは凡そ五分間位の長さでもあつたらうか、再び彼が座敷へ戻つて來た時には、彼は喜色満面といふ顔付きであつた。躍り歩き度いのを、ぢつと堪らへてゐるといふ風であつた。

「？」父も私も、呆氣にとられて刑事の顔を見上げてゐたものである。

「や、署長さん、有り難うございました。教へて戴いたトリックは大成功です。聞いて下さい」そのトリックの成功といふものが、田毎刑事にはどれだけ嬉しかつたであらうか。彼は順序も何も目茶苦茶に話して聞かせたが、それを纏めるとかうである。私も異常な興味を感じてそれに聞き入つた。

田毎刑事が志村家の現場臨檢に赴いたのは、陽子が私の家へ眞蒼になつて駈せ付けて來たのと、殆んど同時刻であつたらしい、刑事は最初、兇器を見付け出すのに骨を折つた。で、屍體の附近を探つてゐると、長椅子の下に敷かれた絨氈が一ヶ所波を打つて捲くれ上り、波頭がべちやんと押し潰された様になつたその蔭に、傷口とびつたり一致する、然し非常に風變りな短刀を見出したのであつた。短刀は、死んだ後に床の上へ滑り落ちたのであらう。そして最初の發見者が、即ち相崎寛四郎がこの室に躍り込んだ時に、それと知らずに絨氈の波を踏み付けて、短刀を見えなくして了つたのだらう。

「矢張り自殺だな。」とも思つたのであるが、そのうちに自殺説が醫師の検屍と共に大分怪しくなつて來たのであつた。そこで刑事は、ふと、宇津木式探偵法を思ひ付いたといふのだつた。例のトリックを行つて見なくなつたのであつた。幸にして家人はいづれも氣が轉倒し、誰一人兇器

のことを気にする者さへ無い状態である。判検事に話して見ると、行つて見てもよいとの言葉、彼は遂に、その風変わりな短刀を、そつと押し隠して了つたのであつた。

「で、新聞にはわざとあゝしたことを書かせたのです。他殺だが兇器が見付からん。兇器さへ部屋の中に見付ければ、或は自殺となるかも知れん、さういふ意味を含ませたのですがね……」

刑事はかう言つて、後を話すのが惜しい様に口を噤んだ。

「ふむ、それでどうした」

父はもうすつかり我を忘れて了つてゐるのが、その鋭い語勢によつてもよく知られた。全く、署長當時の父に立ち歸つてゐる様に見えた。

「いゝですか、先刻来たのは私の同僚なんですが」と刑事は殊更にゆつくり／＼して言つた。「今朝になつて、被害者の斃れてゐた一室から、いゝですか、志村家から届け出たのですよ。その一室の絨氈下から、第二本目の兇器が発見されたといふのです」

「え!?」父も私も同時に聲を上げた。

「而もです。その第二本目の兇器は、最初に私が発見したものと、寸分違はぬ風変りな短刀で、附着した血液は、明かに人血だつたといふのです」

田毎刑事は、一句一句力を籠めてさう言つた。

軍機漏洩事件

田毎刑事と父との間に、それから後どんな會話が取り交されたか、それを巨細に語つて置く程の必要はないだらう。犯罪が計畫的に行はれたものだとか、犯人は相當知識のあるものだとか、従つてこちらが餘り焦つては反つて失敗するかも知れないとか、そんな風に二人の意見が一致したのだつた。刑事が、これからの方針に就いて父の意見を求めると、父は其の度に何やかや指圖をしてやつた。父の本銀町署に出てゐた頃には、かうしたことが恐らく絶えず繰り返されたころであつたらう。

ところで、私としては、それを傍で聞いてゐるうちに、段々胸の中が安らかになるのを感じた。ひよつとして私自身が蘭子夫人を殺して了つたのではないかと、かすかではあるが、さうした疑念が時々私を苦しめてゐたのに、少くとも第二本目の兇器などは私に全く覚えのないことである。刑事の説明によると、その第二本目の兇器は、昨夜から今朝へかけての間に、例の別館に持ちこまれたといふのだが、四日の夜は兎も角として、昨五日の夜は、私は間違ひなく正氣であつた。

「二重人格？」

ちらと、そんなことも考へたけれど、それは餘りに唐突過ぎた怖れである。私は強くそれを否定することが出来た。

「では、署長さんの御意見に従つて、兎に角その短刀の出所を手繰つて見ませう。全く變つた恰好のさうですナ、南洋邊の土人でも使ひさうな、もつとも型は小さいけれど、半月形の短刀ですよ、かう——握り太な柄のところは妙な彫刻がありまして——」

「形が變つてゐるだけに、ぢきに出所が知れるかも知れないね」

「さうです、では——」

歸り際に、二人はそんな風に言ひ合つたものであつた。

刑事が歸ると間もなく、父からは約束通り、志村家に行つたらよからうと言はれたけれど、その場になると、私はふいに行きづらくなつて了つた。何故だつたか、その動機などは全く説明出来ないものだけれども、私の胸中には、思ひも寄らない新しい不安が、黒雲の様に湧いて來たのであつた。あの際に、長椅子の上からひよいと見た窓の顔が、陽子ではなかつたか知ら。私の狂態を戀人に見られたのではなかつたか知ら、何故ともなく、そんな風に思はれ出して來たのである。

それが女の顔らしかつたと、それは前にも言つて置いたが、然し、志村家には女中もゐるのだし、私がさう思ひ出したのには實際理由の附け様がない。けれども、この様な場合に、自分の行動を全く覚えてゐないこと、従つて自分の記憶に全く自信のないことが、どんなに苦しいものであるだらうか、誰にでもそれは想像出来ることだ。

「行かないのかね」

「え、ですけれどもちよつと——」

彼女がどんなにか痛々しく怯えてゐるだらうとは想像しながら、私はどうも志村家の門を潜る氣になれなかつた。行かなくてはならないことを、頭の隅では百も承知でゐながら、私は、晝飯の支度などにも、わざと時間を喰ふ様にしてゐたわけであつた。

が然し又一方では、父と顔をつき合せてゐるの中々苦痛であつた。行つてもよいと言はれながら猶愚圖つてゐることが、忽ち父の鋭い眼に睨まれさうであつた。

「お隣りへは後で行きます。その前に一寸學校へ行つて來ようと思ふのです。ボート部の人を心配してゐるでせうから——」

ボートの練習を一日休んだことを思ひ出して、私はさう言つて家を出た。午後一時頃であつた

かと思ふ。

元南町の河岸から川蒸汽に乗つて大川を逆り、既橋から電車に乗り替へるのが、學校へ行くつもの道順である。船の中には、月遅れの雑誌を賣り付ける小汚い商人が、相變らずの調子で断なく喋つてゐた。

「既橋——」

聲がして船から上ると、思ひ懸けずそこで私は、ボートのコックス——但しセコチヤンの方だつたが——倉知彦六と、ひよつくり顔を見合せた。

「や、どうしたんだい——」

肩には白いズツクの鞆を重たさうに掛け、一世紀遅れた型の麥藁帽子に茶色のリボンを巻いて、倉知はその顰眉の帽子の下から小黒い顔をニコニコと笑はせた。

「宇津木、おまい、昨日ボートをずべつたね」

「あ、少し事件があつてね。今寮へその断りに行くところだ」私は答へた。

「事件？」倉知は不審さうに私の顔を眺めてゐたがやがて言つた。「お前の事件を當て、見ようか——」

「君には想像も出来まい」

「ナニ當るとも、おまいの親父さんの辭職問題だらう。そしてそれが、軍機漏洩事件に關係してゐる。どうだ、その通りだらう」

倉知の言ふのが當つてゐなかつたのは言ふ迄もない。それに、軍機漏洩事件といふのはいつた何處から持ち出した考へなんだらう。豪らぶつた倉知の態度に、私も思はず微笑させられた。

「違ふね。第一、軍機漏洩事件なんて、それは何のことだ」

「違ふかね、さうかい」倉知は私の眼を覗き込む様にして言つた。「嘘だらう。少くとも、軍機漏洩事件を君が知らないつて筈がない。隠す必要があるのかい」

「隠すわけではない。ほんとに僕は知らないんだから——」

「ふうん、知らんのかね、それア迂濶だねえ君は——」倉知は驚いたといふ表情であつた。

「親父さんから聞かなかつたのかい」

「聞かない」

「聞かなかつたか。暢氣な親父さんを持つてるぜ君は。代りに僕が話してあげようか——陽子のこと、學校の寮のことが氣になつたけれど、倉知は自分一人勝手に決めて、私を既橋

私が読み終ると、倉知はすぐに言った。

「判つたらう、え」

「判つた様な、判らない様な——」私は答へた。

「落ち着いて考へれば誰にだつて判るよ。これはね、多くの新聞の中から僕が辛うじて探し出した記事なんだ。殊に、A B Dの三つは恐らく讀んだ人が極めて僅かだらう。で、Cの記事は、これは君も讀んだらうが、この中の〇〇〇署といふのは一目瞭然、本銀町署だといふことが判る。尤も僕は、念の爲に官報で調べて、東京の警察署長中で最近辭職したのは、君のお父さんだけだといふことも確めてはあるが——」

妙なことを執念深く調べたものだと思つて、私が倉知の顔を呆れ氣味に眺めてみると、彼はなほも語を次いだ。

「でね、まだ面白いことがあるんだ。頭隠して尻隠さずつていふ様な記事ばかりだから、A Bが軍機漏洩事件のことを言つてるのは判るだらう。そこで、Bには×××署長の偉勳と書いてある。そしてCには、重要書類を盗まれて某重大事件が行き詰つたとあり、Dは、矢張り之れを包み隠した記事と見ることが出来る。だから僕は次の如くこれを推察した。つまり、君のお父さん宇津木孝作氏がだね、この軍機漏洩事件に關して、犯人搜索上非常に貴重な手懸り、或は書類を手に入れて偉勳を現したが、これを本銀町署の金庫内に收めて置いたのを何者にか盗み出された。で、それが爲に軍機を盗み出した奴が檢擧出來なくなり、君のお父さんは辭職して了つたと、先づ、かう考へるのが當然だらうぢやないか。どうだい君はさう思はないか？」

倉知の推理は、後になつても全くその通りであつたことが判つたけれど、其の時既に私は、一も二もなく彼に敬服して了つた。平生はおどけた話ばかりしてゐる倉知だつたのが、かうして話し合つて見ると、その頭のよいのには私は無闇に感心させられた。そしてその結果は、彼が私に訊き度いと言つてゐた事柄に就いて、何もかも打ち明けて話す氣分にさせられたのである。何を彼は私に訊ねようとしたのか、それは、志村家の殺人事件であつた。

不良青年

志村家の慘劇に就いては然し、流石の倉知もその時まで、私がそれに密接な關係を有してゐるとは知らなかつたらしい。軍機漏洩事件の説明が終ると、今度は別に、背に殺傷事件第廿一號と書かれたノートを取り出して、その第一頁を開きながら、かう言つたものであつた。

「訊き度いのはね、この記事なんだ。君の家は確か深川西八軒町だったらうね。近所だからこの事件に就いて何かしら噂を聞いてゐないだらうか」

示された新聞記事は、例の東京××新聞のそれである。私はぎつくりしながら、それでも隠さずに、志村家が私の家のすぐ隣りであることを話してやると、彼は大變に吃驚して了つた。

「ふうん、さうだつたのかい。僕はね、この配事がなんとなくわざとらしいのに氣が附いて、詳しく調べて見度いと思つてゐたのだが、——と言ふのはね、どの新聞にも書いてあるんだ。兇器が発見されないから他殺だとね、いやに麗々しく斷つてあるぢやないか。僕にはそれが氣になつたのだが、さうかい、君がそのすぐに隣りの家にゐたのかい。そいつは知らなかつたよ」

「いや、そればかりではないんだよ。ボートの練習を、實はその事件で休んで了つたのだ。かういふ譯なんでね——」

私は、五日の午後からその時迄にかけて、重苦しく胸の中に疊込まれてゐた事柄、訴へ度くてめながら誰にも打ち明けられずにゐた事柄を、一時にとつと、吐き出す様な氣持で話し始めて了つた。田毎刑事と父との對談の模様も無論であるが、私としては當夜の事情の方が聞いて貰ひ度かつた。覺えてゐる限りは全部、順序は亂れ勝ちであつたけれども、兎も角一應明らかさまに話して聞かせたのだつた。

萬年筆を忙しく動かして、私は話の要點をノートの餘白へしきりに書き込んでゐた。倉知は、それが終るとすぐに、二度三度ノートを讀み返してから、暫時の間眼を瞑ちて口をきつと結んでゐた。私は彼の思索を妨げまいとして、黙つて彼の様子を覗つてゐた。

「うむ、これは中々混み入つた事件だ」倉知はやがて言ふのであつた。「數學の聯立方程式、根が素敵に澤山ある奴と同じことだ。運悪く下手な方程式から手を付けると、素晴らしく困難な問題になる。君とこのお父さんと田毎刑事とは、二本目の兇器を以て、第一に選んだ方程式としてゐる。なるほど、これはいゝ方法かも知れないが、然しその方程式は、田毎刑事自身が造り出した方程式であるといふ點に於て、少しく問題だと思ふ。つまり事件の根本に存在する方程式ではなくて、その枝に咲いた方程式だ。どうかするとさうした方程式は恒等式になる恐れがないでもない。確かに眼の付け所はいゝ様に思ふが、さうした意味に於いて、我々としては別方面から手を付けるのも必要だ。競争する意味でなしに、間違つた回答を避ける爲に、我々はこれを別方面から見極めようではないか。え、君」

「それで……」私は倉知の明快な言葉に一種の小氣味よさを感じつゝ、後を促した。

「で、今では勿論、何等的確なことは言へないが、僕は、君がその室で見たといふ、窓のところに現れた顔のことが、大變氣がかゝりだ。どうかすると、この顔が、いやその人物が、君と蘭子夫人とのラブシーンを見てからに、何か企んだのかも知れないし、第一、その人物が後になつて、君のことを何んと言ひ出すかも知れない。何しろ君の行動を見てゐるんだからね」

「然し、僕はそれが誰だつたのか、一向見當さへも付かないのだが——」私は氣弱くかう言つた。陽子ではなかつたかと、それを明かに言ふのが譯もなく氣が進まなかつた。

「女か男か、老人か青年か、それも見別けが付かなかつたのかい」

「さあね——」

問はれるのが、ぐんぐんと押される様な氣味合で、私は思はず周章てたが、その時になると、はつと氣の付くことがあつた。闇の中からぼんやりと現れたあの顔は、東の硝子窓に浮んでゐた。そしてそれと反對の西側の壁には陽子の母親の肖像畫が掛けられてゐたではないか！ なあ、なんだ、そんなことだつたのか。私は力負けのした様な心持で、倉知に向つて室内の配置を委しく話した。

「ね、だからあれは肖像畫が窓へ寫つたのだよ」

「なるほどねえ」

倉知は三つ目の蜜豆を、アルミの匙でぐるぐる掻き廻しながら、一寸の間何か考へてゐたが、やがて言つた。「いや、それは君の考へ違ひだらう。君が蘭子夫人に引き寄せられた長椅子は南の窓に沿つてゐたといふね。すれば、その長椅子の上からは肖像畫の影像が見えない筈だ。つまり、北側の壁にあるものだけが、硝子窓に寫つてから君の眼に映じるので、西の壁の肖像は眼に入らないだらう」

倉知は蜜豆の水をテーブルの上に雫して、指で幾本も線を引いた。肖像から出る光と、東の窓から反射される光との、その角度を示して見せるのであつた。

「判つたらう。だからどうしても誰か室内を覗いたことになる。そしてそいつが犯人かも知れないよ」彼は考へ考へして言つた。「が、それは兎も角として、君には當然嫌疑が掛るだらう。田毎刑事が何故、例の褐色の瓶のことを君の家で言はなかつたか、考へ方によつては、その瓶には既に君の指紋を發見して、君を相當に疑つてゐるのだが、お父さんの手前わざとそれを避けたのだとも考へられる」

私は無言でゐたが、さう大して困るとは思はなかつた。まさか陽子が犯人ではあるまいし、す

ると誰だらう、などと思つてゐた。

「で、その次にも一つ聞き度いことがある。夫人は君に、君の戀人の心が夫人の弟へ移つて行つてゐると言つたんだつたね。夫人の弟といふのはどんな男かい」

「いや、それは全く出鱈目だ。非常な美男子だけれど、彼女の心は決してあの男に移る筈がない。私は確信を抱いて言つた。」

「その證據があるかね」

「ない。ないけれども僕は彼女を信ずる」

「つまり、愛を信じるといふんだね、ほう」倉知は少し遠慮勝ちな口調になつて、「然し、女の心なんて當てにならないさうぢやないか。小説なんか皆んなそれが種になるんだらう。そら金色夜叉のお宮つて女、あれだつてさうぢやないか」

恐ろしく古い小説、然も金色夜叉のお宮を持ち出されて、私は少し可笑しくなつた。陽子があんな女とは大變變つてゐることを説明してやらねばならなかつた。

「さうかい、それならいゝけれどもね、で、その男は何んといふ名前だね」

「山座卯吉といふんだ。大正大學の學生だよ」

「え、山座卯吉、さういふ名かい」倉知は、ひよいと首を傾げてから問ひ返した。

「山座卯吉を君は知つてゐるのかね」

「知つてゐるといふ程ぢやないけれど、覚えてだけゐるんだよ。待つてゐたまへ」

倉知は靴の中へ又手を入れた。そしてそこへ取り出したのは、街頭些事第十五號と書かれたノートである。バラリと中程を開いて私の前へ差し出したが、例の如き新聞記事の切抜であつた。

不良青年の大失敗

廿五日午後八時頃築地蓮生橋交番に顔色を蒼白にした紳士體の青年が走り込み、菱の屋ホテル内で何者にか大金を窃取されたと訴へ出たが、何處となく舉動不審の點があり取調べの結果忽ち狂言と判明した。即ちこの青年は大正大學經濟科學生山座卯吉といふもので、常に某男爵令息と號して良家の子女等を誘惑し歩いてゐたが、一週間程前から菱の屋ホテルに滞在し豪奢を極めてゐたものゝ、忽ち宿の支拂ひに窮した揚句、かうした狂言を書いたものと判明、大正大學では當校學生ではないと言つてゐる。

「ほう、こんな奴だつたのかねえ」

私が言ふと、倉知はひどく大人ぶつた口調で答へた。

「これはね、こんなことばかり面白がつて書く東洋新報の記事なんだ。下品な新聞で僕は嫌ひなんだが、切抜いて置くと矢張り役に立つこともあるから妙だらう。で、君はすぐに戀人のところへ行つた方がいゝだらう。不良青年は他のことではまるで低能な奴でも、異性に對すると一種の天才ださうだ。そして僕は、窓から覗いた奴がそいつかとも思ふよ」

氣が附いて見ると、倉知はいつの間にか四杯目の蜜豆を食べ盡して、餘つた菓をテーブルの上に落し、指先で幾つも幾つも顔といふ字を書いてゐた。階書行書草書、さうして Face, Ceat, Chae—小さなテーブル一面に書かれたそれらの「顔」は、次第々々に乾いて消えて行つた。

渦巻く疑惑

大川へ向いた志村家のヴェランダで、私は陽子と二人でぢつと河面の方を眺めてゐた。厩橋際で倉知と別れた後、すぐその足で陽子のところへ行つたのだつた。

向う岸にもこちらにも、氣の早い電燈が手頼りなげな光を放つてゐた。川の中央は流れが可成強い様子で、河岸の倉庫を越して、ところどころ波のうねりが静かに思つて見えた。出たばかりの川蒸気が永代橋へ向つて走り、軸先には波頭を白く盛り上げてゐる。陽子は突然にそんなことを言つた。

思つてゐたのと違つて、彼女は割合に平靜であつた。話の合間々に私を見詰める眞直な眼差しが、何かしら繊細な感情を押し隠してゐる様であつたり、或はそれとなく私の周囲を探し求めるといふ様に見えたり、そんな點が平生と變つてゐると言へば言ふのだけれど、それにしても大して目立つ程のことはない。血腥い事件に怯えてゐる、さう言つたところは少しも見えなかつた。顔は、寧ろいつもより念入りに化粧してあつて、聲は穩かでありはつきりと澄んでゐた。上唇が僅かに可愛らしく突き出てゐて、つまんだ様にくゞれた下唇から顎へかけて、上品さや清浄さや活潑さが充ち溢れてゐた。尤も然し、當然その際の話題の中心となるべき蘭子夫人の死に就いては、私達は餘りに多くを語り合はずにゐた。私は私で迂濶なことは言へないと思つてゐたし、彼女も何處となしにその話題を避け度がる風があつた。私達はたゞぢつとしてお互の心を探り合つてゐた様なものであるが、それにしても彼女は意外に落ち着いた物腰を示してゐたのであつた。

で、三十分程も経つた頃だつた。陽子は氣を換へる様に河の景色が美しいなどと言ひ出したの

だが、その時背後から、私は人の登音を聞いて振り向いた。見ると、白いパンツに鼠色の夏服を着た、背の高い山座卯吉が立つてゐるのだつた。

「あ、宇津木君もおゐりでしたか」と彼は、私に向つては愛想のよい笑顔を見せた。「ところで陽子さん、もう時間ですから出掛けませう」

「あら、さう」陽子は明かに狼狽して見る見る頬を染めながら言つた。「お迎へに来て下さつたの？」

「お約束だもの」山座は手品師の様に細い指先きで、胸のポケットから緑色の紙片を二枚取り出して、それをひらくと見せびらかす様にして言つた。「ほら、切符を買つて来ましたよ」

「何んの切符ですか」私は陽子に低聲で訊いた。

「え、あの——帝劇の切符」

「え、なんですつて？」

私は呆れ返つて山座の顔を見た。殺された蘭子夫人は、當夜、山座と陽子とが帝劇へ行つたと言つたが、それからたつた二日の後に又帝劇へ行くとは——いや、夫人の言葉が嘘であつたにしろ、たところで、明日は恐らく葬式であらうといふ今日、これは又何といふ非道い男だらう。私は腹

しむ様に山座の顔を見詰めてやつたが、彼は一向平氣であつた。

「さ、陽子さん行きませう。遅れるとつまりませんよ」

陽子が、勿論断るだらう、さう思つてゐると、私は言葉も出ない程驚かされた。彼女ははつきりかう言つたのである。

「えい、行きませう」

アツといふ間もない程に、彼女は敏捷に私の傍を離れて行くのだつた。陽子の階段を降りて行く登音と、何か悦に入つた様子で冗談を言ふ山座の聲とを、私は耳の後ろに聞きながら、じーんとするやうな心持であつた。

凡そどれだけの時間が経つたのであつたらうか、私はヴェランダに一人きりで長いこと残つてゐた。金色夜叉のお宮の話をした倉知の言葉が卒然として思ひ出された。山座のことを書いた新聞記事がありありと眼に浮んで来た。怒りが猛然として哮り立つたかと思ふと、突き放された様な淋しさでもあつた。遂に、日がとつぷりと暮れるまで、私は始めて嫉妬の地獄を味つたのである。

「宇津木君ゐるかな。お、ゐる」。志村君があんたに用事ぢやさうぢや。すぐに行つて下さ

れ」

闇の中に聲を聞いて、氣が附くと相崎老人が立つてゐた。夫人の死を最初に發見したといふ退役陸軍中佐である。ひどく貧相な老人であつた。

「志村君があんたに結婚の話をしようといふのぢや」

「え？」

「結婚の話ぢや。無論、娘さんのことぢやらうて、ヒヒヒヒ」

前にも言つて置いた通り、私達の結婚はお互にその父親からの承諾を得てはあつたけれど、剛造氏から私に向つては、それ迄に只の一度でもさうしたことを言ひ出してなかつた。いや、結婚のことばかりではない。剛造氏が特に私を呼んで話をする、それも全然無いことであつた。殊に、今の陽子の態度でもある。斷りを言はれるのだらう、さう思つて私は階下へ行つた。

がつしりした骨格、濃い額の皺、バラバラ音を立てさうな靱い半白の頭髮、そして日に焼けた銅色の顔、さうしたものが剛造氏の特徴である。日本室の床の間に寢棺や焼香臺など型の如く据ゑられて、その座敷の縁端近く、氏は籐椅子に腰を下ろしてゐた。悔み客も女中も、一人もゐ

「警察から埋葬許可證が下りないので、困つてゐますが、まあ、そこへ掛けて下さい。自殺といふことが漸く判つて、明日は多分葬ひが出来るだらうと思ふが——」

剛造氏は言ひ譯の様にかう言つて、前に置かれた椅子を指差す。私は無言で腰を下した。で、相崎老人から豫め言はれた如く、剛造氏の用談といふのは、果たして陽子との結婚問題ではあつたけれど、私が驚いたことには、それが結婚日取りの相談なのである。始めのうち、私は擲揄はれてゐるんぢやないかと思つた。いつたい、棺を前にして結婚の話をするといふのが、既に可成妙な話なのに、氏は遠慮もなくそんなことを相談しかけて來るのである。私は全く途方に暮れて了つた。

「君も知つての通り、この家では最近不幸な事件が起つてゐる。自殺といふことが判つたものの、これは儂の一家としては極めて不名譽なことです。然し君は、これが爲に陽子との結婚を拒む、そんなことは無いでせうな」

剛造氏はかうも言つたし、それから又、私達の間に體の關係があるか、そんなことを訊ねた。それはありません、と答へると、氏はちよつと妙な顔をしたが、然し續いて結婚の日取りを定めようと言ひ出した。それも頗る唐突な申出で、この五六日うち、即ち蘭子夫人の初七日忌が済み

次第、手輕な式を擧げて了ひ度い。ちよつと都合があるから、とさう言ふのであつた。何故こんなことを言ふのだらう。——考へてゐるうちに、私は當然厭な考へに突き當つて了つた。蘭子夫人は、この剛造氏に、殺されたのではなからうか。當夜氏は旅行中であつたといふけれど、それは巧みなる現場不在證明ではなかつたのか。さうだ、この人の性格から見、さう考へても不合理ではあるまい。證據だ。證據を探さなくてはいけない。父に話して、田毎刑事を呼んで——いやいや、若しさうであつたとしたら、戀人陽子はどうなるのだ。父親の犯罪を彼女はどんなに悲しむだらう。して見れば、これは私一人の胸に仕舞つて置くより他はないのだが、——いや、もつと他に考へ方はないだらうか。氏は蘭子夫人を熱愛してゐたのだ。夫人の明るい性格から、この家の陰氣さが一氣に吹き飛ばされた程ではないか。殺す筈がない。犯人は他にあるのだ。

一方では陽子の怪しむべき態度、他方では剛造氏の奇異なる申出、私の頭は忽ち麻の様にこんぐらがつて、剛造氏の顔面筋肉の動きを、不思議なものゝ様に見守つてゐると、氏は獨り言の様に言ふのであつた。

「よろしいか、儂は、陽子と君とが結婚する時に、非常に珍らしい贈物をするのだ。世にも珍らしい贈物なのだ。お、儂は——儂は、今日が日までそれをどんなに楽しみに思つて生きて来たのだらう。君のお父さんの宇津木君も、それを見てどんなに驚くことだらう。永いこと、それを儂は頭の中で考へては、愉快で愉快で堪まらなかつた。苦い苦い楽しみだ。君、君はそれを知るまい。知つてゐる筈は毛頭無いのだ。ふん、珍らしい贈物だぞ！」

終りの方は段々激して来て、氏はやがてカラ／＼と笑ふ。私は慄然として身を顫した。氏の言葉が何を意味してゐるのか判らない乍らに、私は心の底から恐怖に揺り動かされて了つたのである。

「考へさせて下さい。きつとすぐに御返事が出来ませうから」私は仕方なしに頃合を見てから言つた。

「明日まで待ちます。よろしいか」

「は」

八時頃であつたらう。私は逃げる様にして志村家を辭したのだつた。

深夜の悲鳴

人といふものは、どうかすると實に拙らないことをいつまでも覚えてゐるものである。だから、大正〇〇年六月六日の夜帝劇を見物してゐた人々のうちには、ひよつとして次の様な些細なことを覚えてゐる人があるかも知れない。恰度その時舞臺には幕が下りてゐて、着飾つた観客達はどや／＼と廊下へ押し出したばかりであつたが、その美しい色彩に混じつて、薄汚い一人の學生が、氣狂ひの様にあちらこちら迷ひ歩いてゐた筈である。綺麗な婦人にドシンと衝突したり、尊大な紳士の足を踏みつけたり、學生は可成見苦しい態度であつたかと思ふ。云ふまでもなく、それが私自身なのである。志村家からすぐ自分の家へ歸る積りだつたのが、その途中でふつと氣が變り、私は一散に帝劇へ駆け付けたのだつた。何故と言つて、私は蘭子夫人に飲まされたあの液體のことを思ひ出したからである。山座は夫人の弟ではないか。その山座のために、陽子が私同様な目に遭される、それが無いことだとは誰が斷言出來ようか！

私が最初劇場へ這入つた時、舞臺では何かの新作物らしいものが演ぜられてゐた。柿の木が下手にあつて、木戸のうちには二人の武士が抜刀のまゝ、睨み合つてゐる。蟲の音がチロ／＼と聞えた。

が、私には無論、芝居を見てゐる餘裕がない。舞臺の様子をちらと見ただけで、すぐに三階の席から一心に下の席を俯瞰する。そしてそれは、忽ちのうちに私をほつとさせた。椅子席を順次に眼で繰つて行くと、見覚えのある陽子の後姿が、ちきと眼に入つて來たのである。緑色の地に斜めに白く縞を抜いて、帯は明るい褐色であつた。角帽の大學生と、山座らしい脊廣服との間に挟まれて陽子は傍目も振らずに、舞臺に見入つてゐる風であつた。山座が時々、その上體をくの字なりに折り曲げて陽子に話しかけるが、陽子は少しも姿勢を崩さない。私はそんなことで僅かに痛快さを感じた。

舞臺がいつの間にか變つて、淋しい濼傍の様なところで、抜刀の男が三四回きり／＼舞ひをすると幕が下りた。観客は一齊に席を立つ。私は二階の廊下へ急いで降りた。

喫煙室、カフェーには無論二人の姿は見えなかつた。賣店の前に、山座に似た男を見かけたが、行つて見ると別人であつた。入口に置かれた植木鉢に身を隠す様にして、食堂の中も覗つたが、そこにも二人はゐなかつた。三回、四回、いやもつと多く私は二階の廊下を往復したかも知れなかつたが、矢張り何處にも見附けることは出來ないのだつた。

で、あと一幕あるといふので、次の機會を待つことにして、私は窓に凭り掛り、しばらくぼんやりと目比谷公園の方を眺めてゐた。で、二分、三分、そんなものである。私は何心なく下を見

下ろして思はず胸を躍らせた。

ぼつかりと地の底から浮き出す様に、私の眼の下へは陽子の白い頸が浮いて来た。續いて山座のソフト。二人は一幕を見残して、既に劇場を出て了つたのである。私は地下室の下足場へ、脱兎の様に飛び込んだ。

人を追跡するといふことは、可成六つかしさうなことだと思つてゐた私には、二人を跡けて行くのが最初案外樂なのに驚かされた。下足を受け取つて外へ出るまで、この間に見失つて了やしないかと心配したのだつたが、出て見ると、二人はその時電車通りをお濠端へ突切つたばかりである。彼等が悠々として日比谷の方角に向つて歩いて行くのを見ながら、私は電車通りを隔て、警視廳前を進んで行つた。

警視廳の玄關前を通り過ぎる時、私はふと妙な男に氣が付いた。二人の行くお濠端をハンチング帽に詰襟服らしい男が歩いて行くのだが、男は時々、電柱の蔭などに身を隠す。殆ど私同様、誰かを尾けて行くといふ恰好であつた。

で然し、私はその男などいつまでも眼を呉れてはゐられなかつた。日比谷公園近くなると、電車が幾臺も並んでゐて、危く二人の姿を見失ひさうである。二人が公園の中へ這入るのを見届けると、私は一氣に電車通りを駆け抜けた。そしてその癖に、いざ公園の中へ這入ると同時に、私ははたと當惑して了つたのである。公園は、門から這入ると、路がすぐにいくつにも別れてゐる。私はそれをうっかり忘れてゐたのである。

電燈の光が六月の青葉に照されて、路は奥深く消えてゐた。人通りは相當にあるが、どの路にも二人の後姿は無い。

「陽子さん！」

大聲に呼び度かつたけれど、さうもならず、私は主人を見失つた犬の様に、小徑から小徑へと走り廻り、木蔭から木蔭へと抜けて歩いた。藤棚の下のベンチでは、横になつてゐた男が起き上つて、迂散臭さうに私を見た。檻の中では水鳥がバタ／＼と羽搏きしたりいやな鳴聲を立てた。いつか月が出て、花壇の芝生には木の影が長く伸びてゐた。心字池の水面が青く光り、波がキラ／＼と動いた。

「神様！」

私がどんな心持であつたか、手頼るものがあれば何人にも手頼り度かつた。狂はしい心であつた。夜の日比谷公園で隠れん坊をして見た人なら、幾分かは私の心持が想像出来るであらう。

「神様、どうぞ彼女を守つて下さい！」

センチメンタルだとか何んだとか、さうしたことを言つて貰ひ度くない。がっかりして公園を出た私は、實際、心の中でさうでも言ふより他はなかつた。耳に手を當て眼を閉ぢて、私は疲れした身體を終電車に乗せたのだつた。それは、ヴェランダで味はつたよりも遙かに暗黒なる地獄であつた。

元南町を、電車通りから河岸へ向つて進むと、西八軒町への曲り角、即ち耳無稻荷まではちよつと四五町はある。その夜遅くに、私は焦燥しい心持でそこを歩いてゐた。日比谷で大變な時間を費して了つたので、もうその頃は通りがすっかり静まつて、店も一軒残らず大戸を下ろしてゐたが、私はせかくと足を急がせてゐたのだつた。

考へて見ると、その日は午後一時頃に家を出たまゝである。だから、父が心配してやしないか、さうも思つて路を急いだのであるが、それと同時に、私は可成卑怯な考へをも持つてゐたことを告白せねばならない。

陽子は蘭子夫人が死ぬ前に言つた様に、山座の方を愛してゐるらしい。残念ながらさう思ふより地味な。で、それならば自分には、剛造氏の申出を幸ひにして、彼女と手取り早く結婚してしまつた方がいではないか。賤しむべき術策ではあるけれど、かうなつた上は仕方がないのだ。然し山座は札付きの不良青年だ。それを避けるのが、結局彼女の幸福ではないだらうか——さうだ、早速父に相談して見よう。

そんなことをしきりに考へながら、やがて私は耳無稻荷の前にさしかゝらうとして、ふと聞耳を立てた。境内で、ぼそぼそと話し聲がする。押し附ける様に低い聲だつた。

「今頃、誰かな？」

立ち止つて聞くと、聲はいやに地響する様に大きくなつた。何か激昂した調子である。そしてちつと聞いてゐるうちに、それが明かに外人であることが判つた。怒つて喋べつてゐるのだから何を怒鳴つてゐるのか意味はとれないけれど、兎に角それは英語である。ノーノー、とか、ダムとか、中にはスカラベツチなどといふ意味のとれない言葉もあつた。

不審ではあつたが、いつまでも聞く氣はなかつた。そのまゝ十四五間行き過ぎて、恰度例の細長い別館を通り過した時、背後では、キャツ！ といふ悲鳴がした。續いて、バタ／＼といふ人の登音である。私は本能的に走り戻つた。

耳無稻荷の境内と言つても、ほんの三四十坪の廣さで、それでも稻荷としては相當に廣い方だ

山座

が、窮屈な境内であつた。背後は志村家の頑丈な石堀で、祠は中央に三坪ばかりの地面を占領し、樹立は割合に茂つてゐた。祠の前から通りまで、お定まりの赤い鳥居がぎつしり並び、入口には、雪洞型の獻燈が七八本建てられてゐた。

で、鳥居を抜けると祠の前から、左手へ曲がつて背後の空地に出られる様になつてゐる。五六坪の空地だが、先刻の聲はその邊と思はれたので、不似合に大きい青銅の天水桶があるのを幸に、私はその横手からそつと覗いて見た。第一に目に入つたのは、志村家の石堀である。月明りでその影がくつきりと地面に落ちてゐる。そして私は、あつ！と聲を立てた。肩のところでは堀の影が斜つかいに切れ、首から上だけが月光をきともにも、大きな男が仰向きに倒れてゐるではないか。むむむむ。氣が附くと男は、咽喉の奥でかすかに呻唸く。瞳を凝らすと、鬚かもぢやもぢやと顎を蔽つてゐて、一目でそれが外人と知れたが、夜目にも白いチョッキの一部分が、べつとりと黒く濡れてゐた。

「あ、血ぢやないか！」

ぎよよとして一足引くと、その時に私は背後に當つて、何者かの蠢きを感じた。振り向くと、暗々とした鳥居のトンネルの下に、影の様な男がぢつとこちらを見てゐる様子、その顔を誰とも見定めないうちに、男は忽ちバラバラと走り出した。

考へる暇はなかつた。氣が急に強くなつて、我武者羅な勇氣で私はそれを追ひかけた。

志村邸と耳無稻荷との境の邊で、一度私の手は對手の肩に達したけれど、そしてそれをむずと掴んだけれど、向うは中々強かつた。ぐいとその身體を振られる。私の手は他愛なく振り離されて了つた。

「だ、だれだ！」

叫んだが、相手は啞であつた。振り向きもせず、腕で私の胸元をぐんと突く、恐ろしい力で、そしてそれは鳩尾であつた。私は思はずよろ／＼となつた。

柔道を習つて置かなかつたことを、その咄嗟の場合にも私はどれだけ口惜しがつたか知れない。黒い影が見る／＼向うへ駈け抜けて、志村家の角から西八軒町通りへ、ふつと消えて了ふのを眺めながら、私はどうすることも出来なかつた。息が詰まつて、危く昏倒しさうなのを覚へるのがやつとであつた。と言つても十秒か二十秒だが、その間を私は堀に身を凭せて、僅かに眼だけ見開いてゐるといふ様な仕末であつたのだ。

「お父さん、起きて下さい！」

さう叫んで私が、家の玄關を叩いたまでは、それから後ほんの僅かの時間である。息を整へて西八軒町へ出て見たが、もう通りには誰も見えなかつた。寂として町は静まつてゐた。

「何んだ、何事が起つたのだ！」

父はもう寝てゐたらしかつたが、間もなくさう言つて出て来る。手短かに今の出来事を報告する

「よし—父はさう言つて下駄を穿いた。

「行つて見よう。どんな奴だつた？」

「判らないんです。肩幅の廣い、強い奴でした」

「ふむ、—ちよつとお待ち——」

一旦穿いた下駄を又脱ぐと、父は奥へ這入つてから、手に、ピストルを二挺持ち出して來た。そしてその一挺を私に渡しながら、念を押す様にかう言つたのである。

「外國人が倒れてゐたといふのだね。確に血が流れてゐたのか」

血痕の謎

これまで語つて來たところを顧ると、私はいろんな事柄を餘り雑然と並べ過ぎた様に思ふ。蘭子夫人殺害の犯人は誰なのか、それがこの物語の興味の中心とすれば、私の話し振りは可成廻りくどいものである。聽手には随分煩しいことに違ひない。時間的前後の關係から言ふと、之れまでに私の眼に見え耳に入つた事柄は、確に一脈の連絡を保つてはゐる。然しその個々の相を凝視すると、どれもこれもバラ／＼に切り離すことが出來さうである。少くとも當時の私はさう思つた。この雜然とした事件の一群が、其の實だけだけ密接に結び合されてゐたものか、それを少しも知らなかつた。應接に暇あらざる怪奇の事件の續出に、私は知らず捲き込まれて行つただけである。私は猶暫時の間このまゝに先きを語り續けねばなるまい——。

「こゝですよ。こゝから覗くとすぐ見えるんです」

父と一緒に犯罪現場に赴くのは私にとつて初めての經驗であつた。私は可成深い好奇心に駆られてゐた。耳無稻荷の境内に入ると、かう言ひながら父に先立つて鳥居の下を潜り抜け、すぐに例の青銅製天水桶の横手へ駆け寄つたが、行つて見て私は、オヤ？と思つた。眼前に横たはつてゐる筈の外人の屍體がどうしたものか、ふつと見えなくなつてゐるではないか！月は相變らず皎々とそこらを照らしてゐるし、小砂利一つでも見逃しつこない程の明るみのうちに、その五

六坪の空地は淋しく平らかであつた。空つぽに浮き上つて見えた。一箇所瓢箪形にとす黒く光つてゐる所があつて、瞳を凝らすとそれは夥しい血の溜である。血潮はその他にも點々として地べたの凹みに溜まつてゐる、凄惨な出来事を憶はせるには充分であつた。けれど肝腎の屍體は掻き消す様に其の場から失はれてゐたのだつた。

「屍體がありません。屍體が失くなつてゐます」私は驚いて言つた。

「屍體？」父は私を押し退けて前へ出た。「屍體が無いつて、お前、その外人は死んでゐたのか」

「ちらと見ただけですけれど——」

「それでは屍體とは言へないではないか。苦しがつて隅の方へでも匍ひ込んだのだらう」

私の見た眼に誤り無くんば、外人は殆んど死んでゐたと言つてもよい位である。父の言葉を納得しかねたけれど、兎に角私達は境内を探すことにした。鳥居の附近や祠の床下、或は樹立の間など、狭い場所のことだから探すのは雑作がい。私達の捜査はぢき終つて了つたが、外人の屍體は遂に見出し得なかつた。

「お前は袈裟過ぎる。不良外人の喧嘩なんだ。お前が見た時に倒れてゐても、其奴はぢきに生氣づいて何處かへ行つて了つたのだ。傷だつてひどいことはなかつたのだ」

「血がこんなに澤山流されてゐるではありませんか」

「いや、これは餘り多いといふ方でもない。地面が堅いので滲み込まずにゐるのだが、量は案外少い」

「さうでせうか。私には随分多い様に見えますが——」

「いや、決して多くない。この位の血で人が死ぬものではないのだ。経験から儂はさう斷言出来る」

「するとお父さん呼び起す程のことはなかつたのですね」

「まづさうだ。大した事件ではないね。儂には経験があるから一眼で判るよ」

警察署長をしてゐた父の経験には、私として一言の文句もあらう筈がなかつた。然し、さうして父と話し合つてゐるうちに、私はふと父の左肩に眼を止めた。父は寢巻のまゝ飛び出して來たのだつたが、その白地の單衣に黒い染みが出来てゐる。首の附根に近く銅貨大の斑點であつたが、私は何氣なくひよいと手を伸した。

「あ、なにをするのだ！」

窘める様に父がかう言つて身を反らしたので、私の手はその斑點まで達かなかつたが、代りに

父の手が反射的に左肩へ上げられた。

「え、そこ、そこです。なにか附いてませう」

父が下ろした右手を覗くと、指二本の腹へかけてべつとりと血である。どきつとして私は父の肩を見直した。

地べたに溜まつてゐる外人の血が肩まで飛び上るといふことは、絶対に考へられない事だつた。そして父の肩に前から血が附いてゐたとも思へなかつた。では、どうしたのだらう？ 上だ！ 上から肩へ滴り落ちたのだ！ さう思ひ付くと同時に、臆病の様だが私は、ぎゅつと首の根を押へ付けられる様な気がした。何處か高い場所に外人の屍體がぶら下がつてゐる。氣付かずにあつたが、頭上にある。頭の上に、にゅーつと二本の長い脚が垂れてゐるのだ。とさう考へただけで、私はちよつとの間上を振り仰ぐ勇氣を失つた。

「妙なことだな」父はまご／＼した様に唇だけいろ／＼に動かした後、やつとかう言つた。

「どこで、どこでこんな血を喰付けて來たのだらう」

「上です。頭の上の高いところですよ」

「なんだ？ 何が上にあるんだ」

「屍體が頭の上のぶら下がつてゐるんです。きつとさうですよ」

かう言ふといかにもそれと確めてからの様であるが、笑止や、私はさう言つてから始めて父の頭越しに眼を上げた。木の枝から氣味悪くぶら下つた外人の屍體、ゆら／＼と揺れてゐる屍體、それを私は充分に豫期したが何も見えない。怖々視線を横にづらしても同じことだつた。一段高く上を見れば樹々を離れた空には雲が一つ、ぽつかりと浮んでゐた。

屍體が宙に釣り上げられてゐると言つた私の言葉は、それでも父を可成強く動かした様に見える。それまでこの事件を事もなげに考へてゐたらしい父は、それから急にそは／＼と熱心になつたらしく再び境内の捜査にとりかゝつたが、然し矢張り屍體を見付けることが出来なかつた。愈々諦めて家へ引上げようとする時になつて、父はその肩の血に就いては次の様な推測を下したものである。

「その外人はこゝを立去る時に、立樹や鳥居の柱などに身を支へながら行つたのだらう。その時に木の枝へでも残して行つた血が、どうかした拍子で儂の肩へ喰付いたのだ。さう言へば、肩を木の枝で幾度も擦られた、あの時だね」

持ち出したピストルは何の役にも立たず、と言つてその方が無論結構であるが、私は稍物足ら

ぬ心持で寝に就いた。ごちや／＼と種々のことが考へられたが疲れもひどかつた。何時の間にか眠り付いたと思ふと、私はふと眼を覺ました。ガタリ、何かそんな様な物音が私を呼び覺したのだつた。室内は暗かつたが、隣りの父の寢室はぼんやり明るかつた。

ガタリといふ音はもうしなかつたが、暫時ちつとしてゐるとそのうちに、私はむつくりと頭を擡げて了つた。私の枕元から四五尺離れた襖の向う側を、極めて静かな蹺音が動く。蹺音は父の枕元と覺しい邊りを斜に過ぎて箆筒の前に出た風である。忍びやかに抽斗でも明けるらしい音がした。物音を盗んでの様子がどうも父らしくなかつた。私は息を殺して床を匍ひ出し、半分破れかかつた襖紙を唾で丹念に擦り始めた。

ぼつと鈍い光が流れ込むと穴が明いた。見ると蠟燭が點いてゐて、大きな男のどつかりと胡坐をかいてゐる背中があつた。見直すと然しそれは父だつた。先刻耳無稻荷へ着て行つた白地の寢巻を黒つぽい大柄な袷に着更へて、その袷を腰から上だけすつぽり肌脱ぎになつてゐた。ゆらりと動いた拍子に私の眼に入つたのは左肩である。首の附根からかけて肩胛骨まで、乾いた血が廣くこびり付いてゐた。耳無稻荷で見たのは銅貨大の血痕である。それがどうしてあんなに擴がつて肌へ染み付いたのだらうか。私は妙なことに思つて眼頭を擦つた。と、父は小さい鏡を出して

高く斜に繫す。その鏡の傾斜の工合で時々私の眼にも肩の工合がチラ／＼見えた。父はやがて濡れた紙片で肩を拭ひ始めたが、血が見る／＼拭ひ去られると、そこに二條の赤い生傷があり／＼と残つた。肉に喰ひ入つて引搔かれた様な傷跡で、過酸化水素でもあらうか、父はそこへ泡の出る薬品を塗り付けた後べつたりと、膏薬を貼つて了つた。

父の肩に滲み出した血を私は一圖に外人の血が喰付いたものとはばかり考へてゐたのだが、今にして見ると、それは父自身の傷から溢れ出たものだつた。が、父はあの際何故それを明して呉れなかつたのであらう。白々しくも、木の枝から肩へ染み移つたのだなどと、どうしてあんな説明をしたのだらうか。茲で又私は新しい謎に出會したのであつたが、ひ／＼やりして寢床へ戻つた。いづれにせよ、私は見てならぬものを見て了つたのだ。

翌朝、いつもより小一時間も早く眼が覺めていきなり洗面に行くと、父は冷水摩擦をしてゐたが、見るとその両肩に膏薬が貼り付けてあつた。

「どうしました肩を――」

訊ねると父は少し狼狽へ氣味に着物を着て了つた。「なにね、肩が凝つたので――今日はマッサ―ジでもやつて貰はうかと思つてゐる」

肩が凝つたのだなどと、それが嘘であることは判つてゐた。左肩へ貼つた膏藥を怪しまれまい用心に、右肩へまで同様の手當てをしたものとしか思はれなかつた。左肩の傷を私に不審かられない爲の小細工であることが明かであつた。何故か？ 理由は判らない。私は押し切つてそれを追究する氣にもなれず、自分自身不思議な恥を感じて只黙つて了つた。

古びた寫眞

三 恥

その日、それは六月七日に當る。蘭子夫人の殺されたのが六月四日の夜で、まだたつた全二日が過ぎただけだつた。で、その日は午後の三時頃まで、餘り取り立てゝいふ程の事件は起らなかつた。勿論私自身に就いて言へば心身疲勞の極であり、殊に昨夜來父の態度にまで或る程度の疑惑を抱くことになり、何がなし落ち着かない心持ではあつたけれど、表面だけ周囲は平靜に見えた。どちらから避けるともなく父と私とは常になく口數少くしてゐたが、午前九時頃に父は外出して了つた。獨り家に残つてゐると、父と一足違ひに田毎刑事が訪ねて來た。

「お出掛けですか。それはどうも」

かう言つてすぐ引返さうとする刑事を無理に引止めて、その後の様子を訊して見ると、刑事は

例の短刀の出所がまだ知れないと答へた。それだけの報告に來たものらしかつた。

十時半頃志村家の女中が來て、今日蘭子夫人の葬儀が行はれることを告げて呉れた。墓地は谷中だが、ほんの内輪だけで式を済ますから會葬をお断りする、さういふ言葉であつた。陽子のこゝろが氣になつてゐたので、それとなく訊ねると、陽子は昨夜の十時と十一時との間に歸宅してゐるとのことだつた。その時間とすれば、私が公園内をうろくしてゐた頃、彼女は既に歸宅してゐたことになる。私はほつと胸を撫で下ろすことが出來た。稍がつかかりしたけれども、その短い時間内に山座が何事もなし得なかつたことは明かだつた。彼女の心がどうあらうと、まだ取返しつかぬところまで行つてはゐないのが、私を少なからず安心させた。すぐ志村家へ行つて陽子にも逢ひ、また剛造氏へ結婚問題に對する返事をしようかと思つたが、陽子のことで安心したせゐるか、猛烈な疲勞と頭痛とを感じ出した。それに女中からも断りもあるし父が留守である。父の歸りを待つことにして、私は少時間の休養を採ることにした。

午後三時少し前、倉知彦六が訪ねて來て午睡してゐる私を起した。例によつてノートのぎつしり填まつた鞆を肩にしてゐたが、この男の顔を見ると、私の氣がいつべんにすーつと軽くなるのが不思議であつた。

「どうだった。あれから後何か變つたことが起つたか」倉知は、前日は少しく馴れた態度を示したけれど、今日はひどく眞面目であつた。私に向つてぶつつけにかう訊いた。

「いや——何もない」私は陽子に關して倉知の言つたのがその通りであつたのを思ひ浮べながら、然し、さう答へた。

「嘘を言つては困るな」倉知は少しく狡猾さうな笑を浮べた。「君は昨夜帝劇内をうろついてゐたね。山座の跡を追つてゐたのだらう」

「え、どうしてそれを知つてゐる？」

「僕も山座を追跡してゐたのだ。君と別れてから一旦寮へ歸り、ボート部へ君のことを然るべく話したが、それから君を訪ねて來た。つい近所まで來ると、隣りの志村家から二人の男女が出掛けるのを見た。君の話から推測してどうも山座と陽子さんらしい。で、すぐ追跡して見ることにしたんだ。帝劇へ行くと、あれは運のいゝといふものだが、彼等の席のすぐ隣りに僕の先輩某氏があるんだ。頼むと快よくその席を譲つて呉れて、僕は陽子さんと並んだまゝ、芝居を見物することが出來た。それから日比谷公園まで尾けて行つてあそこを通り抜け、或る喫茶店で彼等の話を盗み聞きして來たわけなんだ。君の姿を劇場で見かけたけれど、わざと言葉をかけずに置いた。

君はへまをやりさうだからね——」

言はれると私にも、昨夜のことがはつきり憶ひ出された。劇場では、陽子が山座と大學生との間に挟まれてゐるのを見た。お濠端を歩くハンチングに詰襟服の男も見た。それが倉知彦六であつたのだ。私は已むを得ずに、志村家で陽子と語り合つたこと、剛造氏から結婚の話があつたけれど、陽子が山座の方へ心を傾けてゐることなどを話して聞かせた。

「どうだらう、陽子はそんな話をしてゐなかつたか知ら。陽子の山座に對する心持はどんなんだらう君の觀察を隠さず言つて貰へまへか」

「や、そいつはねえ」倉地は頭を掻いた。「そいつは僕にもはつきりしないんだ。何しろ盗み聞きなんだから思ふ様には行かなかつた。が、實は非常に奇怪な事實を知ることが出來たので、それだけは收穫だと思つてゐる」

「どんな事實？」

「話す前にこれを見給へ」

倉地がさう言つて靴の中から取り出したのは一葉の古びた寫眞であつた。色褪せた臺紙へ手札型の寫眞が貼り付けられてゐた。横に「明治〇〇年秋寫之。外國に鹿島立ちする君を送りて」

とあつて寫眞の主は一人の年若い女の半身像、ひどく舊式の襪のある洋装で手には造花の薔薇らしいものを持つてゐた。

「どうだ。誰かに似てるだらう」

「似てゐる。蘭子夫人そつくりだ。明治〇〇年と言へばざつと廿年前だね。蘭子夫人のお母さんの寫眞だらう」私は珍しいものに思ひつゝ言つた。「何處からこれを手に入れた」

「それはね、僕が昨夜山座のポケットから貰つて來たのだ」

「え」

「つまり掏摸をやつたのだよ」倉知は平然として言つた。「で、陽子さんもこれを夫人の母親だらうと言つたが、君もさう思ふのだね」

「さう思ふ。正確に算へると明治〇〇年は今年から廿一年前になるね。夫人は今年三十だつたら夫人の九歳の時にその母親が夫君、つまり蘭子夫人の父親を送つた時にでも寫したものだらう」

「なるほど、君の推理は或る程度まで尤もらしいね」倉知はそこで悪戯兒らしい眼付きをした。

「従つてこれは山座卯吉の母親にも當ると言ふんだらうね」

「無論さうだ」

「さう、それは確かだ。山座の母親なんだ。然し蘭子夫人の母親ではない。いゝかい、判るかね」

「判らない」私は答へた。「山座が夫人の弟なら、山座の母親は即ち夫人の母ではないか」

「さあ、山座が夫人の弟ではないとしたらどうだ」

「兄だと言ふのか。それでも同じことだ。それとも夫人と山座とは従弟といふ様な關係かね」

「實はね。それは蘭子夫人自身だ。山座卯吉の母にして志村氏の後妻なる蘭子夫人だ」

「……」私はちよつと呑み込めなかつた。

「判らないのは無理がない。明治〇〇年といひ、その服装といひ、夫人の母親と思ふのは當然だ。然し君、あの夫人が實は四十七歳になつてゐた。と聞いたなら、さう不審がる程でもないだらう」

「なに、四十七に？」私は呆れ果てゝ言つた。

「冗談ぢやない。夫人は着造りの爲にどうかすると陽子より若く見えた位だ。四十七のお婆さんだなんて、そんな馬鹿なことがあるものか！」

「ところがあから不思議なんだ。僕は山座が陽子さんに話してゐるのを聞き込んで今日は山座

家の戸籍を調べて来た。夫人は明治×年七月生れ、今年で正に四十七歳になる。山座の言葉によると、夫人は山座を過つて生んださうだ。その他に一人の子供もない。そして山座が物心着いて以来夫人は少しも老いなかつたのだ。いつも若くて美しいのだ。醫者にも聞いて見たが、四十七八の女が三十位に見えるのは少しも珍らしいことではないといふのだ。多少特異な體質を持つた女には違ひないけれど、さう驚くには當らぬさうだ。或る學者なんか、單細胞體が無窮の生命を保つことを證明したものだなんて、お醫者さん、事もなげに言つてゐたよ」

いつまでも若々しい美しさを保つ女のあることは私も何處かで聞いてゐた。又、皮膚の枯渴するのを憂へて、數多の少年少女を殺害してはその血を集め、血風呂に浴した妖女の話も同時に思ひ出された。が、それは凡て或る程度までのことと思つてゐた。年と共に衰へが現れたであらう。曾てなめらかであつた皮膚も、やがて無數の皺と灰色の斑點とに充たされたであらう。廿年その若さを昔のまゝに保ち得た例が世界の何處に求められようぞ、さうした知識に乏しい私は倉知の言葉をすぐに信ずる氣にはなれなかつたけれど、然しそれは事實であつたのだ。妖艶無比なる蘭子夫人は既に五十に近いお婆さんだつたのだ。倉知の言葉を漸く信ずる様になつた時、私は嘔吐を催す心持であつた。

「ね、驚いたらう。僕も實は驚いた」倉知は言つた。「何故彼女が君を誘惑したか、それは夫人が異常な體質と同時に淫蕩な血を多分に持つてゐたものと考へればいゝ。そして夫人は、その年でありながら陽子さんと同様に若く見えるのを苦にして、年を二十近くも秘してゐたのだ。陽子さんも大變に驚いてゐた様だよ」

怪しい外人

「で、僕はその寫眞に就いても一つの調査をして来た」と倉知は言葉を續けた。

「どんなことだ？」私は不快な思出を忘れることに勉めながら問ひ返した。

「その寫眞にマークを入れてある××寫眞館を訪れたのだ。二十年も前のことだから無駄足かとも思つたが、案外さうでない。その老主人がよく寫眞の主を覚えてゐてね、さう、多少蘭子夫人のことを思つてでもゐたのか、或はあゝした人の顔ばかり見て暮すのが商賣の人間には、何處か變つたところのある顔、つまり夫人の様に特殊な血を持つた顔には深い印象を刻み付けられるのだらう。主人はいろいろのことを話して呉れた。で、當時蘭子夫人は三度程寫眞を撮りに来たが、一度非常に立派な體格の青年と一緒に寫したことがあるさうだ。残念なことにその原版を失

つてゐて、青年といふのが誰であるか判らないが、僕はなんとなく興味を感じた。若しそれが剛造氏でもあつたとすれば、剛造氏はその頃から夫人と關係してゐたものと見ねばならない。今度の事件に關して何かの緒口になりさうではないか」

「剛造氏と寘眞屋の主人とを逢はせて見たらどうだらう」

「ところが、主人は體格の立派であつたといふことゝ、さうだ、その青年が船乗りであつたらしいといふことだけを覚えてゐる、顔に覚えがないといふのだ」

船乗り？ と考へて私はひやつとした。私の父は元船にゐたことがある。ボートのトップを漕いだ話は、そも／＼あの日にも聞かされてゐるのだ。が然し、私はぢきにその考へを打消すことが出来た、父も船にゐたが剛造氏もさうであつた。今まで言ふのを忘れてゐたけれど、それは陽子の亡き母親、八重子夫人から直接に聞いたことがあるのだつた。その頃の剛造氏がどんなに男性的なよき青年であつたか、それを私はうっかり忘れてゐたのだつた。で、それを倉知に話して聞かせると、彼は見る見る元氣づいて言つた。

「さうか。志村氏はもと船乗りだつたのか、山座がこの寘眞を出して陽子さんに何か話してゐたところと言ひ、これはひつその過去を深らねばなるまい。が然し——」

たゞどうだこれから旭羅紗會社へ行つて見ようか」
旭羅紗會社といふのは、新聞記事にもあつた様に、剛造氏が重役をしてゐる會社であつた。名の如く毛織物専門だが、工場を府下に一つ持つてゐて、本社は丸の内海内ビルディングに置いてあつた。私達は午後四時頃本社へ着いた。

「四階ですが、もう皆さんお歸りでせうよ」

案内人の言葉を聞き流して、私達は昇降機に乗つた。四階で廊下へ出るとばつたり顔を合せたのが田毎刑事である。

「やあ」私達は馴れ馴れしい挨拶を交した。

「私はこれからお宅へ伺ふところですよ。署長さんはお歸宅になりましたか」

「いえ、まだ歸りません」

「さうですか。そいつは生憎ですナ——然しお言傳でも足りるんです。お願ひ出来ませうか」と言つて刑事は倉知の顔を迂散臭さうに眺めた。氣を利かして倉知が五六間離れるのを見て漸く小聲に言つた「實は例の短刀なんです。あれの出所がまだ判らないんです。で、あれはあれで調査してゐますが一方では見込捜査もやつてゐます。二本目の短刀を發見したのが剛造氏自身だとい

ふのでして、剛造氏も怪しいと思つて調べかけました。剛造氏が自殺を装はせたのかと思ふのです。で、こゝへ来て見ると恰度ゐるのです。當日名古屋へ行つたといふのをよく調べ上げて来て、それとなく氏の口裏と合せて見たのですが、よく一致してゐます。アリバイを作つたとも見えません」

「すると志村さんは矢張り怪しくないんですか」

「まあ、目下さうです。ところで次には相崎寛四郎といふ人物です。あれの調査も始めてゐます。退役陸軍中佐といふことゝ、殺された夫人があの家へ嫁して来た頃からの食客だといふことと、親戚も何もない全くの獨りぼつちといふことが判つてゐます。何か別にお氣附の點はないでせうか」

「えゝ、別にありません。ちよつと氣味の悪い老人で、僕はあまり接近してゐません」

「別館の方へは出入りしてをりましたか」

「えゝ、別館の方は絶えず行つてました。母屋の方には殆んど寝起きだけだつた様です」

相崎老人に就いて私の知れるところは極めて貧弱である。それだけしか答へられなかつた。

「やゝ、有難うございました。お歸りになりましたら、署長さんに今申し上げただけはどうぞよろしく——」

田毎刑事がさう言つて立去ると、倉知は例の悪戯つ見みたいな微笑を漂して近づいて来た。刑事に悪い様にも思つたが、今の會話は全部倉知に話して了つた。私にはどうも倉知の方が頼もしく思へた。

「剛造氏がこゝへ来てゐるとすると、夫人の葬儀はどうしたのだらう」

「極めて簡単に済ますといふことだつた。その足でこゝへ来たのだらう。僕は今日になつて陽子にも逢つてゐないし剛造氏にも逢はない。恰度いゝ折だ。昨夜の返事をしようと思ふ」

「どういふ返事だ」

「結婚を承諾する積りだ。剛造氏がどうあらうと陽子は陽子だ。僕は彼女と結婚するんだ。君も剛造氏に逢つた方がいゝだらう。一緒に行かう」

「いや、眞平だ。今會つて了つちやおしまひだ。顔を知られてゐないところが幸なんだ。し、君もその返事を少し待つたらどうだ。急ぐことは無いと思ふがナア」

話してゐると、十間ばかり離れた一室の扉が、音も無く内側へ引かれるのが目されたのは剛造氏である。流石に葬式の歸途らしく禮装をしてゐて、給仕ら

クハットを受け取つた。こちらに氣附かずに何か低聲に耳打ちをする。何か秘密の用事であるらしかった。

私達は次の瞬間本能的にひよいと横へ飛んで、折良くそこで交つてゐた細い廊下が、剛浩氏はつかくくとやつて来て、そのいかにも紳士らしい、がっしりした身體を降機の中に入れて了つた。

「行かうか」

「うむ、行つて見よう」

私達はすぐに旭羅紗會社の事務所を訪れた。既に社員達は退いた後で、先刻の給仕が只一人、鏡に向つて髪を撫でつけてゐた。私達がいきなり入口に現れると、給仕はさつと赫くなつた、氣取つたスタイルで鏡に向つてゐたのを、氣まり悪く感じたものであらう。

「君々、ねえ君」倉知は無難な態度で言つた。「志村さんが何か言ひ残して呉れなかつたかね。僕等のこゝへ來ることを、——」

「いえ、なんにもありません。グレイバーさんのことだけです」

「あなた方がグレイバーさんと御一緒なんですか」

「さうだよ。一寸都合が變つてね」

「さうですか。グレイバーさんすぐ見えますか」

「いや、まだちよつと遅れるよ」

「困つたナア。僕は今日ちよつと用事があるんだけど、あの、グレイバーさんに言つて呉れませんか」

「あゝいゝとも。君は歸つてもいゝよ」倉知は私の方を可笑しさうに見て言つた。「志村さんは何んと言つて行かれたね」

「後で叱られると困るがナア、いゝや、言つちやはう。今夜の七時にねえ、ユブランでお待ちするつてんだ。ユブラン知つてますか」

「知つてるとも。あそこだらう」

「さうだよ。あそこだよ」

「あそこへ君行つたことがあるかね、ちよつと變つてゐるねえ」

「あゝ、僕いつペン使に行つたことがあるよ。妙なカフェーだなア、あそこは——」

私は倉知の聴き上手なのに吃驚させられた。カフェー・コブラン、午後七時、グレイバー、それで充分だった。

待つてゐると間もなく昇降機の前に一外人の姿が現れた。背は日本人の少し大柄な男ぐらゐしかないが、一度左右を見廻した後大股に事務室へ近づいた。最初薄暗くてよく顔が判らなかつたけれど、段々接近すると鬚のもちやく／＼生えた男である。向うではぎよつとした風に立ち止つた。

「グレイバーさんですか」倉知が言つた。

「え、え、さうです。グレイバー、私です」

「志村さんが言ひ置いて行かれました。午後七時にカフェー・コブランでお待ちするからこのことでした」

「そ、さうですか。どうもありがと。さよなら」

グレイバーはあたふたと踵を廻らして歸つて行つたが、その時私には、グレイバーの顔を何處かで見えた様に思はれて仕方がなかつた。帽子の下までうるさく喰み出したひどく赤い頭髮、唇を隠す程に深く生えた鬚、さうしたものゝ角として、眼鏡の下に案外小さな眼付きとか、いかつげな肩のあたりとか、どうも一度見たことのある様に思つた。と言つてはつきり誰とも思ひ浮べられず、私はぼんやり後姿を見送つてゐた。

「七時ならまだ時間はたつぷりだ。君も行くかね」倉知はふいに耳許で言つた。

「行く。コブランといふ家へだらう」

「さうだ。剛造氏とグレイバーがどんな會見をするか見て置き度い。祕密な會合だらうと思ふ」
「然し、僕は剛造氏に顔を知られてゐるので困るね」

「いや、その場でどうにかなるだらう。僕は途中で一寸廻り路をしなくちやならないから、君とは六時五十分頃、コブランの前で逢ふことにしよう。コブランの所番地を調べなくちやならない」

電話番号簿を借りて調べると、運よくコブランの名が載つてゐた。銀座の裏通りに當るのだつた。私達は海内ビルディングの前で一先づ別れた。

密談の内容

私が銀座へ行き着いたのは、まだ六時半になつたばかりだった。まだ外は充分に明るくて、夜

店の支度がぼつ／＼出来かゝつてはゐるが、人通りと言へば勤人の方が多かつた。緊張し切つた心持で、とある貴金屬商と楽器店との間の細い露地に入り、それを可成長く歩くとカフェー・コブランのすぐ近所に出た。若し剛造氏が来てゐるとすれば、茲で顔を見られると大變に都合が悪い、私は用心しつゝコブランの様子を窺はうとしたが、どの窓にも厚ぼつたい窓掛が垂れてゐて、内部を覗くべくもなかつた。

倉知が五分程遅れてやつて来た。私の見知らぬ瘦せた人物を伴つてゐるが、紹介しながら説明して呉れた。

「この方は讀唇術の先生で須々原さんと言はれる。元來啞でいらつしやるんだが、喋ることも御自由だし何一つ出来ないことはない。剛造氏の會見がきつと低聲で行はれると思つて、その會話を聞き取つて戴かうと思ふのだ」

須々原氏は謙遜家らしい態度で頭を下げた。

「君はその邊に一寸隠れてゐ給へ。僕が中の様子を見届けて来るからね」

倉知はかう言つて恐れ氣もなくコブランへ這入つて行つたが、やがて出て来て低聲に言つた。

「剛造氏だけがある。グレイバーはまだ來ない風だ」

「怪しまれなかつたか」

「大丈夫だ。怪しまれる理由がない。僕等はいゝ位置に席を占めたが、君は、一人きり別に這入つて、入口を背にしてとつつかのテーブルに着き給へ。そこにゐると剛造氏から顔を見られる心配がないだらう」

思ひ切つてコブランの客となつた私は、言はれた通りのテーブルに向つて腰を下ろしたが、剛造氏の姿は仕切りの衝立に妨げられて見えなかつた。私は注意深く部屋の様子を見渡した。

で、そこは大變に薄暗いカフェーであつた。外がまだ明るいのにもまるで晝夜の様にぼんやりした光に充たされてゐた。厚ぼつたい窓掛と、巧妙な照明法とお蔭であらう、柔かな茫とした光線がふはふはと漂つてゐて、その中を給仕が音も立てずに歩いてゐた。私と反對側の席に着いて赤い色のカクテルを前にしてゐた青年が、何かから影の様に見え、女氣は少しも無くて、非常に静かな感じであつた。どのテーブルも二方だけ圍ひがしてあつて、相對する席以外にはちよつと顔を見合せる機會がない。しみんゝ酒の味を楽しむとか、或は何氣ない體を装ひつゝ密談をするには、極く相應しい場所と思はれた。

飲めもしないが向う側の青年に倣つてカクテルを注文し、その薄手なグラスに唇を當てた

時、入口の帷帳が二つに裂けて、朱髯のグレイバーがよつきりと這入つて来た。と、私と視線がばつたり衝突し、彼は再びぎよつとした態度を現した。私は私で、海内ビルディングの時と同様に、その顔が臍氣ながら私の記憶のうちにあることを思つた。

グレイバーがその軽い驚愕の表情をとり戻して私の傍を通り過ぎ奥へ消えてから、たつぷり五分程経つと、私の肩越しに腕が一本にゆつと突き出されて素早く引込められた。振り向いても誰一人見えなかつたがテーブルには一枚の紙片が置いてある。——外へ出給へ。剛造氏が歸る様子だ。見付からぬ様にしばらく身を隠し給へ。倉知——と書いてあつた。萬事命令に従ふより他ないので外へ出ると、既に夜になつてゐて、身を隠すのに都合がよかつた。しなやかな女が三人程私の眼の前を通り過ぎると、コブランの前に剛造氏が現れ、續いでグレイバーがキョロ／＼しながらそこへ出て来た。剛造氏は勝ち誇つた様な歩調で靴音高く銀座方面へ歩み去つたが、グレイバーは自動車に乗つた。彼は幾度となく私の隠れた方へ視線を走らせたが、私のことを気にしたものに違ひない。運轉手にスタートを命じるまで、彼は不安らしくあちこち見廻してゐた。

再びコブランの客になると、倉知はすぐに言つた。

「これはね、須々原さんが向うの會話を聞いてその通りに喋つて下さつたのを僕が書き取つたの

だ。多分君の驚くやうなことばかりだと思ふ。僕もグレイバーには海内ビルディングで逢つてゐるので、随分苦心して顔を見られない様にして書き取つたものだ。亂雑だが讀んで見給へ」

差し出されたのは數枚の洋野紙であつた。私はそれを負る様に讀み始めたものだが、今この必要部分だけを書き抜いて見よう。脱字などは私の補つたものであるけれど、大體に於てこれは原文のままである。それが全部日本語を用ゐたものであつたことに就いて、私は少しく不審に思つたが——といふのは、剛造氏はもと海上生活をやつた人で外國語にさう不自由な筈がない。殊に對手が外人なのだから、祕密を傳ふ意味から言つても外國語を選びさうなものである、でそれに對する疑問が湧いたが、そんなことに拘泥してゐられない程、二人の會話の内容は奇々怪々であつた。すぐにその書き抜きへ移ることとしよう。

×

×

×

「あなた決心なさい。今夜決心すれば今夜出來るです。私命令下せばすぐ逃げられます。國外へ行く一番です」

「いやだ。僕はまだそれ程切迫してゐるとは思はない。娘の陽子を宇津木の伴と配妻すといふ仕事も残つてゐるし、まだまださう周章でなくともいふと思ふのだ」

「駄目です。陸軍の圖面盗み出した事件、片付いた様で片付かないでせう。本銀町署で保管してゐた書類、誰が盗んだか知つてますか。あれ盗んだ男あの書類を又警察へ届けるとあなた大變危いでせう。宇津木といふ人あなたをすぐ捕縛しますぞ」

「馬鹿なことを言ひ給へ。儂はもうその書類を手に入れて了つたのだ。君の從兄のウキルキンス、あの男が昨夜持つて来て呉れたのだ」

「嘘です。そんなこと無い筈です。どんな書類でしたか」

「本銀町署からウキルキンスが盗み出したといふことだつたが、例の暗號文だ。宇津木がそれを解くことの出来ないうちにウキルキンスが盗み出したので、儂はそのお蔭で助かつたのだ」

「ウキルキンスうまいこと言つてあなたから金取つたのです。金澤山出したでせう」

「一萬圓出した」

「さうでせう。あなた騙されたのです。その暗號文はあなたの手へ届かないうちに本銀町署に押へられたので、ウキルキンスそれ利用して偽暗號文作つたのです。本銀町署から書類盗み出したの、ウキルキンスでありません。あなた偽暗號文を買つたのです」

「馬鹿な！ そんなこと絶対に無い筈だ。君はいゝ加減なこと言つてゐる」

「あなたこそ馬鹿です。大馬鹿です。あなた馬鹿の證據も一つ出させう。あなた昨夜耳無稲荷でしたこと、誰にも見られないと思つてゐるでせう」

「なに、なんと言ふ。何を儂がしたといふのだ」

「あなたウキルキンス殺しました。隠しても駄目です。金出さず書類取るためだつたでせう。私よく見てゐました」

「……………」

「私昨夜ウキルキンス會ひ度い思つて、あの男お宅から歸る頃見圖らつて、あのお稻荷さんまで行きました。あなたの遣ることそこで見たです」

「うむ、きつとさうか、確に儂だつたと言ふのだな」

「さうです。あなたです。ウキルキンス倒れるとあなた一寸姿を隠しましたが、その時、宇津木の息子さん駆け付けて来ました。私見付けられて逃げましたが、あれから後どうしましたか」

「どうもせん。そして何も心配することは無いのだ。君が儂を訴へるとも言ふのか」

「訴へません。訴へれば私身の上も危いです。然し宇津木の息子さん黙つてゐないでせう。近いうちあなた捕縛されます」

「ふん、ところが大丈夫だ。儂はそれを君に見られたとは今の今まで知らなかつたが、あれから後すぐにウキルキンスの屍體を隠して了つた。すると暫時たつて宇津木親子がやつて来たが、なに、何のこともありません。少しも氣附かれずに、彼奴等はぢきに引返して了つた。儂はそれを二階から見てもたのだ」

「さうですか。警察署長を勤めたといふ位の男なのに、それ程迂濶な人ですか」

「無論だ。署長室の金庫内から書類を盗み出される程の男ではないか」

「然し私どうもさう思ひません。相當腕のある男です」

「さあ、君位の頭はあるかも知れないナ」

「ところで、私若し宇津木孝作だとしたら、あなたどうします。秘密知られて困るでせう」

「それは困る。だが氣味の悪いことを言ふのは止し給へ」

「氣味悪がる見ると面白いです。私昨夜宇津木の息子さんに追ひかけられて肩を強く搦まれさせた。振りもぎつて逃げる時、肩の肉少し削り取られたです。宇津木署長の肩、同じ傷跡持つてると、これ中々面白いことになりますぞ」

「はつはムム、それ申々面白いだらうね」

倉知の言つた様に、剛造氏とグレイバーとの會話は、一つとして私を驚かせぬものはなかつた。剛造氏の恐ろしい秘密を始めとして、凡てが私には意外であつた。そして殊に最後の數行で私は思はずあつと叫んで了つた。あのグレイバーが、私の父の巧に變装したものであつたことを、茲に改めて説明することに當らないであらう。父が私に秘し隠した左肩の傷は、私自身の爪によつて負はされたものであつたのだ。考へれば、耳無稻荷の境内で父があゝの事件を殊更に小さく見せかけようとした言葉が、一々それと思ひ當りもする。何故さうしたか、それは例に依つて父の秘密嚴守癖によるものとその時は思つたけれど、父は既に凡てを知つてゐるのだ。あの時、一旦私の手を逃れてから家に這入りそれまで寝てゐた風を装つて女關へ出て来た父の態度を、私は腹の中から心憎く思つた。私は充分に満足して、昨夜來の出來事を逐一倉知に聞かせたものであつた。

「さうかい。そいつは痛快だつたね。君のお父さん申々やるねえ。變装たつて流石にうまいものだ」

「うん、どうもね、僕の顔を見て驚いた風のあるのが妙だと思つてゐたのだ」

「さうだらう。然し、流石グレイバーに化け終せた宇津木さんも、僕等が玆で會話を全部聞いたとは知らずにをられたんだね。僕も相當にやるだらう」

「はつは、、、、然し、剛造氏の秘密には驚いた。そして蘭子夫人事件も、それでなんだか解りかけた様な氣がするね」

「全くだ。解決は遠くないだらう」

私達が悦に入つてこんな風に話し合ひながら、寧ろ私としては不謹慎な程にはしやぎながら、コブランから銀座通りへ向つて歩いてゐると、途中で私は背後からぼんと肩を叩かれた。見ると、グレイバーである。私は嬉しくなつて、冗談混じりにかう言つた。

「や、グレイバーさん今晚は、お宅まで一緒に参りませうか」

贅澤な囚人

グレイバーさん今晚は、多分に巫山戯た口調で私がさう言ふと、その時倉知はぐいつと私の脇腹を小突いた。

「おい、志村氏があるぞ！」

「なに!？」

倉知の視線を追ふまでもなく、剛造氏の姿はすぐに眼に入つた。私達の立ち停つたのはほの暗い場所だったが、二十間程離れて石造らしい建物がある。その前に、二階から降る縞の様な光線を浴びて剛造氏が、ちつとこちらを向いてゐるのだつた。頸をかすかに傾けて、上體をゆらりと動かしした。

「別れよう、別れた方がいゝだろ」

咄嗟の場合、倉知も多少周章てたに違ひないし、私にしてもさうだつた。別れた方が何故いゝのか、そんなことを詮索する暇もなく、私達は忽ち二組に別れた。倉知と須々原氏とは振り向きもせず銀座の方へ行き、私は私で、グレイバーと共に自動車へ乗り込んだ。グレイバーが手を舉げると、横町から一臺の自動車がする／＼と滑り出たのである。背後の窓から覗くと、もうその時は剛造氏の姿がない。スタートした車の中で、私は小聲に言つた。

「お父さん、志村さんに見付かつて悪かなかつたのですか」

今思ふと、實際私は非常に迂濶であつたのだ。

「僕だつてさうとしか思はなかつたよ。」倉知も後にかう言つたが、私はそのグレイバーを毫も疑

はなかつた。父がグレイバーに變装したものとばかり思つてゐた。こぢつけの辯解ならいくらでも出来る。「ほんとのグレイバーなら私を知つてはゐないだらう。それだのに倉知と須々原氏と私との三人の中で、殊更私だけを選んで肩を叩いた。だから私は父と思つたのだ。」とさうも言へないことはない。又「剛造氏はコブランを出る時私に氣附いて、私にも何かの危害を加へようとしたのだらう。そして父は先廻りをして私を救ふ積りだつたらう。私はさう思つたればこそ、易々として自動車に乗り込んだのだ。」とこんな風にこぢつけても、強ち不自然には聞えないが、然し、それは凡て、後から考へた言草に過ぎない。父がグレイバーに變装したその美事さに、私は父とグレイバーとをすつかり混同して了つたのだ。突然そこに剛造氏が現れたこと、それは確かに私を周章させた原因であるけれど、兎に角私はうっかりしてゐた。あまり有頂天になり過ぎてるたのだつた。

グレイバーは、最初口を利かなかつた。話しかけても黙々として前方を見詰めてゐた。何かこれからの方針を考へてゐるのだナ、私はそんな風に解釋して、今更ながら感心してその天下無比の變装振りを眺めてゐた。「コブラン内部の明るさも恰度この自動車内の明るさだつた。親子でさへ、かうして見間違ふ程なのだ。剛造氏が變装を見破らなかつたのは、無理もない。實にうまいです。ねえお父さん。」自動車がスタートしてから、さう言つても、僅か一分か二分、私は無暗に感心してそのグレイバーを見守つてゐたが、やがてふつと氣が付いた。

私はまじくとグレイバーの顔を覗き込んだ。下腹のあたりが、すつと冷たくなる思ひであつた。前に二度、海内ビルディングとカフェー・コブランで彼の姿を見かけた時、不思議に私の胸を打つたあのどこか見たことのある様な、強ひて言へばなんとなく人懐しげな、その面影がグレイバーには少しもないのである。私の心臓が、ひとりりでドキンと踊つた。

無意識に身を引くと、グレイバーはひよいとこちらへ向いた。

「逃げる！ 駄目ですぞ！」

紛れもないグレイバー!!! 私の胸へピストルを突き付けた手の甲には、荒々しい毛が一面に生えてゐる。私は棒の様にしやちこばつた。

グレイバーが、それから案外静かな調子で喋り出すのを、私は空虚な心で聞いてゐた。

「……ステイション前で給仕に會ひました。私、志村さんに會見申込んだ覚えはない、七時半コブランへ行きました。八時過ぎるとあなた出て来て、志村さんと私に變装した男續きました。あなたと私、五呎ばかり離れて同じ場所に隠れてゐたです。あなた、又コブランへ這入るの見て、

私、志村さん追ひかけました。志村さん吃驚して引返すと、あなた方揃つてコブランを出たところ、志村さんがかう言ふです。あなた、宇津木さんの息子さんですか」

「……………」

「怒つてるですか？ 怒つても仕方ない。志村さん言つてました。今度の事件、私と宇津木さんとの腕比べです。宇津木さんの腕仲々凄いい、日本のホームムスです。志村さんよく知つてゐて、注意して呉れました。志村さんと宇津木さんと、もとお友達だつたですね。仲のいい友達、一緒にヨーロッパ行つたこともあります。今大變仲悪いが、あなたその譯知つてますか」

私は頑強に沈黙を守つた。片方の耳でグレイバーの言葉を聞きながら、手をそつと伸ばして、一分二分づゝ、扉の方へ近づけて行つた。

「いけません、逃げられません。」グレイバーは微笑しつゝ言つた。「逃げるはよくないです。ピストル撃ち放さねばなりません。あなたまだ若い。戀をして冒険して、それから死ぬのが賢いです。私日本、支那、それから澤山歩きます。どこもみんな美しくあります。戀人連れて青い山見て歩く、それ一番理想です。私己むを得ずこんなことしてゐます。あと二年、三年経てば私自由になるです。好んでこんなことやつてません。志村さんも同じです。あの人のすること、日本の

ため大變悪い。志村さんにこんなことさせたくなかつた。あの人氣の輩です。過去に苦い経験持つてます。そしてあの人こんなことにして了つたの、相崎さんラン子さん、それから私の従兄悪いです。任務終れば、私志村さん連れて旅行に出ます。あなたどうです、一緒に行きませんか」私は段々氣の落ち着くのを感した。恐らくどこかの軍事探偵であらうとはすぐに思つたが、彼は立派な紳士である。相變らずピストルは私の鼻の先きにあつた。が、私は奇妙な安心を感じてゐた。眼を外らすと、窓外は闇であつた。田舎道であつた。發電所らしい、あかくと電燈の灯された建物が右手を瞬間に通り過ぎた。左手に、チラリと黒い波が光つて見えた。自動車は、海に沿つて京濱間を疾走してゐるものと思はれた。

「相崎さんやウキルキンスが志村さんを唆かしたのでですか。」やがて私は始めて口を開いた。

「おゝ、あなた私の従兄知つてますね。さうです。あれが悪い奴です。ウキルキンス、ラン子さんと前から譯あつて、ラン子さんを志村さんと結婚させたの、ウキルキンスの仕事です」

「どうしてです。何故そんなことをしたのですか」

「ウキルキンス、旭羅紗會社の技師です。ラン子さん連れてゐるところ、志村さん見られて欲しがつたです。ラン子さん志村さんと結婚すると、相崎さんも志村家に入り込みました。相崎さん

ウキルキンスのお友達ですが、悪い男ですね」

「警察から暗號文や、重要書類を盗み出したのはあなたですか。」私は時期を見て言った。

「さうではありません。」グレイバーは極めてはつきり答へた。「誰盗み出したか、それ私も困つてゐます。志村さん私、宇津木さん、その蔭にも一人あるかも知れませんが。それ私も困つてゐる奴です。宇津木さん、そいつを捕へ度がつてゐて、私と同じことです」

「ウキルキンスでないでせうか」

「さあ、あの男、それだけの腕無い筈です」

「相崎さんは——」

私がさう言ひかけた時、自動車がかぐいつと急激な曲り方をした。そして、グレイバーは突然に嚴肅な口調で言った。

「あなた氣の毒です、この麻酔劑を嗅いで下さい。いやと言へばピストルです。私、言つたことは必ず実行する男です。嗅ぎなさい！」

流石にちよつと私はたじろいだ。が、グレイバーに對する私の奇怪な信頼！ 差し出されたハシケチを、私は間もなく鼻孔一ぱいに吸ひ込んで了つた。

「いゝんだ、逃げる機會は又來るのだ。私は自分身をさう納得させて、グレイバーが數を數へるのを聞いてゐた。」

「ワン——ツー——スリー——」

意識を失ふ時に、陽子の顔と父の顔とが、チラリと私の頭を覗いてゐた。

ふと、私の意識が元へ戻つた時、私は可成設備のよい洋風の一室内に、自分の身體を見出した。ふと、私の意識が元へ戻つた時、私は可成設備のよい洋風の一室内に、自分の身體を見出した。

音も無かつた。あらゆる物音から完全に私は隔離されてゐた。地下室と見えて電燈が點いてゐたが、厚さうな壁の、天井とすれ／＼になつたところに、細長い採光窓があり、そこからは白い光がぼんやり差ん込んでゐた。だん／＼に周圍を見廻すと、寢臺もあるし書棚もある。扉が三つあつて、このうち二つは押しても突いても作りつけの様に動かなかつたが、一つだけは無雜作に開かれた。行つて見るとそこは浴室であつた。あまりに静寂であること、地下室であるといふこと、その二つさへなかつたら、囚はれの身だといふ實感が、どうしても胸へびたりと來なかつたであらう。ともすれば、ひどく安逸な氣分さへ、ひた／＼と身體全部を押し包みさうであつ

た。
 勿論、脱出しようといふ考へがなかつたのではない。壁の至る所について逃口を探しても見だし、例の採光窓へも苦心して首を覗かせて見た。が、結構簡単には逃げ出せないのであつた。何かの金具でも取り外して、根氣よく壁に穴を穿つより他ないことが判つた。そしてそれは、いざとなれば決して不可能なことではない。浴室へ行つて喉を濕して來ると、私は寢臺の上へごろりと横になつた。

いろいろのことが頭の中に蘇つて來た。これまでの事件に就いて、或る假定のもとに推理を進めると、いつしか全く別の假定が生れて來た。二つの假定は互に矛盾した。一つの系統を求め、その系統に他の凡てを連絡させようとすると、今度はふいに新しい系統を發見した。二つの系統は私の頭の中でもぢや／＼に絡み合つた。それを選び分けるのに、私は同じ苦心を幾度となく繰り返した。倉知が會つた様に、無数の方程式より成る聯立方程式であつた。紙一重といふところまで來てゐるのを感じながら、私にはその紙を突き破るだけの力が足りなかつた。寢臺から又起き上つて書棚に近づいて見ると、抽斗は中の物を全部持ち去つてあつたが、棚には十五六冊の洋書が淋しく取り残されてゐた。紀行文や小説や物理の書籍などがあつた。讀むといふ意志もなく、手當り次第に抜き出してはバラ／＼頁を繰つてゐると、コッ、コッ、と音を叩く音がした。

「汗屈ですね」

聲はグレイバーだつた。扉の床から三四寸離れたところが横に細長く開かれて、寢長まつてもゐるものか、グレイバーの片眼だけが覗いてゐた。

「今、食べ物この穴から出します。宿屋へ來た積りであるとするらしいです」

「待つて下さい！」私は叫んだ。「理由を話して下さい。何故です。どうして僕をこゝに入れて置くんのです！」

「理由言へません。安心して下さい。これ私の部屋です。騒いだり、逃げようとすれば、私、ピストルを遠慮しません。宿屋です。おとなしくしてゐなさい、ね」

グレイバーがそれだけ言つて顔を引込めると、代つて食事の皿が入れられた。いかにも宿屋の様な工合である。私の怪しい生活はその日から始まつた。

この静かな地下室に於て、贅澤ではあるが然し全く孤獨な數日を、私は茲で詳しく述べようとは思はない。グレイバーの態度から豫め想像出來た様に、私は極めて寛大に待遇されてゐたが、

然し、グレイバーはそれから後少しも口を利かないし新聞も讀ませては呉れなかつた。剛造氏を中心にしてどんな風に事件が推移したかを、私は少しも知らずに日を送つたのである。そして四五日の後、そこには私の退屈さを、一氣に消滅させて了ふ様な思ひがけないことが起つた。けれど私はその話に移る前、倉知や田毎刑事の活躍振りに就いて語り度いと思ふ。凡て、私が後に聞かせて貰つたところだが、茲でその話をした方が大變都合がよいのである。

先づ、田毎刑事の捜査の跡を眺めよう。

難破船の物語

私は今こんなことを思つてゐる。この事件の渦中にあつた人々のうち、最も無邪氣だつたのは田毎刑事である、とさう思つてゐる。人の罪惡ばかり摘發して歩く刑事が、最も無邪氣だつたといふのは可成皮肉に聞えるかも知れない。が、確かにさうなのである。

田毎刑事は、職業意識以外何の邪念もなく、驀地に事件へ向つて突き進んだ。彼が掴み得た真相の一部分、或はその外皮は、そのみでは決して事の全體を説明し得なかつたけれど、兎に角そこまで探知し得た彼の眞面目なる努力を、買つてやらねばなるまいと思ふ。勿論、彼の遣方方は派手でない。パツと人目を驚かす様なことは極く少い。彼としては、彼が最初に志村家の犯罪現場へ赴いた時、例の兇器を押し隠して了つたのが、先づ最も派手な遣り口であつた。その他の地味な遣り口を、然し私は、これから出来るだけ簡単に語らうと思ふのだ。

田毎刑事は、不思議にも、軍機漏洩事件に關して、剛造氏がその首魁であることを少しも知らなかつた。私の父が、それを自分一人の胸に藏つてゐたからである。刑事は、専心蘭子夫人殺害者のみを追ひ求めてゐた。

剛造氏が怪しいと睨みながら、事件當夜その剛造氏が明かに名古屋へ行つてゐたのを確めて、今度は相崎老人を容疑者として注目し始めたまでは、海内ビルディングの廊下で既に私が聞いた通りであつた。剛造氏のアリバイを確めるのに、田毎刑事がどれだけの苦心をしたか、又、そのアリバイがどれだけの眞實性を持つてゐたか、實を言ふと、それを詳しく説明しない限り、刑事の苦心は十分に現し得ない。然し、それは思ひ切つて省略することにする。特殊な趣味を持つた人以外には、かうした細々しい調査の記録が、甚だ興味のないものであることを恐れるからだ。誰の目から見ても、當夜剛造氏が名古屋にゐたことが疑はしくなかつただけ、茲で言つて置けば充分であらう。

もつとも茲に只一つだけ、剛造氏を疑へば疑へる點があつた。剛造氏は、六月四日の夜の十一時まで名古屋にゐたことが明かであつたが、それ以後どうしたのか、その泊り宿さへ知れてゐないのだ。名古屋から東京までは、急行に乗れば八時間足らずの距離であるのと、午後十一時半に名古屋驛へ停車する上り急行のあることが、田毎刑事の頭に可成執念深くこびり付いてゐた。剛造氏に言はせると彼は當夜名古屋に一泊して翌早朝東京へ向つて出發したので、自宅へ歸り着いたのは五日の午後四時、東京驛から自宅までの間何處へも寄道しなかつたとのことであるが、刑事はそこに少しく疑念を挿し挟んでゐた。剛造氏が四日の午後十一時半に名古屋を出發し、五日の早朝東京に着いて蘭子夫人を殺害し、何食はぬ顔で同日午後四時、再び自宅へ歸つたのではないか？ 別館へは娘の陽子すら足を入れさせなかつたといふ。自分の姿を見られずに夫人を殺害することも強ち不可能ではないだらう。刑事にはしきりにそんなことが考へられた。

そこで、犯行時間が六月四日午後十時前後との推定は無論、刑事のかうした疑念を打ち消さねばならなかつた。

「被害者が四日の午後十時に殺されたといふのは、あなたの見誤りではなかつたでせうか」

「そんなことはない。明かに四日の午後十時だ。君は僕の眼を疑ふのか」

「あなたの眼を疑ふのではないですが——」

「では、どうだと言ふのだ。君なんぞいくら頭張つても、僕は僕の推定を信じる」

「絶対に間違ひないですか」

「勿論だ。君なんぞが僕を疑ふのが間違つてゐる。失敬ぢやないか！」

それに就いて、田毎刑事は検屍に立會つた警察醫と相當激しく論じ合つた。警察醫はその時折悪しく何か他のことで感情を害してでもゐたものか、ひどく傲岸な態度で刑事の説を押し潰したが、それはよけいに刑事の心を意地張らせた。

「よし、見てゐろ！」田毎刑事は腹の中でさう叫んだ。

自分自身名古屋へ出張して剛造氏のアリバイを確めたのが六月六日である。その夜を汽車中で過して歸任して彼は——田毎刑事が耳無稻荷境内のウキルキンス殺しを知らなかつたことを、茲で充分許容して戴き度い。ウキルキンスは六月六日の夜、殺された。刑事が在京さへしてゐれば、或はその夜志村邸附近を見張つてゐたかも知れないのだ。——七日の午後、海内ビルディングから歸署して、そこで警察醫と前の様な論争をした。そしてその結果、一方に於ては相崎老人をも怪しいと睨みながら、彼の心は再び例の二本の短刀の方へ傾けられて行つたのだつた。

「さうだ、相崎のことは同僚に任せて置かう。俺はどうしてもあれの出所を探さねばならん」
彼は七日の夜、固くさう決心した。

六月八日午前、それは恰度私がグレイバーの邸内で最初の一日を経験した日だが、田毎刑事はHといふ工學博士を訪問した。H博士は非常に趣味の廣い人で、殊に刀劍のことでは相當有名な蒐集家であつた。他の方面では短刀の出所がどうしても判らず、刑事は前々からH博士を訪ね度く思つてゐたのだつた。

一時間程待たねばならなかつたが、H博士は快く面會して呉れた。二本の短刀の一つを撮した寫眞、それを刑事がポケットから出すと、博士は吃驚した様に言つた。

「ほ、これは珍らしい」

「お心當りがありますか」刑事は聲に幾分の顫へを帯びさせて言つた。

「ありますとも」博士は言下に答へた。「私も一本持つてゐます。これはね、刀劍としては別に面白いものではない。が、大變面白い曰くが付いてゐるんです」

H博士はさう言ひながら、奥からちぎにその短刀を持ち出して來た。樹の皮で作つた鞘が付いてゐたけれど、申味は半月形に曲がつた全く同じ型のものである。心持太い柄の彫刻までが同じで、刑事は胸を躍らせながら博士の顔を見やつた。

「私はこれを友人から贈られたのです。もうかれこれ二十年程になります、南米から歸つた友人がありましたね、その男から貰つたのです」

「その面白い曰くと仰有るのは？」

「その男は歸朝する時、ひどい暴風雨に遭つて難船し、二三日の間、或る環状珊瑚島に立ち寄つて船を手入れたのださうです。島の名は判つてゐません。布哇の南かと思はれますが、さて或る日です。島の方からどつと喚聲が上つたかと思ふと、一名の土人が多勢に追ひかけられて、海の中へ飛び込むのが見えました。間も無く土人が船に遊び付いたのですが、その土人の持つてゐたのがこの短刀です」

「はあ、それで——」刑事は少しもどかしい思ひだつた。

「聞いて見ると、その短刀はその島の酋長が持つてゐた寶物で、揃ふと十本あるのです。面白いことに、その十本のうちどれか一本の柄の中に、世界に類の無いといふ眞珠が秘められてゐて、土人はその日それを十本とも盗み出したのですが、運悪く酋長に見付かつて了つたのです。ところが、さあさうなると大變でせう。なにしろ、まだ土人はその眞珠を見付け出してゐないんです」

から、船客一同も我も我もと手を出して、賣れエ賣れエと言つたんです。土人も命が助かつたお禮にといふのでその十本を賣ることになりましたが、私の友人も一本だけ買つて來たわけです。探して見ると眞珠は無かつたさうですが、まだ可哀さうな話がありますよ。え、その土人ですが、それがその日のうちに發狂して了つたんです。つまり、酋長の寶物なんでもものは尊嚴犯すべからざるものなのに、それを盗んだといふことが土人を精神的に苦しめたのでせう。土人は船から再び海へ飛び込んで、鱈に食はれたさうですよ、そこで……」

博士の話は仲々長い。刑事は言葉挿し挿し挟んだ。「で、その買った人は誰々でせうか」

「や、そいつは知らんよ」博士の興味と刑事のそれとが明かに少し喰ひ違つてゐたので、博士は妙な顔をしたけれども、それでも親切に言ひ足した。「知らんけれども、私にこれを贈つて呉れた友人を訪ねて見給へ。或はよく覚えてゐるかも知れないから」

で、田毎刑事は次にKといふ老實業家を訪ねればならなかつた。

K老人は富豪にも似ず、至極氣さくな人物であつた。田毎刑事がそのことを話し出すと、老實人は一寸の間、古いことを一生懸命憶ひ出さうとして焦つてゐるらしかつたが、やがて、はつは

「さうですかい。いや、漸く憶ひ出しましたよ。Hさん、まださう思つてゐますか。それはどうも面白い。學者なんでもものは、はつは、いや全く面白い、それはね、私が作つた駄法螺でしてね、いえね、少し勿體をつけてお土産にしたんですよ」

「え」刑事はポカンとした。

「や、然しなんです。土人から買つたのと新船して或る島に避難したこととはほんとですよ、さうさう、こんな事情だつたのです」

K老人の話によると、それは、かうである。船が風波を避けてゐた或る一日、K氏は退屈まじりに船の事務長室へ行くと、事務長が机の上へその短刀を二本並べ、ちつとそれを睨み詰めてゐるのであつた。事務長はK氏の姿を見ると、ハツと顔色を変へて短刀を驚掴みにしたが、短刀に就いて僅かに意味あり氣なのはその事務長の態度だけであつた。訊ねると、事務長はそれを島の土人から買つたといふことで、それ以上格別に變つたことはない。K氏も一本を購つてH博士への土産にしたとのことであつた。

「すると、事務長とあなただけがそれを買はれたのですか」

「さあ、私はそれを調べなかつたがね。調べて置かなくてはいけなかつたのかね？」

「いえ——」刑事は頭を掻いた。「で、事務長の名前が御記憶にありませうか」
「待ち給へ」K老人はしきりに考へたが、憶ひ出せない風であつた。「船は紀文丸といふんだつたが、どうもねえ——」

K老人と同船した人を探し出して、それから事務長の名を知るのも一つの手段だとは思つたが、刑事はK老人の邸を辭すとその足で、東海郵船會社へ駆けつけた。紀文丸の事務長、そして約二十年前それだけで充分である。田毎刑事はその日の午後三時頃、ウワーツと叫び出し度いな心持で、深川西八軒町へ向つて足を急がせてみた。

二十年前、その風變りな短刀を二本も買ひ込んだ紀文丸の事務長、それは志村剛造氏なのであつた。刑事の脳裡には、志村剛造の四文字が焼き付く様に刻み付けられてみた。

鎖された家

暑中休暇前で、ポートルレース前で、従つて又學期試験間近で、倉知彦六は多忙だつた。日がな一日私のことのみ没頭してゐることは出来なかつた。それに、私の父がもう何事をも知り抜いてゐる様子に、すつかり安心もして了つた。六月八日の午後、彼は學校の製圖室で一心にコムバ

スや定規を働かしてゐた。

新聞記事を切抜いて置く程の男だから、彼は柄になく丹念な男である。クラス中では、彼が最も製圖をお得意にしてゐた。何處で覺えたのか、なんとかかんとかでコラサのサ、といふ様な唄を口吟みながら、せつせと烏口を動かしてゐると、墨色の鮮かな線が、後から後からと湧き出してくる。瓦斯壓縮機の圖面を引いてゐたのだが、恰度その冷却槽の蛇管を書き上げた時である。次の一線に墨を入れようとした、彼はふいと手を止めた。書き續けようか止めようか、と彼は暫時思案したが、やがて烏口を軽く投げ出した。

製圖臺の下には例の鞆が押し込んである。倉知は頭を下げて、鞆の中から一冊のノートを取り出した。殺傷事件第廿一號のノートである。第一頁第二頁は志村家の事件、三四五と飛ばして第六頁を申すと、彼はそこにあつた切抜へ熱心な瞳を輝かした。

人妻を斬る痴漢（六月六日夕刊）

變態性慾の男が又出る

昨日五日夜九時半頃、深川區元南町八大工職石岡友之助の妻とく（二五）は、同町耳無稻荷の縁日に赴いたが、稻荷境内に於て何者かに臀部を突き刺された。傷は幅三厘長さ七厘に餘る

が、皮膚を浅く縫はれたのみで全治一週間の見込、悲鳴を聞いて駆け付けた群集は大騒ぎをして犯人を探したが、まだ何者とも知れない。變態性慾の不良青年であらうと言はれてゐる。これは曾て、田毎刑事が最初に父を訪ねて来た時、父の顔を見るとすぐに口へ出した事件であるが倉知はどうしたきつかけか、製圖最中にその記事を思ひ出したのであつた。

ノートを鞆へ戻すと、倉知の手は急に激しく動き出した。冷却槽から給油槽まで一氣に墨を入れて了ふと、彼は急ぎ足で制圖室を出る。そして間もなく、學校の前から電車に飛び乗つた。

午後三時十五分、元南町の河岸から上つてすたく歩いて行つた倉知彦六は、耳無稻荷の角を曲らうとして、そこで田毎刑事にばつたり出會はした。

田毎刑事は、前日海内ビルディングの廊下で倉知の顔を見てゐるが、僅かに眼をチカリと光らせたゞけで行き過ぎようとする。それを倉知の方から遠慮なしに、然し小さい聲で呼び止めた。

「田毎さん。僕は宇津木の友人です。倉知といふものです」

「あ、さうですか。で？」 刑事は片足踏み出したまゝで忙し氣に言つた。

「僕は宇津木から聞いて皆知つてゐるんです。あなたのトリックは大成功ですよ」

「え？」 刑事は驚愕した體であつた。

「ねえ田毎さん。短刀の出所が知れましたか」

「え、まあ、ぼつ／＼……」

「さうですか。僕は一寸面白いことに氣付いたんです一倉知はそこで一段と聲を低くした。

「そら、例の二本目に出たつていふ兇器ですね。あいつは剛造氏が發見したといふことですが、附着してゐた血は、人の血ださうですね」

「さうです。然し……」

「僕ね、これは剛造氏のやつたことかと思ふんです。いゝですか、剛造氏は五日の夜耳無稻荷の縁目に紛れ込んで、あそこで見物に混じつてゐた若い女の臀部を斬つたんです。新聞記事ですけど、どつちも傷の幅が三糎でせう。君は覚えてゐますか」

「すると、あれに着いてゐた血は？」 田毎刑事は始めて口の警戒を緩めた。

「大工の妻君の血ですよ。あなたのトリックが立派に成功してゐるんです。僕は最初それを聞いた時、實を言ふと少しそれを見蔑つてゐたんですが、剛造氏はトリックに掛つて周章てたのです。蘭子夫人を殺害した時、そこへ兇器を置いて来たけれど、あなたがそれを隠して了つたので、置いて来なかつたのかな、と思つたのですね。で、兇器を再び出さなくてはいけないが、女の血を

着けなくちやならない。それであんなことをしたのぢやないでせうか。もつとも、少うし、無理があるとは思ひますが——」

「いや少しもそんなことはありません」刑事は言つた。「凡て犯人といふものは、何處かに常識では考へられぬ様なへまな處があるものです。殊に殺人を行つた場合などには、感情が極度に亢つて、或る程度まで狂人です。理性がないんです。短刀は置いて来た筈だが待てよ、とかう考へるとさあ一向別らなくなる。記憶に自信が持てないので、それでは又何か次の細工をしなくちやならない、とかういふことになるのです」

「さうですね。剛造氏は恐らく同じ恰好の短刀を二本持つてゐたでせうし——」

「無論です。私は苦心してその事實を探り出したところです」

「だから、剛造氏は實際夫人を殺す時に用ひた短刀を、他の——」と言ひかけて倉知はちよつと思案した。現場にあつた筈の魔酒を入れた褐色の瓶を憶ひ出したのである。と言つて、それを言ひ出せば私の迷惑になることは知れてゐる。で、彼は次の様に續けた。「他の遺留品など、一緒に、どこか河の中へでも投げ込んで了つたのかと思つたのですね」

「さうです。さう思ひ込んで了つたので、二本目の兇器を出したのです」

田毎刑事と倉知とが、剛造氏を疑ふに至つた動機は別であつた。倉知は軍機漏洩事件から先づ考へて行つたのだが、かうして最後の一點でその意見の一致を見たことは、二人の持つ自信を一層深くさせるものがあつた。倉知は流石にそれ程でもないが、田毎刑事の顔面には、重大犯人を捕縛する前の一種精悍な意氣が、一ぱいに漲り渡つてゐた。刑事は、倉知が軍機漏洩事件のことを言ひ出さうとするのを待たず、次の様な言葉を殘して、其の場を飛ぶ様に立ち去つて了つた。

「これから署へ歸つてすぐ手配をします。實は、宇津木さんに一應話をしてからと思つて来たのですが生憎お留守なんです、失禮ですが、そのうちに歸られたら、あなたからお知らせ願へませんか。え、犯人ですか、これも今留守です。何氣ない風で訪問して見ると、今朝早く、娘を連れて外出したといふのでしてね。娘を連れてゐるからには、きつと間もなく歸つて来ますよ」

で然し、刑事と別れた倉知は、私の家まで行つて玄關は錠の下りてゐるのを見て驚かされた。刑事の言葉で、父が留守だとは思つてゐたが、私のことは知らなかつたのである。然し、志村剛造の捕縛といふ、可成珍らしい場面を見られるのかも知れないと思つた。それにもとく、彼は私や私の父に逢ふつもりで来たのだつた。彼は、大きな期待を抱いて、私の歸宅を待つことにした。

三十分、一時間、その附江をふら／＼して、凡そ一時間半近くも待った頃、彼は玄關傍の郵便受の口から、新聞の喰み出ししてゐるのを目に止めた。退屈凌ぎに出して見ると、その日の朝刊である。

「ほう、朝から出たまゝなんだナ。いや、昨夜のまゝかナ」

さう思ひながら、いきなり三面を開いたが、その時彼の顔は、さつと土氣色に變じた。別に新聞記事が變つてゐたのではない。昨夜のことが、ふつと眼に浮んだのであつた。

「俺達は銀座で別れた。あれは剛造氏に見付けられたせいだつた。コブランからあそこへ出るまで、剛造氏は俺達を監視してゐたのかも知れない。いや、コブラン内でも、剛造氏の部下が俺達を注意してやしなかつたかしら。さうとすれば、宇津木のお父さんがグレイバーに變装したこと、それを俺達は得意になつて噂した。剛造氏はもうそれを知つてゐるかも知れないぞ。そして、あつ、さうだ！ 宇津木を自動車へ連れ込んだグレイバー、あれは果して宇津木のお父さんだつたらうか！」

頭の中で、ぐる／＼とこれだけ考へた倉知は、バネ仕掛の様に飛び上つた。

「宇津木さん、もし／＼、お留守ですか？ おい、宇津木、僕だ、倉知だ。お留守ですか？」

しーんとして返事がなかつた。倉知の隣裏には、父の屍體があつた。私の屍體があつた。雨戸を閉ぢたまゝの薄暗い部屋に、彼は二つの血腫い屍體を薙き出した。

倉知は瞬間、聲を立てずに耳を澄ました。

そして又忽ち狂氣の様に玄關の戸を亂打し續けるのであつた。

呪はれた結婚

グレイバー邸の一室に監禁された私は、それからまる四日間、殆んど誰とも言葉を交さずゐた。グレイバーは二三度顔を出したが、もうあれ以上の説明はして呉れなかつた。そして食事を運んで呉れた男は、生來の啞であつた。いつも、アアア、と言つて皿の出し入れをするばかり、私は次第にいら／＼する様になつた。

そしてそれでも、私は容易に脱出しようとはしなかつた。書棚の抽斗に附いてゐた金具を取り外して、浴室の壁を根氣よく掘つて行けば、とそんな風に時々思ひながら、本氣になつてその仕事にとりかゝる氣は起らなかつた。グレイバーの紳士的態度が、何かしら或る安心なものを私の心に植ゑ付けてゐたのだつた。

六月十二日の朝であつた。扉の錠にカチリと錠の差し込まれるのが聞えて、續いて「オハヤウ」といふ聲がした。二日程顔を見せなかつたグレイバーである。私は妙に嬉しかった。「あなた、志村陽子さん愛してますか」グレイバーは後手に扉を閉めながら、だしぬけにかう言つた。

「……え……愛してゐます」私は少しまごついて答へた。

「結婚しますか。式挙げたいと思ひますか」

「結婚はしたいと思つてゐます。然しそれはまだ父と相談の上です。それに陽子が——」

「よろしく」グレイバーは私の言葉を押へ付ける様に、両手を前へ擴げて出した。「あなた種々心配してゐる。無理ないが安心なさい。陽子さんに私少し聞きました。陽子さんいゝ娘さんです。あなたの愛人充分信じるがよろしい」

「陽子がおか言つてゐたのですか。どんなことですか、それは？」

「それ言はない方よろしいです。陽子さんに言はない約束したのです。あなたも陽子さんに訊いてならない。あなた訊けば陽子さん泣きませう。それ訊かずに結婚出来ませうか」

「……」
「ね、何も訊くこともないです。訊かずに結婚早くしなさい。結婚するなら私牧師の役勤めてあげます。この部屋で今日結婚するとよろしいです」

「え、こゝでですか」

「事情あつて、あなたまだ室外へ出せません。こゝで式挙げて二人で暮しなさい。時期待つてす。そのうちに、きつとあなた方出してあげます。心配すること何もありません。可哀さうな陽子さん、賣國奴の娘さん、あなた救つてやるがほんとうですぞ」

グレイバーのこの言葉、賣國奴の娘を救へといふのが、私の胸に強く響いた。そしてそれと同時に私にはあることが薄ぼんやりと判りかけて来た。曾て剛造氏も同様に結婚を急いだが、剛造氏は、既に氏の祕密が暴露されさうになつたのに氣付き、それ故に結婚を濟せようとしたのではなかつたか。

父の列席しないこと、それから山座卯吉のこと、その二つが私の心に暗く影を投げてゐたが、然し私は又思つた。この地下室で、然もグレイバーを牧師としての結婚は、結局正式のものではない。そしてグレイバーは、陽子に何も訊ねるなど言ふけれど、陽子と二人きりになればどうにでもなるのだ。兎に角、陽子に一刻でも早く逢つて見度いと思つた。

「グレイバーさん、僕はあなたの言ふ通りにします」
 私が遂にさう答へると、グレイバーは満足氣に私の手を握つた。

「よろし、たいへんよろしいです。陽子さんになんにも訊かないですぞ」

世にも奇異なる結婚式の有様を、私はあまり詳しくは言ふまいと思ふ。何氣なしに外から觀たのでは、格別變つたこともない筈だつたし、私の頭に湧き出した感想を、一々述べ立てるのも煩しいことである。私達はその日の午後、グレイバーを媒酌人兼牧師として、滞りなく結婚式を擧げて了つた。で、式を終つたが、そして私達は二人きりでその室に残されたが、無論それは甚だ奇妙な新婚の一日であつた。これまでの事情を訊かうとは思つたが、グレイバーからいけないと言はれたのが氣になつて、すぐそれを口に出すことも出来なかつた。溝といふ程でもないけれど、容易には心が解け合はないものがあつた。黙りこくつて、眼と眼をすぐに外らして、ちつとも落ち着きのない、ちぐはぐな新婚の一日であつた。夕食が済むと、私は黙つて本を讀み始めた。眼が字の上を走るけれど、何時陽子に訊き始めようかと、そればかりを考へてゐた。陽子は寢臺の傍の椅子に腰を下ろしてゐたが、そのうちに、突然激しく聲を擧げ上げた。見ると、顔を寢臺の上に伏せて肩を小刻みに顫はせてゐた。

「どうしたんです。譯を仰言ひ。僕は訊き度いことが澤山ある」

いゝ機會だと思つてわざと冷靜にかう言つた私は、然し間もなく自分の感情に溺れて了つた。

顔を伏せたまゝの陽子の手を、しつかり握りしめながら言つた。「言つて下さい。お願いです、陽子さん」

すると陽子はかすかに答へた。

「かんにんして——ね」

「え、なに、なにをかんにんするんです」

「いゝえ、いゝえ、訊かないで、なんにも訊かないで」

「だから、その譯を言はなくつちやあ——」

「いやです」陽子は強情に頭を振つた。

「いや、訊かなくてはならない。僕も言ふことはある。言はなくてはならないんです。僕はあなたのお母さんと——」

「いけない！」陽子は突然大きくそれを叫ぶと、いきなり身體を私に投げかけて、びたりと私の口をその手で塞かうとした。「それも言はないで——あたし、言ひ度くもなければ聞き度くもない

の」
私が彼女の肩に手を廻してやると、彼女はだん／＼に昂奮を静まらせて行つたが、再び私が話を持ち出さうとすると、聞き分けのない子供の様に聲を立て身を悶えた。私は途方に暮れて黙るより他なかつた。

二日三日、私達は同じ様にして時を過ぎた。グレイバーが一日に一度づゝ来て、私に同じ注意を繰り返した。そして然し、私達は次第に心の和み合つて行くのを意識した。彼女が頑強に口を噤んでゐるそのことを除いて、私は彼女を全く信ずることが出来た。私達だけが持つてゐた不思議な洞察力である。私は遂に言つた。

「もう僕は何も訊ねないことにする」

「ほんと？ きつともうあたしを苛めない？」

「けれども、いつかは言つて呉れるだらうね。それまで僕はちつと待つてゐよう」

「きつとよ、ね、さあげんまん」彼女は見る／＼快活になつて、珍らしくもこの様な冗談を言つた。

そしてその翌朝目が覚めた時、私達は妙に口が利きにくかつた。眼と眼がカチ合ふと、彼女はハツとした様に下を向いたが、それはもう、いつもの様な不愉快さを伴つたものとは、全く違つてゐた。

「もう何も訊かなくつてもいいのさ。永久にいいのだ」私はそんな風にさへ思つた。六月十五日のことである。

で、この日から数日の間、私は餘り言ふべきことを持つてゐない。が、只一つだけ斷つて置き度いのは、私が陽子に隠して、或る素晴らしい仕事にとりかゝつたといふことである。毎夜陽子が眠りに降ると、私はそつと床を脱け出して浴室へ忍び込んだ。前から眼を付けてゐたその壁を掘り抜いて、逃げ出せるだけの大きさになつた時、陽子を吃驚させてやらうと思つたのである。グレイバーを信じてはゐたけれど、私は陽子と違つて、いつまでもさうしてゐるのを快く思はなかつた。矢張り自由が欲しかつたのである。室内に製図板の様なものがあつたのを利用して、毎夜の仕事を終る時に、その掘つた穴は隠したが、掘り出したコンクリートの屑には少しく困つた。地下室でなかつたなら、その屑を浴室の廢水と共に流せたらうが、その廢水がポンプで汲み出されてゐたのだし、迂濶な場所に置いてはすぐ發見される。私は思案した末に、書棚の抽斗に入れることとした。モンテ・クリストの様な根氣から、穴は段々に大きくなつて行つた。

あと三日程で穴が明くだらう、さう思つた或る日のこと、それは日暮れ時に近かつたが、廊下が突然に騒々しくなつた。

「それ約束が違ひます。そんなこと言つて、私あの若い人達に済みません」

扉の外でグレイバーがかう言つたかと思ふと、扉が荒々しく開けられて、そこから剛造氏がぬつと這入つて來た。

「あ」私は只ならぬものを感じたが、陽子は素早く私を背後に庇つた。「お父様、どうしてそんな恐ろしい顔をなさるのです！」

剛造氏が何か言はうとすると、グレイバーがそれを遮つた。

「私、あなた方に謝らねばなりません。あなた方結婚させれば、あなた方もヨーロッパ行く約束でした。今夜出發することになつて、志村さん、あなた方こゝへ残すと言はれるです。それなら、私大變無駄しました」

私はこの一言でグレイバーの處置を全部了解したが、その時剛造氏は感情を強ひて押へ付ける様に低い聲で言ひ始めた。

「壯平君、僕は君にいつか約束したね。陽子と結婚した時には、珍らしい贈物をすると言つて置いたね。さあ、今それを進呈しよう」

剛造氏が内ポケットから取り出したのは、細長い箱であつた。黒水引が掛けられて蝶形黒色の喪章があつた。「結納目録」と書かれた四つの文字が眼に付いた。且てあの忌まはしい夜、志村邸の別館で見た奇怪な箱であつた。それまですつかり忘れてゐただけに、私はそれを手に取り兼ねた。不吉な豫感が身體中を駆け廻つた。

「さあ、これを進呈する。結婚はお目出度いことだ。陽子、お前が受け取るのがほんとうだ。陽子、お前は肉身の兄と結婚をしたのだ。壯平君、君は妹と結婚したのだぞ」

剛造氏は言ひ切つて、よろ／＼とグレイバーの肩に身を支へた。

復讐魔

陽子が私の妹である。結婚した私達は兄妹である！

と、この奇怪なる剛造氏の言葉は、それが極めて明瞭な、然も恐るべき意味をしか持つてゐなかつたにも係らず、私は最初、妙に白々しい氣持でそれを聞いてゐた。何か非常に譯の判らない無法なことを言ひかけられた氣持であつた。又は、自分と全く縁の無い、他人事の様な氣さへし

た。
陽子も同様であつたに違ひない。暫時の間彼女は、剛造氏の顔とその不吉な箱とを、まじく、見較べてゐるのだつたが、やがて愕然とした風で剛造氏に駈け寄り、その胸へひしと取り纏つた。

「何を仰言るのです。しつかりして下さい。お父様、氣を鎮めて下さいまし」

すると剛造氏は、陽子の兩肩に手をかけて、掴み殺してもするののかの様に、肱へぢわくと力を入れた。手頸からかけて十本の指をぶる／＼と細かく震はせた

「ふん、氣狂ひだといふのだナ。さうか、さう思ひ度いのか。儂もさう思ひ度いのだ。だが、だが儂は正氣だぞ。儂が正氣だといふことは、お前が儂の娘でないのと同じくらゐ確かなことだ。

陽子！」

諛語の様に喋り続ける剛造氏は、兩手を激しく動かさせた。陽子の頸が、壊れた人形の様子に、がくんがくんと揺すぶられた。

「よいか、お前は宇津木孝作の娘なのだ。知るまい。夢にもそれを知つてはるまい。知つてゐるのは、一人この儂があるだけだ。お前の亡き母親、八重子すらそれを知らなかつたのだ。儂だけが、お前達の畜生道に陥つたことを知つてゐる。恐ろしくはないか。地獄だとは思はぬか」

「あなた、なに言ふです。酒に酔つて何言ひます。恐ろしいこと言つていけません。お酒飲んだのが悪いです。よしなさい！」

グレイバーが半ば辯解する様に、そして叱責する様にかう言つたけれど、剛造氏は諾かなかつた。

「いや、言ふ。儂は言ふぞ。ふん、儂の遣り方が餘りに残忍だと言ふのか。よし、言ふならば勝手に言へ。宇津木と八重子とは、同様に残忍なことをしてゐるのだ。儂をして復讐魔たらしめるのは、誰なのだ。それを言へ。それを先づ答へて見ろ」

かう言つて剛造氏が陽子を突き放すと、陽子はぼつたりと床に崩折れて了つた。氣を失つたのである。私は狼狽して陽子を抱き上げた。

剛造氏が續けて何事かを哮り立ち、グレイバーがそれをしきりに宥めてゐた。そして、聲がだんだん荒くなつたかと思ふと、二人は取つ組合を始めて了つたが、私は陽子の介抱にかゝりきつてゐた。遂にグレイバーが、怒つた様に赧い顔をして剛造氏を室外へ連れ出してしまふまで、私は一步も陽子の傍を離れ得なかつた。

「志村さん酔つてるんです。言つたこと何かの誤解です。時間足りないから行きますが。あなた方、氣にしていけませんぞ」
 グレイバーがかう言つて、剛造氏を引立て、行く覺音を聞きながら、私は一人きり、陽子の傍に残されたのであつた。

靴音と剛造氏の荒々しい聲とが、頭上に消え去ると、地下室は急に静かになつた。いつの間にも正氣づいたものか、陽子は薄く眼を見開いたが、私の顔を見ると、怯えた様に顔を背向けた。剛造氏の残した恐ろしい言葉が、彼女の胸へ深く突き刺さつてゐるのだつた。

氣が付いて見ると、床には例の箱が轉がつてゐた。グレイバーが剛造氏を連れ出さうとした時に投げ出されたものであらう。私は、それを手に取らうか取るまいとして暫時思案したけれど、結局、内容を調べずにはゐられなかつた。蓋を取り除けると、陽子も遠くから私の肩越しに、そつと顔を覗かせる氣配であつた。私は無言のまま、その箱の中から厚ぼつたい一本の封書を取り出した。

封を切ると、それは數枚の書翰箋であつた。細い字がぎつしりと書き込まれた父宛ての手紙であつた。私は今、その全文を敢に掲げようと思ふ。私にとつては、忘れ得ざる文面なのだ。

宇津木君

僕は今、久し振りで君の名をかう呼んで見るのだ、が然し、それは決して古い友情を起し起しつてのものではない。君が若し、僕の手紙を見て、萬一にもその古い友情を蘇らす様なことがあれば、それこそ飛んでもない心得違ひと言ふべきだ。君は冷静にこの手紙を讀むがよいのだ。

君と僕との間に八重子といふ存在が現れた時から、僕が遂に八重子と結婚するに至つたまでのいきさつを、君はまだ充分に覚えてゐるだらう。戀を僕に譲ることを宣言し、そしてあの結婚式には、遠く地中海上からさへ祝電を送つて呉れた君に對し、當時の僕がどれだけそれを喜んだか、又それと同時に、君の餘りにも篤實過ぎる友情を僕はどれだけ心苦しく思つたか、いかに君でもそれを想像することが出来る筈だ。僕は何んにも知らなかつたのだ。

君は、家庭的事情のために八重子と結婚することが出来なかつた。當時君は妻君を亡したばかりで幼い壯平君を抱へてゐたのだが、八重子を君の家に迎へることが出来なかつた。そして君は、君にとつては何時でも出入自在であるところの僕の家を以て、八重子の爲の安全なる港に當つたのであつた。君か僕か、そのいづれかが八重子を獲なければ、彼女は貪婪なる某富豪の餌食

になるところでもあつたので、君は賢明にも、僕を以てその保護者たらしめたのだ。そして愚なる僕は、最も危険なる君を最も善良なる友人として、實に幾度か僕の家庭へ迎へたのだ。

僕の結婚式が済んで一ヶ月程の後、君は歐洲航路から歸つて來た。そして、健康を害したから當分日本に居て静養すると言つた。海上生活を止めるとも言つた。僕は又それと反對に、極めて短かい休暇の後を、再び紀文丸へ乗り込まねばならなかつたが、あゝそれこそは、驚くべき程才智に長けた君の計劃であつたのだ。僕の留守中を君の戀人として八重子の室を自由に訪れ、僕が航海の合間に上陸すれば、君は友人として僕等の家庭に入り浸つたのだ。僕の愚かなのに對して、君は何たる才人であつたか。

君の不信極まる行爲に氣付いたのは、僕の船が南米のバルパライソに着いた時だつた。あそこ、蘭子からの手紙が僕を待つてゐたのだ。何の手紙か？ それは、君と八重子との關係を詳しく知らして呉れたものだつた。そして僕は、あの手紙を見てさへも、まだすぐには君を疑ふ氣になれなかつたのだ。繰り返して言ふ。なんと愚かな僕であつたことか。

その航海の歸途、僕はナウル島の附近で短刀を買ひ求めて來たが、それは君と決闘する爲であつたと言へ、他方に於て、君の心を試し得るかとも思つたのだ。何の説明もなしに、決闘を申込んだ時の君の態度に依つて、蘭子の手紙が眞實であるか否かを確かめ得ると考へたのだ。いきなり決闘を申込んだら、君は果たしてどんな態度を採るか、僕は恐ろしい氣持でそれを想像しつゝ日本へ歸つて來た。

が然し、さうして家へ歸つて來るや否や、僕は決闘を申込む意志を全然失つて了つた。君を信じたからではない。蘭子の手紙が嘘だつたからではない。決闘することが馬鹿らしくなつたからである。君が決闘するにさへ値しない男であることを發見したからである。何故か？ 君にはまだ納得出來ぬかも知れぬ。僕が歸つて見ると八重子は妊娠してゐたではないか！

宇津木君！

こゝから先きは、流石の君さへも全く知らないことなのだ。よく落ち着いて讀み給へ。

八重子が妊娠してゐたといふことは、格別不思議でもないと言ふだらう。僕は一航海を終る度に上陸してゐるのだ。僕の妻たる八重子が妊娠したとて、そこに何の不思議がある、君はかう言ふに違ひないのだ。けれども、僕にはそれが實に意外なことであつた。恐ろしいことであつた。幸か不幸か、僕には子供の出來ないといふことが、それ以前から判つてゐたではないか。偶然な機會から或る醫師にそれを宣告されてゐたのだが、疑はしくば、その時再び改めて僕が診斷

を受けたS醫學博士の診断書を見るがい。この箱の底に、君はその診断書を見出すであらう。八重子の妊娠を知った僕は、その事實に依つて、ストリンドベルクの「父親」に現れたあの苦悶だけは完全に免かれることが出来たのだ。自分の子供か否か、それを疑ふの餘地が少しもなかったのだ。

八重子の生み落したのが陽子であることは言ふまでもないが、さうは言つても、僕は陽子の父が果たして君か否かといふことに就いて猶一分の疑念を抱いてゐた。僕が君に、南洋のものだと言つて珍らしい半月形の短刀の見せたことのあるのを、君よどうか思ひ出して呉れ。あの時僕は誤つて君の指を切つた。そしてその出血は可成甚しかつたが、あれこそは或る法醫學者の勧めに従つて、我々の血液を試験する爲であつたのだ。君の便を思つて、僕はその後某雑誌から切抜いた「血液に依る親子鑑別法」なる小論文と、その時の試験結果とを茲に同封するが、君、八重子、そして陽子の三人が、論文中に言はれてゐる純第二型であつたことに注意して欲しい。君が陽子の父親であるといふ完全なる證明は出来なかつたにしろ、君と八重子とからなる、陽子と同型の血液を持つ子供が出来得るが、僕と八重子とからは、陽子の生れ得る理のないことを、君は充分に納得して呉れるであらう。僕に子種があつたにしても、その子供は第四型以外の血液を持ち得ぬのだ。僕は陽子の父でない。そして、君が陽子の父なのだ。

さて、それ以來、君は氣がさしたのか、次第に僕の家庭から足を遠のけて行つたが、僕は茲に於て、始めて復讐の第一歩を踏み出した。母こそ異れ、どちらも君の子供であるところの、陽子と壯平君とを結婚させてやらうと思ひ立つたのだ。陽子は母親の八重子に生き寫しで實に美しく成長し、壯平君も又、君の若い時同様に、いやそれ以上に立派なる青年となつて、二人の間に戀の芽生えるのは當然の成行である。八重子が病歿する前後から二人は戀を語らう様になり、僕は沈黙のうちにそれを見守つてゐたのだ。二人が結婚した後、君がこの手紙を見てどれだけ苦しむか、それを樂しみにして、僕はちつと時期を待つたのだ。

君達にして、若しも陽子の眞の父が誰であるかを知つてゐたならば、恐らく僕の復讐は成立しなかつたと思ふ。さうすれば、陽子等が接近するのを、君達は妨げるべきであつたからだ。が然し、君は勿論それ知らなかつたし、八重子ですら、僕を陽子の父なりと信じてゐた。流石に彼女は初めのうち多少の疑惑を抱いたかも知れない。だが僕は、僕の身體が持つ秘密を決して彼女には知らさなかつた。そして殊に、例の血液試験は、彼女を欺くにも充分役立つた。無論適當な機會に何氣なく説明してやつただけけれど、全くの素人に向つて「マイナス」の反應を「プラス」と

説くことは極めて容易である。彼女は、僕が陽子の父に非る證據を見せられて、その反對のことを信じさせられて了つたのだ。かくして、僕の計劃は着々として進んだわけである。尤も然し、罪の無い若者達に對して、僕の遣り方は餘りに残酷だと、さうだ、それを非難するのは恐らく君ばかりではないだらう。いかにも、僕はそれを認めざるを得ない。甘んじてその非難を受けるとしよう。僕自身その點に思ひ至つた時、僕は少なからず苦しんでゐるのだ。けれども僕は、爾來生きながら鬼畜になつた積りである。人並みの感情や道德觀、そんなものは根こそぎ僕の體內から抜け去つたのだ。八重子の不貞を知つて以來、彼女に對して、表にはあらゆる優しさを示しながら、廿年間水の如き冷酷さを持して來た僕である。憎むべき毒婦蘭子が、君に恨みを抱いてゐると聞いて（そのことは君自身覺えがあらう）彼女をさへこの家へ入れた僕である。蘭子の云ふがまゝに、母國をさへ賣らうとする僕である。

宇津木君！

僕を呪ふならば呪ふがよろしい。いくらでも呪へ、思ひ切つて呪ひ給へ、この手紙を君が見る頃には、僕にとつて全く新しい、然し孤獨な生活が始まつてゐるだらう。

月 日

志 村 剛 造

読み終つた私は、いきなり縦の中から、二枚の紙片と古雑誌の切抜きとを握み出した。手紙の文面全體が、恐ろしい程眞實に溢れてゐるのを感じたけれど、私は無理にでもそれを信じまいと思つた。グレイバーを牧師として行はれた結婚は、既に既に、形式だけの結婚とは言へなくなつてゐたのだ。餘りに酷い結婚ではあるまいか！

「ばかな！ そんなことがあるものか！」

私は剛造氏を呪ひつゝ、次の書類へ目を移した。

その夜の記憶

血液型の試験結果の報告書、及びS醫學博士の診書、その二つは剛造氏の言つた通りになつてゐた。Fといふ醫學博士の「血液に依る親子鑑別法」なる論文に照し合せて見て、剛造氏が陽子の父親でないことは明かであつた。私はそれで少なからず氣を落したものだつた。

が然し、それと同時に私は、その論文を二三度読み返すうちに、漸く一縷の曙光を認めることも出來たのだつた。論文の内容は、これを委しく紹介するのを避けて置くが（作者曰す、新青年第

八卷第二號四三五頁古畑博士の講話参照)それに依つて私は、血液型の遺傳型式といふものが、剛造氏が陽子の父でないことを證明出來ても、私の父が陽子の父に相違ないといふ肯定的或は積極的證明は不可能であることを知つたのであつた。血液型の試験は、親子の關係を、否定的には鑑別出來ても、肯定的には證明出來ないのであつた。

「いゝのだ。まだ急ぐことはないのだ」

私は、半ば自分自身に言ひ聞かせる様にして、陽子に漸く言葉をかけた。妹だとは思ひ度くなかつた。そして戀人とも妻とも言へなかつた。出来ることならば、私は一人きりでゐたい様な氣持で、陽子の姿に目をやつた。

陽子はそれまでちつと黙つて首垂れてゐたのだつたが、やがてふら／＼と立上つた。グレイバ―と剛造氏とが立ち去つたまゝ、入口の扉はまだ開け放されてゐる。彼女はふら／＼とその方へ歩いて行つた。

「どこへ行くのです」私は思はず言つた。

「……」無言のまゝ、こちらを振り向いた彼女の眼は、大きく乾いてゐた。涙はなかつたが蒼ざめた頬であつた。

「……」無言のまゝ、こちらを振り向いた彼女の眼は、大きく乾いてゐた。涙はなかつたが蒼ざめた頬であつた。彼女の色から、不確かとは言へない程に或る悲痛な決心を読み取つた私は、すぐにかう言つて彼女を引止めた。そして彼女は、それに對して別にあらそふ風も見せなかつた。す／＼と歩みを戻して來た。

「死ぬならばいつでも死ぬる」私は不思議に冷靜な頭になれた。「まだ死ぬのは早い。知らなくてはならないこと、調べなくてはならないこと、父に逢つて訊かねばならぬことが澤山ある。僕は、僕の父とあなたのお母さんとの關係さへ信じてはゐないのだ。志村さんはきつと何かの誤解をしてをられるのだ」

「いゝえ、いゝえ」陽子は物憂げに頭を振つた。「私が前に聞いたことは、みんなほんとだつたのです」

「なに、何を前に聞いたといふのですか」私は、はつとして問ひ返した。

一旦口を利き始めた陽子は、それから後、可成早口に喋り始めた。途中まで行くと、突然ヒステリックに泣いたりなどしたけれど、しばらくすると、又喪心した様に靜かな口調で話し續けたのであつた。陽子がこれまで私に秘し隠してゐたことや、山座卯吉に對する彼女の態度などが、

そこでだんだん明かになつて行つたわけであるが、それを順序よく述べるには、六月四日、即ち蘭子夫人の殺害された日から始めるのが、最も便利であると思ふ。繰り返し繰り返し、私はあの不快な夜のことを憶ひ出さねばならぬのだ。

六月四日の夜、陽子が帝劇へ行つてゐたといふことは、果して蘭子夫人の出来かせであつた。女學校の同窓會があつて、晝間からそれへ出席してゐたのだが、夜の部の餘興が長びき、彼女は九時少し過ぎに西八軒町の自宅へ歸つて來たのだつた。そして一旦自分の部屋へ行つて平常着に着かへると、その日に受けた、軽い昂奮や疲勞を休めるために、彼女は暗い庭内をぶら／＼と歩き始めた。

いつもだと、決してそんな氣の起ることはなかつたけれど、彼女はふと、例の別館の灯影を氣にしました。云ふまでもなく、その時私は蘭子夫人に、あの怪しい飲物をしきりに勧められてゐたのだが、陽子はそれを知らずに、窓の外へそつと身を寄せたのであつた。私が、あの瞬間に見た臙氣な東の窓の顔は、なんと、理由もなしに私が懼れた通り、それは陽子の顔であつたのだ。

そして彼女がそこで何を見たか？ パツと眼に映つた意外な光景で、彼女はいきなり、バタ／＼と逃げ出したことである。

彼女のその時の心臓は、恐らく激しい憤りで止度もなく、跳へてゐたに違ひない。殆んど夢中で母屋の方へ走り戻ると凡そ三十分間も、机の上につ伏して了つた。が、頭が漸く静まつて來るにつれ、強く強く胸の中に湧いて來るのは、も一度確めて見たいといふ欲望であつた。それをチラと見て來ただけの彼女は、あれが私であつたことを萬一の見違ひにしたいとなつたのである。確めることそれ自身が恐ろしくもあつたけれど、そして又限りなくはしたない忌まはしいことにも思へたけれど、結局彼女は破れかぶれの勇氣を奮ひ起した。登音のしない様に、今度はフエルト草履をさへ穿く程の用心をして、再び庭に降り立つたのであつた。

別館はその時、ふつと灯が消えて、それが彼女に、餘計忌はしい想念を抱かせたけれど、別館の玄關前、八ツ手の植込みの蔭へまで忍び寄ると、彼女はどきつとして葉蔭へ身を隠さねばならなかつた。玄關の扉が開けられて、ぬうつと半身を現したものがあつた。闇の中ではあつたが、それは陽子に言はせると、紛れもない私の姿であつた。詰襟の學生服を着て、闇に包まれた臙氣な輪廓のうちに、彼女は私の姿を認めて了つた。

かゝつとのぼせた彼女は、八ツ手の葉蔭からバラ／＼走り出さうとしたのだが、それより前に扉は再びぴたりと閉ぢられた。闇の中の顔は、一通り庭内を見廻しただけで、音もなく扉の内に

呑み込まれて了つた。彼女は、深い淵に突き落された心持で、力の無い足を自分の部屋まで運んだのであつた。萬一の望みが無残にも打ち砕かれたのである。

翌日、彼女は午前中を床の中で過した。蘭子夫人と私とを呪咀し續けたのだが、そのうちに蘭子夫人の死が発見されると彼女の心は生々と蘇つて來た。

「あの人はお母様に誘惑されたのだ。そしてそれに打ち勝たうとなすつたのだ。お母様をあの人が殺したのではなからうか」

私の家へ駆け付けて來たのはそれからのことで、彼女は私の態度から何かしら探り出す積りだつたさうである。と言つて結局何一つ言ひ出し得ずに引返して行つたのだが、それ以來づつと引續いて、彼女はそれを頭の中に置いてゐるのだつた。蘭子夫人に對する私の潔白を信ずれば、或は信じようとすればする程、彼女は私の殺人犯たることを、肯定せねばならなかつた。

「何故それを今まで黙つてゐたんだ？」私は少しく憤つてかう言つたものである。

陽子はそれに對して、その問題に觸れれば、彼女自身其の夜の不快な印象を新たにしなければならぬ。それが、言ひ出さうとする度に彼女の口を阻ませたのだと答へたが、然し彼女は、この場合に於てさへ、次の様に言ふのであつた。

「私が黙つてゐたものだから、あれは、鋸頭自殺といふことになつたのですわ。そして私達が死んで了ひさへすれば、他殺といふことが判つても、犯人は永久に謎として残るでせう。若し、どうかしたことで、お兄様が（その時彼女は、私をどう呼んだらいいのか、ひどく困る様子であつたが、）あの夜あそこへ行かれたことが知れても、ひよつとすれば、嫉妬のために私が殺したのだと間違はれるかも知れませぬわね」

「何を言ふのだ！」私は答へた。「僕が殺したなどと飛んでもないことだ。僕ではない」

「え！」彼女は呆れた様に私の顔を見守つた。

「では、別館の灯を消してから、あなたはあそこで何をしてゐました。扉を開けて庭内の様子を見廻した後、再び扉を閉めて中へ這入り、そこでどんなことをしたのです。暗い夜でしたけれど、私はちやんと、その顔を見て置いたのですよ」

私はそこで、當夜の私が、魔酒のために全然意識を失つてゐたことを説明せねばならなかつた。「だから、僕ではない。僕が殺したのではないと思ふ。無意識中に玄關口へ顔を出したかも知れない。そして或は、無意識中に人殺しをやつたのかも知れない。けれどもそれは、みんなあの魔酒のためだ」

私が言ふと、陽子は淋しく、ホ、ホ、と笑つた。そして投げ出す様に言つた。

「さうね。そして今となつては、そんなことはどうでもよいのです。私達は兄妹ですもの」

「さうだ。その方が大切なことだ。知つてゐることを、みんな話してごらん」私は次を促した。

陽子が、私の父と八重子夫人とに關して、前に聞いたことがあると言つたのは、訂して見ると、彼女が山座卯吉から聞き出したものであつた。

六月六日、山座卯吉は次の様に言つて、陽子を帝劇へ連れ出したのである。

「殺されたのはね、ほんとは僕のお母さんなんですよ。吃驚したでせう。僕はまだくゝいろんなことを知つてゐるのです。宇津木家と志村家の關係だつて、何から何まで母に聞いてゐるんです。

どうです、聞き度いと思ひませんか。今夜帝劇でも觀て、その歸りに話してあげませう。きつと僕と一緒にゐて呉れますね」

その言葉が、陽子をひどく臆病にしてしまつた。一方では私が殺人罪を犯したと思つてゐるし、

山座がまだその他にも、何かしら私の秘密すら握つてゐる様な口吻をも漏らしたので、遂にあの夜は帝劇から日比谷へまでも行つたのだが、そこで彼女は、先づ、蘭子夫人が山座の母であること

して、蘭子夫人、八重子夫人三人の間に、三條關係のあつたことを知つたのであつた。蘭子夫人が眞實を撮る時に連れ立つて行つた船乗りらしい青年は、思ひも依らず私の父であり、そして、八重子夫人は私の父の戀人であつたといふのである。父は蘭子夫人よりも、八重子夫人を愛してゐたといふのである。私は、がーんと、脳天を打ちのめされた様に感じてしまつた。

「そんなわけですもの、私、山座さんからそれを聞いた時は、山座さんがいゝ加減なことを言つてゐるのだぐらゐに思つてもありました。ですけど、この手紙を見ると、一々思ひ當ることばかりです。みんなほんとのことではありませんか。私達は矢張り兄妹だつたのです。浅ましい、浅ましい、兄妹です。誰にも私は顔を見られたくない」

語り終つた陽子は、もう涙も出ない風でかう言つたが、やがて又、激しく泣き出した。蘭子夫人の死がなんであらう。

軍機漏洩事件がどうしたといふんだ。

剛造氏が言つた様に、浅間しくも私達は畜生道に墜ちたではないか。

しばらく肩を顫はしてゐた陽子は、やがて又淋しい顔をこちらへ向けた。妻としてゝなく、戀人としてゝなく、私達は兄妹として顔を見合せてゐなければならなかつた。が、悲しくもそれは

到底堪へられることではなかつた。ちつと押し黙つてゐるうちに、私達哀れなる者同志は、どちらからともなく、ひしと抱き合つて泣いた。

天も地も共に碎けよ！

私は逃げ廻る陽子の手をいつまでも握りしめてゐた。

畜生道に墮ちた旅藝人の二人のうち、その妹が死んだ後、兄の行く先きに白い小犬が躑き纏つたといふ話を、ちらと頭の隅に思ひ浮べながら、私は陽子の手を握りしめた。

そして陽子は、狂人の様に、私の胸の中で泣きじやくつてゐた。

死の前の、不思議なる狂氣で、それはあつたのだ！

死生の岐路

「兄妹としてではなく——」

「戀人同志として——」

それは恐らく夜の十二時に近い頃であつたかと思ふ。ひつそりしたグレイバー邸の地下室で、私達は言葉にこそ出さなかつたが、互に眼と眼でさう誓ひ合つた後、妙に静かな氣分で立ち上つた。死の動機が何であるにせよ、そこには悔もなげれぬ恨もなかつた。理性が何をも殺へないとも、その理性から導かれたものは、不思議なる悦樂であつた。氷の如き恐怖の後に、火の如き情炎があつた。そして最後に、あらゆる人の約束を破つた。それが故に又自暴自棄と見られたり、又は諦めとも見られるところの、奇妙なる安心にまで行き着いたのであつた。

最初私達はその室内を最後の場所とする積りであつたので、入口の扉はぴつたりと閉め切つた。錠が自然にかゝる様になつてゐて、もう出ようとしても出ることは出来ない。陽子の帯を解かせて、私達は縊死を遂げようと決心した。生から死に移るのを全く意識しない程、急速に樂に死ねるといふその方法が陽子のために、最も好ましく思はれたのであつた。

が然し、陽子の帯を天井から吊り下げようとした時に、私達の運命は、ひよいと思ひがけない方向へ外れて了つた。今思ふと、冷汗の出る様な恐ろしい瞬間であつたが、その時私は、踏臺に書棚の抽斗を利用しようとして、その中に充たされてゐたコンクリートの屑を、床にザラ／＼とぶち撒けたのであつた。

「まあ、それはどうしたのです？」陽子が訊ねた。

「逃げ出さうとして、浴室の壁に穴を掘つたのだ。が、もう用はなくなつたね」

私は微笑しながらさう答へて置いて、抽斗を室の中央に積み重ね始めたが、間を置いて陽子が晴れ晴れしい聲で言った。

「その穴から外へ出られるの？」

「どうして？——さう、もう少し掘れば——」

「ぢやあ出ませう。陽子は氣が變つた風で言った。あたし、もつといふ空氣のところまで死にたい。胸一杯、いふ空氣を吸つて見たい」

無理もないことであつた。六月の末で、室の中はじめく／＼してゐるし、それに二人共肌はべとべとに汗ばんでゐた。私達は、掘りかけの穴を再び熱心に掘り始めたものである。

あと三日程で掘り抜けると思つたのが、いつもの様に音を盗むでもなく、二人共力したせいであつたらう。夜のしらじら明けに、穴は向ふへ通つて了つた。

穴を抜け出してその部屋に這入ると、そこは物置きの様子なところであつた。浴室の方から漏れて来る光と夜明けの薄い明るさで大體の様子が略知れる。幸にも、廊下との境が案内無難作な硝子窓になつてゐたので、その方へ手探りで進むと私は妙に、ぐんにやりしたものを踏み付け

づる／＼とそれを穴の口まで引つ張つて来て見ると、意外にも、相崎老人の盛んだらけの襦袢が現れた。ずつとずつと後にそれと推察されたことではあるが、これは、剛造氏が殺したものであつたらしい。剛造氏はその手紙の中にも言つてゐる様に、蘭子夫人の性質を最初から知つてゐたものなのだ。妖婦と知つてそれを志村家へ迎へたものなのだ。相崎老人が、グレイバーの曾て言つた如く、どんなに悪い人間であるかを、勿論充分知つてゐたに違ひない。剛造氏は、この事件の最後の締括りに、この人間の始末を付けたものであつたらう。

然しその場合、私等にとつては、さうしたことは實に些細な問題であつた。それとは全く別に、私達は意外な心理的影響を、この屍骸から及ぼされたのであつた。

いかなる影響か？

それは、屍骸がいかにも見苦しいといふことであつた。

同時に又、嫌悪すべき自分達の屍骸が、眼の前に見えて来るのであつた。

一轉してそれは、死にたくないといふ氣持を多分に呼び起すのであつた。

屍骸を見られないところで、といふ氣持もする。

が然しそれでも、私達は生きることが許されない運命であることを、まさぐ／＼と見詰めてゐな

ければならなかつた。陽子も恐らくさうであつたらうが、私達は、重い重い氣分で、その物置から廊下へ出た。廊下から階段を上つて地上へ出た。誰一人にも見咎められず、私達はグレイバー邸から離れて、しよんぼりと小徑を辿り始めたのであつた。

遠く汽車の響きが聞えたので、小高い土手に上つて見ると、眼の下に灰色の屋並が廣がつてゐた。鉛色の海があり、船がある。まだ非常に早い朝だつたが、それは横濱であつた。振り向くと、グレイバー邸は、すぐには見えなかつた。技巧の限りを盡した建て方と塗り方とで、それは巨大な青蛙の様に、緑の谷間に匍ひつくばつてゐた。

「どうする？」

邸を脱出してから、私はそれまで一言も口を利かずにゐたのだが、自分の心中を見透かされまゝいと卑怯な注意を拂ひながら、どちらともつかない質問を浴せた。

「どちらでも——」

陽子は賢い返事をした。

「この徑を下つて行かうか」

「さうだね——」

そんなことを言ひ乍ら、私達の足はひとりでその小徑を、ぐんぐんと下つて行つた。

「誰かに見付けられると面倒だがねえ」

「さうね。でも、海の方は——」

誰かに見付けられるのを寧ろ望む様な、ずるい考へをお互に恥ぢながら、然し相變らず街へ近づいて行つた。やがて、家々が次第に接近して來ると、とある大きな家の堀のところで、陽子は、わつと言つて泣き出した。

「悪かつた、あそこで死ねばよかつた」私は言つた。

「いゝえ、あたしが、あたしが悪いのです」彼女は涙の間から途切れ途切れに言つた。

捕へどころの無い心の動き方である。私達は、そこで再びひしと抱き合つたが、やがて私は言つた。

「ね、もうかうなつたら仕方がない。お父さんや、それから、會ひ度い人には皆んな會つてから、もつとしつかりした心持で死ぬ方がいゝだらう。私が意氣地なしだつたのだ」すると陽子は、ちよつと甘える様な口調で答へた。

「いゝえそんなことはないの。だけどその方がほんとにいゝわね。そして、わたし、一時でも別れるのはいや」

父に會ひ度いのが第一であつたけれど、それは一面に於て、非常に氣の進まないことでもあつた。父を恨むといふよりも孤獨に残さるべき父に對して、何か訊ねたり訊ねられたりせねばならぬのが、堪まらなく重苦しく感じられた。とある店の電話を借りて私が第一に掛けたのは、學校の寮にある管の倉知彦六への、電話であつた。

「え、宇津木か！」

懐しくも快活な倉知の聲は、金屬的な響を帯びて私の耳に傳つて來た。

「行くとも。僕ア心配してたゾ。なに？ 櫻木町驛へか？ よし、すぐ行くぞ。お父さんだつて、とても心配してをられるんだ。待つてゝ呉れ。あ、金は持つてるか。なんなら僕が用意して行くよ」

私と陽子とは、急ぎ足に櫻木町驛へ向つて行つた。

驛は、ぼつ／＼混み合ひ始めてゐた。東京への勤人と、横濱への勤人と、改札口で機械の樣に入れ代るのを眺めてゐると私は倉知の小黒い顔と、漸くそこに見出した。

「うん、お父さんもすぐに來られる筈だ。學校の給仕に頼んで知らしめたから」
倉知は、私の手を強く握りながらかう言つたが、その父を待つ爲に陽子を改札口に待たせて置いて、私達は人氣の少い構内の片隅へ行つた。陽子は、淋しさうに、ブラットホームの方を眺めたり、私達の方へ視線を送つたりしてゐた。

「心配したぞ。なにしろねえ、君の家がから空きなんだ。恰度、君のお父さんが歸つて來られたのはよかつたけれど、君が全然消滅しちまつたもんだから、今まで、ひどく案じてた。君はいつたいどうしてゐたんだ？」
倉知は相變らずの調子で、然しそれは無理もないことだつたが、かう言つてからすぐ言ひ直した。「や、然し、君のことは、お父さんが來られてから一緒に聞かう。なんだか、ひどく疲れてゐる風だね」

「あゝ、なに、そんなでもない」私は只、なんとなくさう答へるより他なかつた。

「それでね、あの後、志村氏の姿も見えなくなつたが、結局、家宅搜索といふことになつたのだ。するとねえ、あの別館が大したものだつた。僕はそれを田毎君から聞いたのだが、別館の書齋の北側に、段々に高くなつた書棚があつたらう。あれが天井裏の抜路へ出る階段でね、あれから天井裏へ出ると、壁の間を又下つて耳無稻荷の方へ、石垣の下を通つて路がついてゐるんだ。

出口かね。それ、青銅で作った天水桶がある筈だ。あいつが横つちよへ口をパツと開くのだ。秘密な用件はあの路を通つて行はれたのだ。ウエルキンスの死骸を運び込んだのもあそこの路だし、さうくそれからまだある。君は、腎肉事件といふのを知るまい」

倉知は、私にとつては少し、迷惑な程度に喋り立てたが、その途中で、ふと言葉の調子を改めた。

「君、君のそのポケットにある厚ぼつたい封書はなんだい？」

私はそれを見せまいとした。が、倉知は諾かなかつた。封書を殆んど無理矢理に私の手から奪ひ取つて読み始めたが、だんだんに顔色を緊張させて行つた。時々、ふつと顔を上げて、私と陽子とを素早く見比べたが、再び手紙を読み續けた。

そして、驚くべき早さで例の論文の方まで読み終ると、心配さうな、然し、慰める様な言ひ方で口を開いた。

「君、まさか、これをこのまゝ信じてゐるのではないだらう」

「……」私は答へなかつた。

「信じてはいけないぞ。陽子さんには氣の毒だが、志村氏は實に恐るべき人物だ。それに、君のお父さんが陽子さんのお父さんだといふ證據は、……確定の證據ではないから……」

「……」私はまだ黙つてゐたが、確定的でないといふその言葉が、それは既に私が前にも氣付いたところであつたけれど、かうして倉知から言はれて見ると、なにかそこに力になるものゝあるのを感じさせられた。

「いゝか、萬事僕に委せて呉れ。僕がそれを解決するまで、君は決して妄動してはいけないぞ。君は當分の間、そのことを忘れてゐた方がいゝんだ。萬一にも、君がどうかしななければならない場合になれば、僕はいつでも手を引く。いゝね、僕に委せて置いて呉れるね」

倉知がさう言つて、私の肩へ力強くその手をかけた時、陽子の突つ走る様な叫び聲が響いた。

「あゝ、見えました！」

見よ！ 櫻木町驛のプラットホームから、階段をひらり／＼と飛び降りた父は、人の波をもどかしさうに掻き分けて、靴音高くこちらへ走つて來るのであつた。

眞犯人

「どうした？ 志村君は無事であるか？」

父の最初に發した質問はかうであつた。父を迎へた私達は、そこからすぐと驛前のレストランへ行つたのだが、驛の改札口では、先づ父の口から出た言葉が、それであつた。

「昨夜出たまゝです。グレイバーがそんなことを言つてましたから、船へ乗り込んだのではないでせうか」私は少しく奇異な感じに打たれつゝ答へた。

「グレイバーと一緒に言ふのだね。さうか、それでよかつた」

「え?!」とこれは倉知であつた。

「いや、まあ、どこかへ行かう」

父はさう言つて、大股に歩き出すのであつた。

レストランでは、まだ店の掃除さへ済んでゐなかつたのを、私達は特別室へ通して貰つた。珈琲が出るまでを、私は何かしら訊き度くて堪まらずにゐたけれど、倉知がしきりに眼配せをした。父は黙つて考へ込んでゐる風だつたし、陽子は、ひつそりと窓の外を眺めてゐた。

「港内の船にゐるんでせうか？」

最初に口を切つたのは倉知である。その時珈琲が運ばれて來た。註文を聞いて女給が立去ると、倉知は又言つた。

「どういふ譯なんですか。認明して貰へませんか」と父が上げた顔は、それまで稍俯向き加減にしてゐたのだが、私にはまだ見たこともない様な不思議な表情であつた。そして唇をびく／＼と動かし、かと思ふうちに、斷然意を決した、といふ様な態度ではつきりと言ふのであつた。

「よろしい、お話ししよう。壯平、それから陽子さんも聞いて下さい。あなたのお父さんに關したことですけれど、どうか聞いて下さい」

「……」私達は、緊張し切つて父の顔を仰いだ。

「僕は、實を言ふと、前々からこの事件の内容を知つてゐたのだ。志村君のやつてゐることを、お前達、殊に陽子さんに知らせ度くないと思つて、凡てを隠してゐたのだが、志村君が蘭子の爲に唆かされて陸軍の地圖まで盗み出したこと、それから以後のことは全部知つてゐたのだ」

「すると、それはいつ頃から——」

「待ち給へ」父は倉知を抑へる様にして言つた。「軍機漏洩事件に就いては、志村君がその首魁であることを嗅ぎつけたのは僕だつた。必要のないことだからその経路を省略するが、僕はある機會から奇妙な暗號文を手に入れたのだ。苦心してそれを解くと軍機漏洩事件だといふことが判つ

た。新聞にも少し出たが、それを端緒として手裏をつけて行くと、意外にも、志村君が関係してゐるのだ。お前達のこともあるし、その他にも事情があつて、僕は志村君を外國へ逃がさうと決心したがいかんせん、僕の手許に集めた暗號文を提出することになれば、志村君のことが全部知れて了ふのだ」

「では、では、あの本銀町の警察を襲つた怪盗といふのは？」倉知が、とんきように口を挟んだ。

「さうです」父は倉知に答へた。「暗號文を見たのは幸にもまだ僕だけだつた。で、それを陸軍の方へ渡す前に、僕自身證據湮滅を圖つたわけだ。そして本銀町署へ奇怪な盗賊が入つたなどと言つたのだ。が然し、それは僕の職務的良心が許さん。世間からとや角言はれるのを幸と、職を辭して了つたが、まだまだ、僕には仕事が残つてゐた」

「どんな仕事です」

「實際陸軍の地圖が盗まれてゐるのだ。相崎の手でやつたことだらうが、地圖を寫し取つてあつたのだ。陸軍の方では、原圖が失はれてゐないので安心してゐる風だつたけれど、僕は、國民の一人として黙つてはをられん。と言つて、志村氏は逃がしてやり度いし、その點では大分苦しんだものだ。今考へると、もつと他に遣り方があつた様に思ふのだが、その點に、

複雑になつて了つたのだ」

「さうですね」倉知は言つた。「寧ろ、さうした手段を執らずに、志村氏をやつつけた方がよかつたかも知れませんか。さうすれば、志村氏は蘭子夫人やウキルキンスを殺さずに済んだかも知れませんか」

「いや、君は違つてゐる」父は思ひ懸す斷固として言つた。「君は間違つてゐる。志村君はウキルキンスを殺した。が然し、蘭子を殺しはせん。あの女を殺したのは、この僕だ」

私の父が蘭子夫人殺害の眞犯人であらうとは！ あゝ、なんと意外なことであつたらう。實を言へばそれまで私は、私と陽子との身の上の方へ、より多く氣を奪られ勝ちであつたけれど、父のこの言葉を聞くと、はつとして自分の耳を疑つた。そして倉知は、すぐに訊ね返すのであつた。

「そんなことはない筈です？ あの二本の短刀はどうしたわけなんです」

「二本の短刀のうち、田毎君が最初に発見したのは僕が持つて行つたものだ。それを田毎君が隠したので、僕の計畫がすっかり狂つたのだが、二本目に出たのは、志村君のものなのだ。もう古

いことだ。十数年、いや二十年にもなるだらう。志村君が南洋の土人から買って来たと言つて、恰度、陽子さん、あなたが生れて間も無い頃だつた。あの二本の短刀を儂に見せて呉れたことがある。その時、志村君は過つて儂の指を深く切つて了つたが、お詫びだなど言つて、あ的一本を呉れたのだ。そしてそれが、凡ての間違ひの種になつたのだ」

私は、あの手紙の文句を思ひ出しつゝ、然し、恐ろしく思ひながら黙つてゐた。

「儂は蘭子を殺した後、自殺と見せかける爲にあの短刀を置いて来たのだが、それを田毎君が隠した。すると、他殺といふことになれば勢ひ、あの別館の一室が厳密に調査される。志村君には、それが怖かつたのだ。あの室の特別の構造から始まつて軍機漏洩を計畫したことまでが知れるので、どうしても自殺にして置き度かつたのだ。そこで、名古屋から歸つて来てその話を聞くと、傷口の様子などから判断して、恰度あの短刀がそれに合ひさうなのに氣が付いたのであらう。儂が、同じ短刀で殺したとは思はなかつたらしいが、といふのは、あの相崎といふ老人だ。

あの老人が蘭子に言ひ寄つてゐたさうで、相崎がやつたことと思つたのだ。で、兎に角、凶器さへ出して置けば自殺に見做されると考へて、殊に志村君は、最初の短刀のことなど少しも知らなかつたので偶然にも、全く同じ短刀を、自分が發見したと言つて掛け出たのだ。勿論、それは儂の推察だが、大丈夫當つてゐると思ふ」

「へええ、さうすると、衽めの豫定の、自殺に見せかけるといふことは、一二重に失敗したことになるのですね」倉知が感心し切つた顔であつた。

「さういふ譯です。儂は、蘭子の右手が腫れてゐたなどいふことは全く知らなかつたので、それを田毎君に看破されたのが、第一の失敗でした。あれを田毎君から聞かされた時は、ぎくつとしたものです。壮平、あの時お前は氣が付かなかつたかね」

「いゝえ、ちつとも」私は答へた。そして又すぐに訊いた。「然し、お父さん、どうしてそんなことをなすつたのです」

「儂か、儂はね、あの夜、前に言つた地圖を盗み出しに行つたのだ。署長時代の服の古い奴を着て、まるで泥棒の様にしてお出かけたのだが、志村君が名古屋へ行つたことは調べてあるし、その留守を狙つて耳無稻荷の方から這入つて行つた。前にあの拔路を突き止めて置いたのだが、途中に錠の下りてゐる上蓋がある。それを開けるには、尖端の彎曲した薄い得物が必要なことを知つてゐたので、ふと思ひ付いて、あの半月形に曲がつた短刀を持ち出したのだ。で、書齋へ這入ると、お前が正體なくなつてゐて、蘭子が淫らな恰好でゐるのを見た。それまではそこに誰もゐま

いと思つてゐたのと、その意外な状態とで、儂は、かつとして了つたのだ。蘭子を殺したのは儂の過失だつたが仕方がない。お前を肩に背負つて、證據品になりさうな、さうだ、お前の指紋があるだらうと思つたのだ。あの塚やヨツプを一纏めにして、外へ運び出して了つた。お前は、案配に、翌日の午後まで、ぐつすりと眠つてゐて呉れた」

「では、あの時玄關で見た顔は！」

陽子は始めて言ひかけて黙つて了つた。が、私には今こそはつきり判つて來た。私が窓に見た顔は陽子であつた。そして、陽子はその時玄關の闇の中に見た顔は、實は私の父であつたのだ。

父と私とはたいへんによく似てゐる。父は様子を窺ふ爲に、玄關へ姿を現したのである。それを陽子は見間違へて了つたのであつた。

「で、それから後は言はなくとも大體判つてゐるだらう。儂のしたことは、凡て思ふ通りに行かなかつたが、結局、志村君が外國へ逃げてさへ呉れ、ば、儂の目的は達したのだ、陽子さん、儂は、あなたのお父さんに對して實に濟まんことをしてゐる男です。お父さんを、あそこまで荒まして了つたのは、みんな儂が悪かつたのです。勘忍して下さい」

陽子は、はつとした顔に顔色を變へて私を見た。

私は然し、何も言ひ度くなかつた。父は、猶未だに、陽子の父が剛造氏と思つてゐるらしい。

然し然し、そこまで苦心した父に向つて、私が何を云ひ得よう。父がかくまでにして剛造氏を助けようとした原因、それはもう判り切つたことではないか！

とその時、倉知は遠慮もなく、私から預つてゐた例の封書を、ポント、テーブルの上に投げ出した。私は、ひやつとしたが、倉知は平氣な顔で言つた。

「この手紙は、志村氏からあなたへ宛てた手紙です。志村氏は船へ乗る事を急いだために、それを壯平君に渡して行かれました。僕は、あなたがこの手紙を読んで、それがよしどらいふ事實であらうとも、一番賢明な手段を執つて下さると思ひます。慎重に考へて、間違つたことを言はな

い様に、慎重に事を解決して下さいと思ひます。慎重にですよ」

倉知の言ふ意味は、それとなく私に通じて來た。事實がどうあらうと、慎重なる答へをせよといふのだ。私は、石像の様になつて、父を見やつてゐた。

陽子の手が、ワナ／＼と震へた。

水底の様な沈黙のうちに、父は、その手紙を一枚一枚、はぐつて行つた。そして、途中まで讀

んだ時、ひよいと顔を上げたが、その眼は、陽子の顔をちつと見てみた。そしてそれが、忽ち、赤くうるんで行つた。

「慎重に！」

倉知がも一度言つたけれど、父はそれと同時に口を開いて了つた。

「陽子さん、それではあなたは——」

「え！」

「あなたは矢張り僕の娘だつた！」

なんと、萬一の望、一縷の望、それがこの一言によつて完全に碎かれたのではなかつたか！ 陽子も倉知も、さつと顔色を變へたのだが、父は、顔の筋肉をふるくと躍らせた。

「僕は、僕は、志村君に益々濟まないことをした。こゝに書いてあることは殆んど全部ほんとなんだ。一旦思ひ切つた筈の八重子さんに、僕が再び接近して行つたのは、決して決して、それ程に企んだことではない。志村君が留守勝ちであつたのと、僕の意志が弱かつたのがいけないかつたのだ。そして陽子さん、僕はあなたが僕の娘ではないかといふことも、實を言へば時々考へて見た。さうすれば、僕は志村君に對して、益々贖罪の責任があると思つてゐたのだ」

私は突き上げて来る憤りを辛ふじて抑へながら言つた。

「それを心配しながら、なぜ、なぜ、僕等の結婚を妨げては呉れなかつたのです。僕等は——」

言ふと、父はあつと呆れた様に私の顔を眺めたが、然し、そのうちに父の顔には初めて微笑が、淋しい微笑が浮んで來た。

そして父は、次の様に言ふのであつた。

「お前達を納得させて別れさせるには、僕の恥多い過去を語らねばならなかつたのだ。が、氣の毒な誤解であつた。お前は僕によく似てゐるけれど、お前は僕の子ではない」

「え！」

三人同時の叫び聲であつた。

「世間にある様に、今までそれをお前ばかりか、世間へさへも秘し隠して來たのだから無理はなけれど、お前は僕の姪の子供だつたのだ。姪と言つても四つ程しか年の違はぬ姪だつたが、そのお前の母親は、お前を生むとすぐに亡くなつて了つた。そして僕の家で、又、恰度その時生れ

立ての赤ん坊を亡くしたので、それでお前を貰ふことにしたのだつた。お前達は兄妹ではない。判つたね」

三週間程の後である。ボートレースが終つた後の向島の土手を、倉知彦六と私とは、氣も輕々と歩るいてゐた。

「おい、今日ね」倉知は言つた。「今日は君のお父さんと陽子さんが、二人して見に来てゐたね」

「逢つたのか。父が何か言やしなかつたかね。」

「うん、君のお父さん、近いうちに又船へ乗る様になつたさうだね。ほんとかい」

「さうなんだ。父はねえ、蘭子夫人を殺したし、それかと言つてまだ自首する前に、志村さんに會ひ度いし、それで外國の港々を廻る氣になつたのだ。志村さんに、とても會ひ度がつてゐるのだ」

「無理はないね。さうだらうなア」

二人して一緒に見上げた眼には、淺草の華かな光のどよめきが、ぱつと夕方の空を明るくしてゐるのであつた。

金口の巻煙草

ネオ・ピュエーリタン

木野さんは今夜珍らしくも西寮四番の寢室へ蠟燭とカルキユラスの本とを持ち込んだ。木野さんが蠟燭を始めるのは、試験が近づいた事を知らせるもので、木野さんの様に勉強嫌ひな男も、試験まで餘す處一週間といふ今日になつては、嫌々ながら蠟燭をやらなければ間に合はぬ。然もこの男の悪い癖で、晝間は頭が悪くつて、その上机に向つては勉強が出来ない。木野さんの頭は蝙蝠の眼の様に灯ともし頃から急に明敏になるのださうだが、それでも寢室でのうくと寢をべらなければ落ち付いて本を讀めないものであつた。で、今夜も木野さんの所謂「すげえ色男」ぶりを左團次の青山播磨を一幕見て、オデンを鱈腹つめ込んで、さて食後直ちに勉強してはならぬと云ふ衛生上の見地から、ゆつくり上野公園を一巡して、漸くにして勉強し度くなつた様な氣がして來たので、本郷彌生が丘なる一高の寮へ歸つたのである。

蠟燭を手にした木野さんが二階の寢室の戸を開くと、ぷーんと寢室特有の臭がする。もう十二時を少し廻つた頃で、同室生は皆ぐつぐつと眠りこんで、細長い部屋の中央に木野さんの床が朝抜け出たまゝの残骸を示し、窓際にも一つ主の居ない萬年床が見えた。

「ハハー、順さんが未だ歸らないナ。」

と木野さんは獨言を言ひながら袴を取つただけで、直ぐ蒲團の中に潜りこんで時計を眺めた後、おもむろに自習室から持つて來たカルキユラスを讀み始めたものだ。と丁度その時である。忙しい歩調で階段をバタ／＼馳せ上つて、二階の廊下の曲り角を廻つてこちらへ來る蹺音が、しーんと寢靜まつた舊寮に響いた。

「何んだ、ネオピュエーリアア。」

「……………」

蹺音はびたりと、木野さんの寢室の前で止まつて、木野さんが本から眼を離すと何か異常に緊張した「ネオ・ピュエーリタン事」堀順三君が寢室に入つて來て、返事もせず木野さんの枕許へどつかり腰を下したのである。

ネオ・ピュエーリタンとは木野さんが命名したもので、同室生がその理由を尋ねると、木野さんはかう言つた。

「順さんはネ、芝居も寄席も大好きだし酒も可成やる。いつたい江戸趣味つて様なものを持つて居て華かな事が好きなのだ、そして女も大好きなんだ。だがネ、女の好き方がまあ言つて見れば純潔なんだ。言はゞ美しく咲いた白薔薇の様な女があつたとすれば、花瓣が落ちない様に露を含ませたまゝ、テーブルを隔てゝ向ふに坐らせて、遠くから楽しみながら話してもして見度いつて云ふのが順さんの性格で、そこがネオ・ピューたる所以さ。それでもはつきり飲み込めぬ頭の悪い人は兼好法師の言ひ草ちやアないが、ネオ・ピューリタンと云ふ宗派があつたら順さんが其の典型だと思へばいゝのだ。」と。

さて私は前へ戻つて順さんは相手の顔をやゝ得意氣に見下し乍ら、
「木野さん、濟まないけれど君のマントを貸して呉れないか。それから金があつたら金も五圓ばかり。」

木野さんは順さんが部屋に入つて来た時から可成強い興味を感じて居た。緊張した色白な顔の眉宇には一脈の決意を示し、口許には又誇り氣な微笑すらも浮べて居るのであつた。そこへ更に順さんのからした申出は木野さんを一寸吃驚させて了つたわけである。

順さんは木野さんの驚きに十分なる満足を感じつゝ、次の様に語つた。

「實はネ、木野さん。僕は今一人一人救ふ積りなのだ。僕が今夜本郷一丁目のお茶屋へ行つた歸りに電柱の蔭に倒れて居たらしい男が、ひよろ／＼と僕の目の前へ歩き出したんだ。僕がその男の前へ廻つて見ると、年の頃は十七八だが、どこか身體でも悪いらしい。僕はその少年を呼び止めて事情を訊くと、足別銅山から逃げ出して千葉の實家まで歩いて行く積りだが、どう行つたらいいかと訊くのだ。」

歩くのは大變だから兩國から汽車で行けと言ふと、少年は汽車賃も無いし、實は三日間水ばかり飲んで居るので腹が減つて歩く事も難しいと答へる。何にしても僕は可哀想になつちやつたら、オデン屋へ連れ込んでオデンを食べさせ乍ら聞くとネ。木野さん。僕はこの少年を助けねばならぬと堅く決心して了つたわけだ。」

感情家らしい眼を輝かせつゝ、順さんが口早に話して聞かせた少年の身の上話は、誠にこの情に脆い順さんの涙を誘ふに足るべき憐れな物語りであつた。

その少年は千葉の或る料理店に生れた。幼年の頃の彼の生活は、かうした稼業に特有な華かさで充たされ、他の遊び仲間の子供達からは羨望の眼で見られて居た。處が好事魔多し。彼が十歳の折り亂倫な父は少年の母を離縁して、家の女中を後妻に入れたのである。大抵の女がさうであ

る様に——ましてや彼女は無智な女中であつた——後妻は少年が有して居た先妻に生き寫しの美しい容貌に對する激しい憎惡の念を抱いた……。尤もそれは順さんの解釋であつたが……。少年が新しい母の虐待に堪へ切れずに、東京へ出たらと云ふ極めてあどけない希望を抱いて兩國驛に現れたのは十五歳の暮であつたさうである。

どちらへ行かうか知ら、と彼が國技館前に幾臺もく電車が彼の前を走り去る迄ぼんやり立つて居ると、突然立派な紳士——金鎖りをだらりとチョッキに絡ませた紳士が彼の前に立つて優しく少年を慰めながら上京の目的を尋ねて呉れたのであつた。果てしもない廣い東京の入口に佇んで途方に暮れて居た時である。少年は一も二もなく紳士を信頼し尊敬して了つた。が然し少年は大東京の入口々々に惡魔の群が廣く陷穴を開いて待つて居るとは知らなかつた。

紳士風のポンビキにまんまと引掛つた少年は、それから間もなく恐ろしい銅山坑夫として賣り込まれて了つたのである。未だ十五歳の少年である上に、料理屋に育つた筋骨薄弱な身に、何として坑夫としての勞働が出来よう。彼は三年間、骨もひしやげ肉も擦り潰される様な慘酷な勞働の間々々に、如何にして銅山を脱出すべきかと考へて抜いたのであつた。

苦心の結果彼は一夜監督の眼を掠めて漸く銅山を脱出した。そして東京までは兎も角無事に辿り着いたのであつた。然し誠と言つた様な状態で千葉まで行く事になり困難に見えて来た。而も銅山では一人でも脱走者があると銅山の内狀を社會に暴露する恐れがあるので、多數の人を派して脱走者を追跡して居る、だから少年はよし千葉の停車場までは無事に着いてもそこから又銅山へ連れ歸されて以前に増した慘酷な勞働を強いられるかも知れないと言つて、順さんの眼を憐れみを乞ふ如く眺めたのださうである。

「それでネエ、木野さん。僕はこの少年を千葉の實家まで送り届けてやり度い。ところがこの寒さに少年はマントも無し、又少年の提案ではあるがマントを着せれば姿も變るから、君のマントを僕が着て僕のマントを少年に着せて行き度いのだが、どうだらう貸して貰へまいか。エ君。」少年自身が話した身の上話に自分の想像力を加へて立派な悲劇を作り上げた順さんは語り終つた後、若々しい眼に義侠に燃ゆる眸を輝せながら、かう言つてマントの借用を頼んだのだつた。「うん、ありさへすれば貸せるのだが——實はそら米田さんネ、米田さんに貸したら都合があつて無断で濟まないが處分したから一週間ばかり待つて言つて来た始末なんだ。だからあそこに掛つて居る中村のを借りて行けよ。明日の朝僕から理由を話すから。金は二圓ばかりしきや無いんだがそれで足りないか。」

「うん、ぢやアそれでいゝや。ありがたう。木野さん。」
「氣を付けて行つて來給へ。ぢやア……アツ、一寸待ち給へ、千葉のその料理屋へ少年を連れ込んだ時、先方で快く少年を受け取るかどうか、そこを君うまくやらないと——。」
「なに、僕はそれも考へて居るんだ。先方へ行つたら少年の父に會つて、よく話してやる積りだ。何と云つたつて肉親の子だからネ。それに僕の熱誠で先方の後妻まで、屹度感動させ得る自信もあるんだ。」

「自信つて？ さうか、それぢやアいゝ。行つて來給へ。」

「歸つて來るまで中村以外に話して呉れぬ方がいゝぜ。」

「ヨシ！ 大丈夫だ、さよなら。」

木野さんは順さんがいかにも嬉しうな歩調で階段を降りるのを聞いた。瞬間木野さんは順さんのあの誇り氣な顔貌を思ひ浮べて、その心持を想像した。善事を遂行するのに誰でも悪い心持ちはしない。ましてや足別銅山からの脱走者を護送するには、既に銅山から派遣した追跡者と、何處かで戦ふ場合も豫想されねばならなかつた。

「窮鳥 懐 に入れば 獵夫もこれを殺さずか。これが少年でなくつて少女だと順さんの役割もぐつ

と引立つて面白いんだ。理もなく昔の騎士物語の様な勇ましい美しいロマンスが出来あつた。少女でなかつた事をネオ・ピューリタンの爲に惜しまずには居られネエヤ。」
と木野さんはこんな事を考へながら、順さんが冷たい寮庭の敷石の上を大股に門の方へ急ぐ音を聞いて居たのであつた。

黒い影

片手にしたマントを正門の扉に投げ掛けて、扉の棧を足場に順さんは難なく正門を乗り越え、ひらりと本郷通りへ姿を現した。

一高の門限といふのが誠に奇怪なものであつた。夜の十二時キツカリに正門は閉鎖されるのであつたが、それと同時に寮生は正門を乗り越える権利を獲得するかの如くであつた。入學して未だ間も無い或る生徒が、門限に遅れて十二時過ぎに正門の前へ來た。この不文律を知らなかつた彼は、どうしたものかと途方に暮れて居ると、正門前の交番の巡查が、自分の住所へ歸るのだから、門を乗り越したら良いでせうと教へて呉れたと云ふ話もある。正門は身に疚ましい事の無い人々の出入すべき通路であるからには、門限に遅れても正門さへ通過すれば身に疚しい事のない

證據だと云ふ理由からか、兎に角十二時過ぎには寮生は堂々とこの正門を乗り越す。晝間でも正門以外の場所から出入すると、忽ち二週間以上の禁足に處せられるのであつたが、眞夜中でも正門さへ乗り越せば別に文句は付けられない。雨上りの朝など、正門にははつきりと泥靴や下駄の跡が見られ、時にはオデン屋の無茶飲みが門を越える時腹を押された加減か、門柱の頂天から無惨にも小間物屋が開店され嘔吐が吐き掛けられて居る事もあつた。

で、順さんも門を乗り越すには可成の練習を積んだ方で、この時は多少の得意を感じながら少年に着せるべきマントを手にして、電車通りまで出たのであつたが、少年が一高と帝大との間の小路から順さんに向つて、手招きして居るのを見つけるには可成の時間を費した。

少年は人目を憚る様に周囲を見廻しながら順さんにすり寄つてマントを着せて貰つた。

「長く待たせたネ、心配しやしなかつた？」

「エ、随分寒かつた。」

少年はマントに顔を包む様にして答へた。仰いで見れば時計臺の針はもう一時を過ぎて、冴え渡つた空には、無数の星が冷たく瞬いて居るのであつた。

「だが、君。」と順さんは訊いた。「どうしてあんな所に隠れて居たんだエ？」

「でも、正門の前に交番があるでせう。」

「交番がどうして怖いんだ。却つて安心ぢやアないか。」

「だつて銅山では警察の方へも金を出して逃亡人を捕縛させるんです。あそこに立つて居ても、もしお巡査さんから疑はれて何か訊かれたらおしまひですもの。」

「へエ、警察でも君を保護しないのかナア。」

「さうですとも。」と少年は元氣よく言つた。「警察が怖くなかつたら足別から脱け出した時、すぐにも警察へ駆け込む位のことはいしすよ。」

「うむ、官憲の墮落だ！ 畜生、癩だナア。」

さう云つて、もう一度振り返つて一高前の交番を眺めた。順さんの胸中には、勃然と、公憤に似たある感情と新たなる勇猛心とが燃えて來た。そして少年をその實家へ送りとどけると云ふこと以外に、横暴な資本家、及び官憲に對抗するといふ尊い意識が、その全身の血潮を湧き立たせた。時間が時間なので、本郷通りも全く人通りは杜絶えて、三丁目の交番も巡査はボックスの中に引き籠つて居た。飯田町邊りの貨物列車の汽笛が鋭く冬の夜の空気を震はして響いて來たが、それも元の寂寞に歸ると、彼等の登音のみが凍てついた街に無氣味に鳴り渡つた。

順さんは興奮して居たが寒かつた。通りすがりのカフェー花野と看板の出た小さな店を、脊の高い順さんが曇り硝子の上から覗いて見ながら言った。

「オイ君、あんまり寒いから一寸こゝで暖まつて行かない？」

「明るい所は怖くて駄目です。外で待つて居ますから。」

「ナーニ、大丈夫だ、君、僕が付いて居るぢやア無いか！」と順さんは芝居ならこゝで胸を一つどん！と叩く處だが、マントを一寸引き上げて襟を合せながら、「向ふだつて手出しをしないで。何しろ一高生には巡査も一寸手を出せないんだから。」

それは實際順さんの言の如く、少くとも本郷通りでは一高生は巡査から恐れられて居た、と云ふより敬遠されて居たのかも知れないが、然し少年はカフェーに入る事をどうしても肯ぜなかつた。そしてそれについても順さんは、少年の心持を甚だ可憐なものに考へたのである。

「ではまあ、止め様。だが君僕に遠慮しちやいけんヨ」

「イエ、あんたこそ私に遠慮せずに。」少年は心持眼を伏せ乍ら、「その方が——」

「うん、まあいゝや、兩國まで歩けばかへつて温まつて来るだらう。」

かう言つて、カフェーの前を歩き出さうとした順さんが何気なく後を振り返つた時、順さんは三

丁目角の兼安の邊にふと黒い影を認めた。と同時に少年が怯えたやうな眼をして、「おや！」と云つた。しかしちつと目を据ゑてみると、もう人影は何處にもなかつた。

順さんは寮歌を小聲に唱ひながら神田明神前のダラ／＼坂にかゝつた。そして「冷き智慧に欺かれ……」と唱つた時である。少年が突然。

「尾けてやアがる！」

と小聲で叫んで逃げる様に、片足を横に踏み出して身體をくるりつと廻した。はつとした順さんは、逸早くその肩に手を廻して、抱きすくめる様に少年の身を庇ふと同時に、後の坂の上を吃と見上げた。と、順さんの心臓がドキンと躍り、肩の邊りの筋肉がピリ、と痙攣したのであつた。

坂の上、神田明神の前に、スツクリと立つた黒い影が紛れもなく、自分等二人の方を凝視して居るではないか。その瞬間、順さんは、先刻兼安の前に見掛けた黒い影を思ひ出した。

「可笑しな奴だな、彼奴！」

順さんがさう言ふと、少年はかすれた上づつた聲で、

「銅山から僕を追つて来た奴かも知れませんが、さつき帝大前でも見ました。」と云つた。

「うん、さうかも知れんネ。さうすると……」
 順さんの額には冷たい汗が幾筋となく流れ出し、脳天には氷の刃を刺し込まれた様にズーンと何か染みるものがあつた。

「到頭やつて来たか。少年の爲に闘ふべき時機が——」
 すると順さんの足は不思議にもかく／＼と慄へ出し、少年は逃道を求めるかの様に周囲をきよこきよと見廻した。

順さんは決して卑怯者でも又臆病者でもなかつた。が、と云つて大膽とも言へなかつた。只純潔な少年に對する同情とロマンスを好む性格とが、彼をかうした立場まで連れて来たのであつた。
 「ありやア山からの追手に違ひありませんよ。だから、此所であなたと別れさして下さい。さうすれば彼奴、私の方を追つて來ます。私が捕へられるのは仕方ありませんけど、あなたに迷惑をかけては濟まないから。」

然しこの少年の殊勝なる申出は順さんの勇氣に一段と力を與へて呉れた。そして「追跡者が何んだ、向ふも一人、こつちも一人、いや二人だ、負けるものか」と決然たる決意を口許に結んで、順さんは少年の肩をどんと叩いた。

「大丈夫だ！ 安心し給へ、あんな奴の一人くらゐ。」

「イエ、ですけれど二人で歩くと反つて眼に立つて彼奴から逃げられません。」

「うん、そりやさうだが……」

「ですからこゝで一旦別れて別々に兩國へ行きませう。」

「うーん、駄目だ、そりや最も不得策だ。君と僕と二人居るから奴も迂濶には手が出せないんだ。安心して一緒に行くサ。」

順さんはもう可成落ちついて居た。が未だ後の黒い影をひどく氣にしながら松住町から萬世橋、和泉橋と進んで行つた。昌平橋の上にも黒い影が立つて居るのを見だし、柳原河岸でも古着屋の方の側を歩く黒い影を見た。

不意に後ろから「野郎待て！」と怒鳴られはしまいか、太い棍棒が突然電柱の蔭から振り下されはしまいか、などと彼は少年の爲に出来るだけ平靜を保つて歩いては居たもの、冬の眞夜中であるのに汗が出て時々ハンカチで額を拭くはねばならなかつた。

「もつと暗い所を歩きませうか、見付かるから。」
 と少年が言ふのに對して、

「イヤ、もう確實に見付けられて居るんだから、暗い所を歩くのは策の得たるものでない。」
 と順さんはとれば横道に入りたがる少年の手を引いて電車通りを進んだ。少年は順さんが不思議に思ふ位に歩き方が鈍くなり、且つ又幾度となく二人が離れぐに兩國驛へ行く事を申し出したが、彼は斷然としてこれを退けて了つた。

「いつそ交番へ話して君を安全に千葉へ送る様にしようか？」
 「だつて巡査は駄目ですア、事情を話したら却つて銅山の方へ私を送ります。」
 「イヤ僕が巡査を説くよ、そしたら巡査もマサカ露骨に向ふの肩を持ってないぜ。」
 「駄目、駄目、そんな事駄目だつてば！」と少年は懸命に叫んだ。小さい聲ではあるが必死の力を籠めて、且つ強い恐怖の念を顔に現はして「あんたは銅山の行き方を知らないんだ、前に脱走した男は大抵警官に捕縛されたんです。」

最後の一分間

兩國橋を過ぎるともう停車場はちき近くである。順さんは新たなる不安が襲つて來た。本郷通りから今迄の長い間、この追手は自分達を襲撃しなかつた、それは恐らくこちらが二人

であるのに對して先方は一人である點ではなかつたらうか。そして少年の言ふ如く、それ程嚴密に脱走者を追躡するものならば、兩國驛——少年が千葉へ歸るには必ず立ち寄りねばならぬ筈の兩國驛にも、他の奴が見張つて居ないとどうして斷言出來よう。

然しこの心配は幸にして杞憂に終つた。驛を着いて見ると時計は二時半を示し、眠むさうな眼をした驛夫が、彼等を迂散臭ささうに見たのみで追手らしいものは見えなかつた。

汽車の出る迄あと二時間半。その間だけ無事に済めばこつちのものだと順さんは安心して、身體を待合室の腰掛けに長々と横たへ様とした時、

「アツ！ 未だ居やがる、畜生！」と少年が恐怖に充ちた聲を上げた。

なる程驛の前庭の隅にはあの黒い影がちつと佇んで居るのであつた。然し順さんはもう恐れなかつた。

「心配し給ふな、もう大丈夫だよ、あとは汽車へ乗るばかりだ。それにぼつ／＼汽車へ乗る人が集まつて來たから多勢の前では益々向ふで手が出せないからネ。」

少年は不服らしく下を向いたが、何か考へるらしく、穿いて居た草履でコンクリートの床をヂヤリヂヤリと撫でて居た。

「あのー、斯うして呉れませんか、彼奴を撒く爲に斯うして見度いんですが。」
と少年は眼を輝かせて言つた。

「ネエ、あんたと僕と一緒にこの待合室を出て近所の暗い路に入るのです。私は歩きながら暗い露路を探し出して一とまづあんたと離れて身を隠します。あんたはそのまゝぶらぶらゆつくり歩いて再び明るい所へ出た時には彼奴、あなた一人きりになつたのに驚くでせうつて考へななです。なーに、私はうまく隠れますヨ。」

「そりやいゝ、そりやいゝ……が、それでは五時の汽車へ一緒に乗れないぜ。」

「うーん大丈夫ですよ。あなたの時計さへ貸して戴けば、汽車の出る一分位前に馳せ付けて汽車へ乗りますヨ。」

「その一分間に彼奴に見付からないかしら？」

「エー、僕はこれでも蟻も逼ひ出られない銅山から抜け出したんです、可成すばしつこい方ですよ。」

この際、こうした手段より他無かつた様に見えた。又少年の恚うした機智に富んだ計畫は九分通り成功する様に思へた。

「それぢやア、ひとつやつて見るか。ほんたうにうまく行らなくつちやネ。」

「エー、安心して居て下さい。私もこゝまで逃げて來たんです、九分九厘といふ處でへまを行つちややりきれませんヤ。」

「さうく。然しネ、最も重大な最後の一分だ、注意に注意してネ。」

「で、あんたは平氣でゆつくりどの車室でもいゝから乗り込んで下さい。私は後から——」

「さうだ。乗り込みさへすればどこかで逢へる。ではもう一寸待ち給へ、切符を賣り出したら君のも買つて渡して置くから。そしてネ、若しその最後の一分が危険と見たら無理をせず機会を窺つて此處から一旦逃げて、あとで一人で千葉へ歸り給へ、こゝに金が三圓あるから。」

少年は何とも感謝に堪へぬといふ面貌で彼から三圓の金を受け取り且つ彼れのウォルサムの銀時計まで借りた。

暫く経つと切符を賣り始められたので、順さんは二枚の赤切符を求め、その一枚を少年に渡し、呉れぐも注意する様に言ひ聞かせ、且つは寒い曉方、露路に身を潜めるのは辛いだらうからと、自分のマントをも少年に二重に纏はせた。

かうしてあの黒い影を撒くべき計畫は申分なく出來た。彼が再び驛の待合室に現れた時、前庭